

風の記録

(第 2 版)



2025年 4 月

東京農工大学
風の記録 Nets

目 次

1 風の記録(第2版)刊行に当たって	-1-	
2 原稿依頼の応答状況	-2-	
3 記録集(50音順)		
猪口恆有	-3-	鳥谷靖
岩崎徹	-3-	長塚隆
上田勉	-4-	西村孝彦
大木寿	-5-	平井保夫
大塚克巳	-6-	福島安正
大村長則	-7-	福地次雄
小川和雄	-8-	藤田正三
片山むぎほ	-9-	藤本聡志
桂川雅信	-10-	渕野雄二郎
金子良夫	-11-	堀俊一
桜井嘉夫	-12-	松澤武陽
信太秀紀	-14-	宮井迅吉
谷内英治	-15-	峯村富治
武内進	-16-	武藤軍一郎
長誠一郎	-17-	村上光江
土居修一	-18-	横林和徳
任海正衛	-18-	吉野りよみ
富田廣	-19-	渡辺政一
4 亡くなられた方々の思い出(50音順)		
熱田(旧性萩沢) 記述者は	渕野 雄二郎	小川和雄
内山 修二	富田 廣	
大崎 公雄	宮井 迅吉	
上山 修	桂川 雅信	
木塚 敏男	信太 秀紀	
鈴木 一郎(旧性奥田)	富田 廣	
高嶋 祐治	宮井 迅吉	
田淵 博	上田 勉	桂川雅信
萩原 修二郎	宮井 迅吉	
資 料		
1. 農工大学生運動の歩み		-44-
2. 寮運動の歩み		-45-
3. 風の記録 Net のあゆみ(渕野)		-48-
4. 思い出の写真		-写真1~6-

編集後記

<表紙の写真>

奥秩父のシラビソ立ち枯れの調査のため雁坂峠上空(埼玉・山梨の県境)でヘリコプターから撮影したもの。「酸性雨でシラビソ林が枯れ、しかも拡大している」という報道を受けて、約10年間、様々な調査を行った。シラビソの立ち枯れは「縞枯れ」という自然現象であり、気温上昇によるダケカンバ、笹等の進入で、却って減少してきている。

1990年代、関東地方のスギ枯れが酸性雨の影響かと報道され、学校の副読本にも掲載された。しかし、人工酸性雨暴露実験などでスギは耐酸性植物である事が分かった。お寺などのスギ枯れ分布では参道の並木が梢端枯れしても裏庭の杉林の多くは健全、林業用のスギ林も、外縁部以外は健全である。雨は空から降るので酸性雨が原因なら、全てが枯れなければ説明がつかない。現場を見ることの重要性は明らかであろう。結局、スギの梢端枯れは温暖化を先取りした都市のヒートアイランド化による乾燥(水ストレス)が主因と考えられる。(撮影・筆:小川)

1. 「風の記録」第2版の刊行にあたって

(1) 企画の経緯

2011 年 5 月に「風の記録」第一版が刊行されました。

きっかけは、1970 年代当時、自治会や学生会、寮委員会、農ゼミなどに親しく関わってきた皆さんの多くが、卒業後 40 年以上が経過したことから、その豊富な人生経験を語り合い、近況などを交流しあおうと企画されたものです。

連絡先を調査し、判明した 82 名の方に原稿を依頼し、結局 57 名の方々から応答をいただき「風の記録」第 1 版となりました。

同年、東京農工大学同窓会では、同窓会員のサークル活動や地域貢献活動を支援するための交付金制度を創設しましたので、2013 年 12 月に、「風の記録」関係者が集まり、「東京農工大学同窓会同好部会（現、同好会）“Nets 風の記録”」を立ち上げる事になりました（本学「同好会」については本文 6 のHPを参照してください）。以後、「コロナ」のひどかった一時期を除いて様々な講演会、シンポジウムなどを積み重ね、後輩たちとの交流も始まり、現在に至っています。

今年、「風の記録」第 1 版がつくられてから、はや 13 年が経過し、多くの方々が卒業後いわゆる「50 周年」を越えるに至りました。物故者も増えてきている年代となり、改めてお互いに半生の経験などを交流したり懐かしむのも良いのでは、と考えるに至りました。

「Nets 風の記録」の活動に新たに参加されてきた方々も、多くは 60 代を越えてきており、そんな新しい方々を含めて、改めて交流しようと、2024 年 2 月末に、渕野雄二郎 宮井迅吉 渡辺研 長塚隆 小川和雄の 5 名が集まり「編集委員会」として「風の記録」第 2 版を計画いたしました。執筆方法等は以下の通りお願いいたしました。

(2) 原稿執筆のお願い

原稿は別添の様式にて執筆してください。様式は Word のリッチテキスト形式となっています。一太郎等にも読み込めます。枠幅も変わります。

① 主な履歴

新規に加わる方もおりますので、お互いに、主に何をしてきた人かを知るためです。

② 記述欄

学生時代以降、自分の半生を振り返って思うこと、印象に残ること、やり残したこと、或いは、今、もっとも気になっていること、言いたいこと等、何でも結構です。思うことを自由に記述して下さい。

なお、初めての方や、前回、書き足りなかった方は「仕事の変遷」や「自己 PR」等でもかまいません。言っておきたいことを何でも書いて頂いてかまいません。

③ 近況

卒業後、概ね半世紀の時が経過した今、お互いの近況を交流したいためです。

④ 今後の連絡先

冊子には掲載致しませんが、冊子作成にあたっての連絡や今後の連絡先を再確認するためです。冊子の関係者の問い合わせには「編集委員会」でお答え致します。

○できれば近況が分かる写真 1～2 枚をお送り下さい。まとめて掲載する事で懐かしく、一層感慨深いものになると思います。

(3) 原稿の執筆方法

1) PCをご利用の方

添付した様式に記入し、電子メールで送付してください。

「明朝体 11 ポイント」を基本とし、字数が枠を超過しそうときは①～③の枠が動きますので、融通して下さい。それでも超過するときは 10.5p、10p にしてもかまいません。②で何を書いてよいか迷う方は、③近況を詳しく、でもかまいません。

2) スマホ利用の方

添付した様式が使えない場合は、様式の番号にしたがって

① 主な履歴

②記述欄

③近況

④連絡先 のように、ベタで記述して送付してください。

3) PC, スマホ等をご利用でない方

郵送した様式に記述し、送付して下さい。そのまま「印刷」する場合もありますので読みやすい字でお願いします。

(出来るだけ費用をかけないで作成するため、恐縮ですがお手持ちの封筒に切手を貼って郵送して下さい、ご協力をお願いします。可能でしたらできるだけ電子データでお送り下さい)

(4) 原稿の送付先

小川和雄あてをお願いします。

問い合わせ等は、下記 E-mail にてお願いいたします。

E-mail のご利用の無い方は、小川あて電話でお願いします。小川(略)

a..PC,スマホの方

E-mail eigerks@yahoo.co.jp 小川和雄あて送信してください。

b.郵送の方

送付先: 小川和雄あて(略)

(5) 原稿の締め切り

2025 年 1 月 10 日まで

(6) 「風の記録」第2版の刊行方法

原則として

東京農工大学同窓会の同好会のページで P D F 版を無料で公開する予定です。

<https://tuat-dousoukai.org/news/news-class/>

(参考)

同好会一覧 <https://tuat-dousoukai.org/party/doukoukailist/>

同好会だより 2023 年度活動報告 <https://tuat-dousoukai.org/club/>

*みなさまへの成果物の届け方については、現在、検討中です。原稿の集まり具合や費用面などを考慮し、方法を選択致します。(例) HP 公開、CD 送付 冊子送付など

2. 原稿依頼の応答状況

「編集委員会」で原稿依頼する範囲を検討し、住所やメール等の情報を持ち寄り、その結果、95 名の方に依頼することになりました。メール依頼は 45 通、そのうち届かなかった方 9 名には再度郵送した結果、**44 名の方**には届いていると思われます。

郵送したのは 50 通、不達が 12 名なので届いたのは 38 名でした。再調査しても 10 名の方の所在が解らず、結局 **40 通**が届いたと思われます。したがってメールで 44 名、郵便で 40 名、合わせて **84 名の方**に依頼できたことになります。

その結果、メールでは 44 名中 26 名が、郵送では 40 名中 8 名、合わせて **34 名の方**から原稿をいただくことができました。なお、諸事情で書けない、と連絡があった方が **3 名**、既に亡くなっていた方が **2 名**(土屋敏明さん、内山修一さん)おられました。

また、これまでに分かっている亡くなった方 10 名の「思い出」を身近だった方に依頼し、9 名の方について掲載することが出来ました。

3. 記録集（50音順）

氏名 猪口 恒有 S46年 農学科卒業 大分県在住

①主な履歴

夢列車「絆」代表

②記述欄

卒業後の今76歳

早くも76年の人生！ まだわたしには、死という感覚は全くありません。
取りあえずこれでいか！ こういう「感度」で今までなんとなく、生きてきた感じです。だから、このままいくと恐らくノー天気ゆえに、100歳は超えるだろうと思っています。

卒業後は生協活動に関わってきた為、生協に就職し2年間、組合員訪問活動その後2年間は、店舗供給野菜担当に従事してきました。実は「この4年間」が私の人生を決定づける4年間でした。生協での活動を終えた後郷里の大分に戻り農協連合会組織に入会しここでは、店舗組織活動を主に石油事業、共同購入、葬儀事業、炊飯加工事業、定年前の2年間は事業改革を担当しました。生協4年 農協32年間のサラリーマン生活を終え58歳で自由な身になりました。

定年後4年間、定職をもたず、毎日をぶらぶらと過ごしていました。ある日量販店の方から、猪口さん産直事業を根本からやりたいのですが！という話が持ち上がり、暇だったから、「とりあえずこれでもやってみるか」という想いに立ち始めようとしたのが62歳でした。最初はうまくいかなければやめればよいとおもっていましたが、どういうわけか、やった企画すべて大当たりでした。現在はもはや76歳そろそろやめようか！との想いもしないわけではないですが、まだまだやりたい仕事もありますので、つづけようか！とも考えています。

あとやりたい仕事は、①「有機農業農法の普及」 ②「耕作放棄地対策」非常に大きな目標ですが、とりあえず手をつけてみるかと考えています。

サラリーマン生活では、多くを学びました。

苦しいとき、投げ出したいときもありましたが、地獄のような生協4年間と今を比較したならばどうかと？！そう問うたならばなんちゃない！まだまだいけると発奮の繰り返しでした。ただ、振り返ってみますと…『小欲に走らず大欲を目指しながら、素晴らしき友を得た』ことでした。

これからも生命ある限り、地域に適合した形を産直事業という方式で一翼を担えればと願っています。皆様かたのご健康をねがってやみません。

大変投稿遅くなり申し訳ございません。

氏名 岩崎 徹 S42年 農学科卒業 北海道在住

①主な履歴

②記述欄

私が東京農工大農学部を卒業したのは1967年であるから、もう58年になる。歳月の経つのは本当に早いものである。

卒業後は農工大の大学院修士課程、東北大学の博士課程に進学し、1976年、縁あって札幌大学経済学部に着任した。学生時代はアルバイトと学生運動にかまけ、ろくに講義にも出なかった私が教壇に立つなんて不思議な気がしたものである。講義科目は農業経済論・日本経済論・地域経済論など。札幌大学には38年在職したが、実に楽しく有意義な教育・研究生活であった。

その中でもゼミ生と一緒に過ごした日々は忘れられない思い出である。ゼミナルといっても農工大のような国立・理系ゼミとは趣が違ふ。私学のそれも文系のゼミは選択科目の場合も多く、多人数で時間の制約もあり、いきおい輪読中心の講義とあまり変わらないものが多くなってしまふ。私は、「フィールド・ワーク」を中心とした「生きたゼミナル」の運営をしようと試行錯誤を繰り返した。そして、これからみる岩崎ゼミの「定型」が出来あがったのは赴任して6～7年たってからである。

岩崎ゼミでは、毎年「農と食」や「地域」に関するテーマを決めグループで調査・研究をしてきた。調査・研究は現場主義に徹する。10月の大学祭ではシンポジウムを開き、その成果を報告書としてまとめる。テーマは、ゼミ生が討論の末決める。米や牛肉の自由化、北海道の有機農業、新規参入農業、農業生産法人、食品表示、学校給

食、「中食」、TPP 等々であった。ゼミ生 20 ～ 30 人を 3,4 年混合の 4 つの班(歴史・理論、政策、アンケート、調査の各班)に分け班ごとに行動する。カリキュラム上のゼミ時間は各年 90 分であるが、とても足りず週 2 回は遅くまで、そのほかはバイトを調整しあい任意の時間を使う。大学祭前の数日や、懸賞論文締め切り間際には研究室に泊まり込みになる。

夏休みは北海道の農山漁村、商店や企業の調査を行い、アンケートを取る。農村調査の場合は、離農跡家、公民館・集落の集会場等での泊まり込みの自炊。時には調査農家からの差し入れがあり、一緒に飲食しながら話を聞く。

シンポジウムでは多くの札幌大学学生、他大学の学生、研究者、農業団体や農民、自治体職員、ゼミ卒業生等が参加し総勢 50 ～ 80 名にもなる。司会、レポーター、挨拶、設営等々はもちろんゼミ生全員があたる。大学祭ではほかに模擬店を開き、北海道牛肉を焼き有機野菜を販売した。

シンポジウムが終わると、3 年生は調査報告を研究論文としてまとめ、学生懸賞論文に応募する。4 年生は卒論(岩崎ゼミは必須＝卒論提出は学部で 10 名位)に取り組む。大学懸賞論文は毎年最優秀賞に輝いた。研究論文は印刷され、新聞、ラジオ、テレビでも取り上げられた。苦勞も多いが、その達成感は言葉に尽くせないようだ。ゼミ生は「学ぶ楽しさ」を知り、社会の現実を学び、個人の役割と仲間の大切を知る。卒業する時は、人間的に確実に成長し逞しくなっていく。それをみるのは教師としてのこの上ない喜びである。彼らは実に仲がよい。1 ～ 2 年を通して「寝食」を共にし、共通の目標に向かって活動するからであろう。卒業してからもよく集まる。岩崎ゼミには同窓会がある。「学遊会」という。岩崎ゼミのモットー「よく学びよく遊び」からとった。本当はこれに「よく飲み」が加わるのであるが…。

私は 11 年前に札幌大学を退職した。私の古希・退職記念と岩崎ゼミ 35 周年記念パーティには、全国・全道の卒業生 64 名が集まってくれた(写真覧1ページ目参照)。岩崎ゼミ生同士の結婚は 3 組ある。

毎年、私の誕生日には十数名の同窓生が集まり祝ってくれる。全国から同窓生が札幌の拙宅に寄ってくれる。昨年、岩崎ゼミ 16 期生(1994 年卒論)が 30 年ぶりの同期会を開き私も招かれた。同期の卒業生 9 名中 7 名(広島、川崎、東京、函館、苫小牧、札幌)が札幌に集まり大学祭、卒論の苦勞話に盛り上がった。今年も同窓生の集まりが企画されている。楽しみである。

岩崎ゼミは私の人生の宝である。

氏名 上田 勉 S46年 農業生産工学科卒業 福島県在住

①主な履歴

土木技術者として、東京都葛飾区役所に勤務する。東日本大震災・福島第一原発事故後、宮城県気仙沼市、福島県檜葉町・大熊町で復興の応援職員として勤務する。職場では組合活動、地域ではマンション管理組合の役員などをする。放送大学修士課程で、「震災遺構の保存」について論文を作成した。また、現在同じく放送大学の学部で、「福島第一原発事故における病院の避難」について論文を作成する。自分の人生について、あまり後先のことをきちんと考えないで生きてきた。

②記述欄

学生時代は、農学部学生自治会委員長などとして、勉強はほとんどしなかった(卒業後深く反省)。2 年生の時、体育実技の出席日数が足りなかったが、先生が「上田は学生運動をしていて、体育も同じ運動だから単位をあげる」と言われたことが印象に残っています(古き良き大学だった)。

私の在学中は 70 年安保闘争の真只中で、また学園民主化闘争やベトナム戦争反対の運動も盛り上がった。美濃部革新都政の時代で、戸別訪問の容疑で逮捕されて、府中刑務所にもお世話になった(拘留された)。亡き母親が差し入れをしてくれた弁当のことを、今でも思い出します。

1975 年 4 月から 2013 年 1 月まで、葛飾区役所に勤務した。約 38 年勤務したが、後輩から「上田さんは組合活動をしていて、仕事中的アディショナルタイムが半分ぐらいあるのでは？」と言われた。非常勤で職場を自主退職する時、引き留められるのではないかと思ったが、誰にも引き止められなかった。一方、マンションの管理組合の理事長をしていて、役職を退任するのは大変だった。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と福島第一原発事故が、私の後半の人生を変えた。宮城県石巻市や福島県南相馬市にボランティアで行くうちに、自分でも何かできないかと思った。土木職だったので、たまたま宮城県で応援職員を募集していることを知って応募したら、採用された。募集人数よりも応募人数の方が少なかった。

3 年 2 カ月間、気仙沼市役所で、漁港の防潮堤の計画を担当した。漁師の人達との交流は今でも思い出されます。最初は、「どうせ上田さんは半年もしたらいなくなるから」と言われて相手にしてもらえなかったが、3 年目には「まだいるのか。上田さんもとうとう気仙沼の人間になったな」と言われるようになった。

その後、最後の仕事は原発事故の福島県でと思って、櫛葉町で 4 年間、大熊町で 1 年間、役場の仕事を手伝った

ライフワークは、「二度と原発事故を起こしてはならない」という決意です。安全工学の先生が言っていました、「人間の技術で、100 % 安全はない」ということです。また、科学哲学から考えても、「核と人類とは共存できません」。

この間、原発事故における病院避難について、医療関係者の方達に、聞き取りをしています。災害の時の一番の犠牲者は、病人・障がい者・高齢者などの生活弱者です。福島の経験を後世に伝承することが、私のライフワークです。

今までに、30 組みぐらいの方達を、被災地に案内しました。皆様も、是非福島へ来てください。

能登半島地震の被災者の方達の復興に、思いを寄せています。歩くことが不自由なので、ボランティアに行けなくて、残念です。

③近況など

現在は無職で、年金生活です。平日の午後は、“核や原発に反対する”宝鏡寺伝言館(櫛葉町)で、午後ボランティアで留守番をしています。また、福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館(双葉町)で、月 1・2 回「原発事故における病院避難」についての語り部をしています。

趣味は映画鑑賞とクラシック音楽のコンサートです。死ぬまでに、外国文学と日本文学を読むつもりです。車が必需品なので、運動はほとんどしていません。体力は落ちています、気力と好奇心は何とかあります。

氏名 大木 寿(宮井代筆) S42年 工業化学科卒業 神奈川県在住

①主な履歴

1. 1943 年東京生まれで 5 人兄弟の末っ子です。一浪して工学部の工業化学科に入学し、学生時代は同僚の宮井君などと山に登ったり人生論を闘わせた記憶がありますが、さしたる活動をする事もなく卒業しました。

2. 1967 年、電子部品メーカーの昭和無線(現 SMK)に就職し、組合づくりをしました。1971 年に神奈川工場で組合を結成し、委員長に選ばれました。

3. 会社は組合つぶしのために、私を配転命令拒否したことを理由に解雇、組合員の脱退を迫りました。6 年半のたたかいで勝利し、解決金を得て、私は会社を辞め、労働組合の仕事(専従)につきました。

4. 1987 年全国一般労働組合神奈川地方本部の副委員長に選出されました。労働相談や組合づくり、解雇や倒産、経営危機などの対策とたたかいに明け暮れました。

5. 1989 年 全労連・全国一般労働組合が結成され、中央本部書記長に選ばれました。

6. 2002 年 全国一般中央本部委員長になり、全国労働組合総連合(全労連) 20 回大会で副議長(非専従)に選ばれました。2009 年に再任されました。この間、いろいろな組合や職場に呼ばれてお話することも多く、農工大の同時期の仲間の桜井さんの職場にいった話したことも宮井さんに言われて思い出しました。

7. 全国一般の専従を定年退職で退任してからは地元の自治会や、後援会、年金者組合の活動をしています。

②記述欄

昔のことはだいぶ忘れましたが、毎日、地域の仲間といろいろな行事を楽しんでいます。高血圧の薬は飲んでいますが、毎日ジョギングをして頑張っています。

氏名 大塚 克巳

S45年 製糸学科卒業

群馬県在住

①主な履歴

1970（昭和45）年 東京農工大学工学部製糸学科卒、群馬県製糸技術センター就職、以後群馬県蚕業試験場、群馬県蚕糸課、第49回田国全国植樹祭企画課、群馬県林務部緑化推進課、群馬県総務部広報課、群馬県総務部総務課、群馬県特別政策本部、2005（平成17）年前橋市副市長、2009（平成21）年前橋市退職。

1972（昭和47）年から1995（平成7）年まで群馬県庁職員労働組合中央執行委員（専従3年）、前橋支部長。

②記述欄

宮井さんから風の記憶の原稿を書かないか誘われて、改めて東京農工大学を見つめる機会が与えられた。

1970（昭和45）年に群馬県庁に就職して、群馬県製糸技術センターに配属になり、3年目から群馬県庁職員労働組合の中央執行委員、仕事は、製糸技術の開発研究に携わってきた。しかし、時代の波には抗えず1987（昭和62）年に国内最大手の片倉工業（株）富岡工場が、創業を停止した。同時期に1982（昭和57）年に農工大では製糸学科が、高分子工学科に再編に成り、製糸関係専門は農工大から消滅した。全国的にも大半の製糸工場が廃業を決めていた。この歴史の転換点に立って「富岡製糸場を世界遺産にする」ことを私の個人的な目標にした。

しかし、私のポジションの関係や片倉工業（株）の社内事情などがあり世界遺産構想が具体的に動き出すのは更に10年の時間を要した。私は、特別政策本部に異動していたこともあり仕事としては世界遺産構想を思い切り推進出来る立場になった。だが、2年後には定年も迫っていて「世界遺産構想が、実現するまでのプロセスをしっかりと確定する」ことが最大のテーマとなっていた。

この世界遺産構想を研究する過程で東京農工大学の果たした役割がどんなに大きかったのか良く理解することになる。在学中は、さしたることも知らずに「たかが三流の国立大学」位にしか思っていなかったこの大学が、実は、明治時代初期から日本が最重要と位置付ける製糸や養蚕技術の最先端に立ち、この国の近代化・経済基盤の土台を作ったことを知ったからだ。

日本は、長い鎖国から開国、維新を経て新しい国作りをすすめるための外貨獲得が至上命題で、その中心が生糸貿易であった。そのために1874（明治7）年の「内務省蚕業試験掛」（東京農工大学の母体）をスタートに国家を上げて取り組みを強めた。現代流に言えば明治の「IT産業」は、「養蚕・製糸」だったのだ。横道になるが富岡製糸場建設（1872（明治5）年）以前の1870（明治3）年に前橋にはスイスの技術を導入した「前橋藩営器械製糸場」が稼働し、全国から技術者の視察や研修者が訪問し大賑わいであったと記録に残っている。富岡製糸場建設の中心人物のブリューナも視察している。

さて、「富岡製糸場世界遺産構想」は、提案当初は、県議会では全く受入れられず、全会派が疑問・反対で、この説得に大きなエネルギーが必要であった。県民感情も「世界遺産になれば良いが富岡あたりの製糸工場じゃあ世界遺産は無理」という物だった。県民が、思い描く世界遺産は、ベルサイユ宮殿や万里の長城などメジャーな観光施設ばかりで、産業世界遺産のイメージは皆無であることに原因があった。幸い小寺弘之知事（当時）は、富岡製糸場やシルクについての深い造詣を持っていたことが「富岡製糸場と絹産業遺産群」が実現した大きな力であった。また、一例ではあるが、荒船風穴（蚕種を保存する天然の冷蔵庫）に関する文献には東京から優秀な研究者（農工大の先輩）が調査に来て、山中を何日も調査して風穴を見付け、天然冷蔵庫の設計をしたことが記録にあり、県内の製糸工場には農工大の先輩の足跡が数多く残っている。

私が、大学在学中にこれらのことに気付いたか、講座等があれば（実際はあったのかも知れない）在学中に深めた研究が出来たと思うと残念の限りだ。農工大学には、製糸技術が果たした歴史的な業績を後世に残す発想がなかったのだろうか？世界遺産構想については、信州大学繊維学部によるところが大きかった。

私が製糸技術センターに就職して初日のあいさつで「群馬県の製糸技術研究や技術史の研究を深めたい」と発言したことが大きな問題になり、所長から「県民が必死になって営業しているのに技術史の研究するのだったら今すぐ辞表を書け」と叱られた。だが、叱った所長も大学の先輩だったので後で「こっそりやるなら認める」と励ましてくれたことは今でも記憶に残っている。

私は、世界遺産構想を県議会や県民に理解してもらったところまでで退職し、前橋市の副市長となったが、知事からは「前橋市の仕事をしながら、世界遺産構想は実現するまで、実現した後にもしっかりと取り組むよう」に特命依頼され前橋市長もそれを認めてくれたので大きな助けになった。

思い残しがあると言えば「養蚕・製糸」の世界遺産は、日本国民の共通の財産であるが、いつの間にか「群馬県の専売特許の世界遺産」と思っている人が意外に多く、日本全体の「世界遺産」となっていない欠点がある。同窓生からも「全国の養蚕・製糸に目を向けないのは群馬セクトだ」と批判されたが、登録を勧める課程で何らかの事情が働いて群馬県オンリーになっていったのだと推測している。私の構想段階では「世界遺産委員会は、東京の都道府県

会館に本部を置き全国から自由に参加できる仕組みにし、全国の蚕糸・絹業の力を結集して世界遺産を実現し、伝統産業の発展をはかる」ことにしていたが、そうならなかったことは残念な事として残っている。私は、今でも蚕糸・絹業に造詣の深い人々の力を結集して研究を深めることによって優れた科学技術史に仕上げられる課題が「富岡製糸場」だと思っている。

ユネスコの勧告では「遺産群は、19世紀末に養蚕と日本の生糸産業の革新に決定的な役割を果たし日本が近代工業化世界に仲間入りするカギとなった」としている。この中身を充実させることこそが産業世界遺産の真の目的ではないだろうか。世間では「富岡製糸場見学者は、登録時の120万人から昨年は30万人と凋落傾向」と報道する。この観光客だけに光を当てた報道や評価は間違えていると思って居る。

世界遺産登録後に「群馬シルクの日米シルクロード」について調査した。アメリカのシアトルにも出掛けた。アメリカは、膨大なシルク貿易で富を成し、重化学工業へ産業構造を変化させたが、その詳しい歴史はまだ目にしていない。又、シルク貿易は、日本にキリスト教を持ち込み日本文化に影響与えた。キリスト教とシルクについては「群馬シルクと西欧文化文化の風」で一定の研究もした。シルクと日本経済、文化は更に深い研究が必要と思って居る。80才になり、私には残りの時間は少ないが出来るところまで頑張ってみようと思って居る。

世界遺産構想の取り組みは、東京農工大学卒業生と言う自分を再発見し、大きなプライドを与えてくれた。「ふり返れば未来」。在校生や教職員が新しい時代の東京農工大学を築いてくれることを期待している。この大学にはそのDNAがある。

③近況など

前橋市副市長は、1期4年でした。再任案は、保守会派、公明党などの反対で否決。平成22年からは町内活動。老人会、生涯学習委員、宇宙少年団活動、NPO法人森の会（現在は任意団体「森の会」）、アマゾンの熱帯雨林保全の活動。で現在に至っている。

昨年から実家の限界集落で稲作をはじめ昨年の収穫は20俵。野菜の自給自足を目指している。

氏名 大村 長則 S46年 農業生産工学科卒業 静岡県在住

①主な履歴

第5期樺寮委員(1968年12月～、寮長は藤井氏))

第6期樺寮副寮長(1969年6月～ 寮長は上山氏)

藤井さんと同部屋になったことが、私の人生を決めた。

東大経済学部のバリケード封鎖で、火炎瓶・放水との死闘により、全共闘の全学封鎖を阻止。

②記述欄

○若い頃は「未来は青年のもの」とバラ色に描いていましたが、現実には厳しい社会でした。期待していた社会とはほど遠く、無念に思っています。

団塊世代生まれで、競争とフルイ分けに追われてきましたが、学生運動に参加してからは世間で言う出世の道から自ら外れ、不正・不義と対抗する道を歩んできました。

○静岡県職員組合の活動では、賃上げ交渉で当局案にすりよるグループに対し、組合員を交えての争いの連続でした。役員選挙で組合員の自宅へ支持依頼に何うなど熾烈な運動に明け暮れていました。

役員構成は概ね4:6の少数でしたが、当局も要求をある程度のまないと力関係が逆転してしまうので、影響力は有りました。その成果は県下の市町の職員や民間企業にも波及していたと自負しています。

○人生は人との巡り会いと関わりですが、その中で自分の目標に向かって努力し、その結果は静かに受け入れることと思っています。

○今、最も危惧していることは、異常な国債残高です。国民一人当たり1,000万円にもなり、我々の世代はその果実を甘受していますが、孫子の代がその借金を背負わされることです。将来、スーパーインフレとなり、国民の財産没収の荒技に襲われないかと心配です。

③近況など

学生時代に学んだ“要求実現運動を岸に”、地域で活動しています。しかし、私がその必要性を主張しても同調される方が少なく、身内の同好会的運動に埋没しているのが残念です。

氏名 小川 和雄

S46年 養蚕学科卒業

埼玉県在住

①主な履歴

1971 年～埼玉県蚕業試験場 1976 年大気保全課、1980 年公害センター、2000 年環境科学国際センター 2008 年定年退職。その他 1995 年より非常勤講師(東京都立短期大学、農工大大学院、埼玉大 3 教科、東洋大、法政大など。法政大以外は各 10 数年勤務) 1994 年農工大で博士(農学)取得

1971 年夏→2008 年定年まで組合役員。1980 年以降日本科学者会議埼玉支部で「JSA 埼玉通信の編集」

2009 年～現在、大気環境総合センター講師 現役時～地球温暖化等の一般向け講演は 200 回以上。

①記述欄：

今、世界中で、「フェイク・ファシズム」が進行している。おかげで毎日のニュースを聞くとび愕然としたり、いらしたりを繰り返している。おまけに学生時代にあこがれた社会主義も、今は見る影もない。ロシア、中国、北朝鮮などをみれば、「社会主義は独裁国家になるという法則性がある」、と思えるほどである。年中、「社会主義に民主主義はない」と言われるが未だ返す言葉がみつからない。

1) 恩人

ぼやいていても仕方無いので、とりあえず私の人生を振り返ってみる。多くの方にお世話になったが、人生を変えるような大きな影響を与えてくれた「恩人」を紹介したい。

一人目は高校の先生。私は生物部だったが、化学部の若い顧問の坂田先生に、生まれて初めて成績を褒められた。偶然山が当たって地学で 100 点。学年で私一人だったので「小川できるんだな」。この一言で私はまじめに勉強するようになり、二年生 3 学期には学年トップクラスになり HR で報告され、盲腸手術直後にもかかわらず教室で胴上げされたことは忘れられない。おかげで第一志望の農工大に合格した。

二人目は農工大の本間慎先生。環境問題にとりくむきっかけを与えてくれたばかりでなく、仲人もして頂き、同じ学会でたくさんの論文を書いていたことから、それを重ねて出せば博士になれるよ、とけしかけられた。思えば農工大では授業料免除、特別奨学金で卒業。博士号も審査代 5 万円以下と、ほとんどお金がからなかった。先生が亡くなられる 1 年前に私の歌の CD を送ったが、毎日聴いていると礼状がきた。

三人目は気象研究所の故森口実博士。私が外郭環状道路の大気汚染の予測をする時に手取り足取り指導して頂き、さらに大気環境学会に発表すべきと進めてくれた。私は長年、道路際の大気汚染の挙動や緑地帯の効果などを実測する等、「大気汚染と植物の相互関係」をテーマに研究、その一部が博士論文となった。

2) 個人として誇れること

1976 年から 4 年間行政に所属した時、課内で「不適正支出」があり、1 年間調べ上げて 4 名の組合員で止めさせた。その後、埼玉県本庁を中心に不適正支出が発覚、大問題となってテレビ、世間を賑わせた。

最も誇れるのは「埼玉県環境科学国際センター」を作ったこと。公害センター時代に書記長として毎年独自に環境部長交渉を行っていた。畑県政の時、直接環境部長に、公害センターが「古い狭い危険」と訴え、何とかしたいとの回答を得た。それから 10 数年かけて「環境科学国際センター」ができた。特筆すべきは全てに公害センター職員の意見が反映されたことである。実験室や組織、人員数、備品の購入等がほとんど思った通りに完成した。1990 年代以降、日本の地方環境研の定数が激減する中、人員が 2 倍化し、博士は私一人だったのが今では 40 人の研究員の 9 割に。実績でもダントツの「地環研」となっている。

3) 退職後の楽しみ、交流

退職後、偶然の出会いで歌を始めた。私の歌を一度聴いただけで、銀座マキシム・ド・パリで歌ってと言われ、オリンピックのために無くなるまで 10 回歌った。ロシア民謡を聴きに行った銀座「月夜の仔猫」で 2013 年から 7 年間、毎月歌早生手もらった。また、一流のバイオリニスト(シナトラや美空ひばりの伴奏等)やピアニスト(仏歌手やボニージャックス、舟木一夫、尾崎紀世彦ら)、カーネギーホールで歌った歌手らに会い、そのすすめで自分のコンサートを 6 回実施。その他、多くの依頼出演を経験した。このような音楽関係者との交流は新鮮で全くの想定外であった。

③近況など：

70 歳迄に 5 大学で行っていた非常勤講師を全て止め、悠々「自宅」の生活。毎朝 3km の散歩、食料品買出しと夕食作り、それに週 1～2 回は夜、近所の店でワインを持参して歌っている。コロナ前は都内のライブハウス等でも結構歌ったが、今はたまに頼まれる程度。また、月一回を目標に秘湯巡りをしている。結果的に東北地方が多い。退職後に前立腺癌、大腸癌になったが、いずれも早期発見、今は完治。

氏名 片山 むぎほ

1975年 農学研究科卒業

東京都在住

①主な履歴

1975年～2008年 都立高校教員

1976年長女のぶき(重度心身障害児)を出産。

1982年次女ふゆきを出産(1歳半で骨髄性白血病を発症)

2003年国歌斉唱義務不存在等請求訴訟(予防訴訟)原告団を立ち上げる。

その後、一連の都教委「10.23 通達」と闘う多種多様な訴訟を現在まで闘い続けている。

②記述欄

<夫・義博との会話>

義博 「小川さんから手紙が来たけど、目的は何だ？何のためにやるのかな？みんな何を書くのかな？」

むぎほ「自分の青春時代が懐かしいから、当時のことを思い出して、連絡を取りながら、旧交を温め合おうということじゃないの？」

義博 「自分の自慢話でも良いってことか？」

むぎほ「そうね。それでいいんじゃないの？」

むぎほ「私たち、学生時代、それなりに一生懸命考えて、未来に夢を託して、それぞれがあれこれと真面目にやっていたけれど、現在、当時を振り返って見れば、色々違っていた。誤解していた。はて？何をどう間違えていたか？なんて、反省をしてみようというような話はないわね」

義博 「まあ…ね。……………」

人生百年というけれど、そろそろ自分の人生も終わりに近づいていると思った時、次の世代に言い残すべきことは、人生の成功体験ではなく、やっぱり、失敗談と反省じゃないかと思います。あの時はこう考えていた。でも違っていた。なぜ？どうして？

例えば、

*あの時は、ソ連も中国も、批判的に捉えていたけれど、でも、社会主義は問題点を改善しながら、ソ連も中国も、いずれは、よりよい方向に発展すると思っていたけれど、…違っていたね。……。

*当時、「トロ・トロ」って言っていたけれど、トロッキストって何だったの？トロッキーとどんな関係？スターリンの酷さがますます暴露されてきているけれど、トロッキーの歴史的評価は今どうなっているの？

*入学したての1年生の反民青の子に「てめーら、六全協を総括してみろよ」とか言われたことがあった。「あんた、六全協の正式名を知ってるの？言ってごらん」って言いたかったけれど、自分でも言えそうもなかったので止めた。

みんな背伸びして突っ張っていた世代だったけど、何も知らなかったよね。今もだけど。

*新日和見主義って、結局何だったの？

*一杯飲まなきゃ、腹を割って話ができないって、男社会だよね。

あれこれ、あれこれ、夫は私のことを「こじらせ女子だね」と言いたいようです。

③近況など

いま、練馬区在住。地域は活動家の高齢化激しく、若者の足を引っ張っているような気がする。若い世代がやりたいようにやれば良いのだと思う。未来はそれしかない。

【東京教育の自由裁判をすすめる会(裁判支援諸々)・新婦人練馬支部・ねりま9条の会・練馬文化の会・ねりま9区みんなで選挙・ねりまイースト28区・みんなで練馬区長選挙2026】関係団体の名称だけはたくさん並ぶ。

長女のぶきは秋津療育園で元気に過ごしています。次女ふゆきは、北大に入学して以来北海道に根付いて、北海道で大事なたった一人の孫誕生(現在4歳)。私たちは、夫婦そろって後期高齢者。

氏名 桂川 雅信

S47年 農業生産工学科卒業

長野県在住

①主な履歴

- ・1972年～1992年 川崎市役所下水道局職員(下水道施設の設計、管理)
- ・1992年～2002年(株)日水コン(河川湖沼の保全対策・水環境調査、水環境計画、環境基本計画など)
- ・2002年～2006年 (株)ズコーシャ(建設・環境関連コンサルタント指導など)
- ・1999年～2007年 北海道教育大学札幌校非常勤講師(環境行政論、環境政策論、環境社会学)
- ・2004年～2010年 三重大学生物資源学部非常勤講師(地域循環計画学、環境政策論)
- ・2007年～2012年 滋賀県立水環境科学館(指定管理者)副館長・館長
- ・2012年4月～ 現在:長野県上伊那郡中川村に移住。2018年8月より村議会議員となり現在2期目
日本科学者会議長野支部幹事

②記述欄

- いまの私があるのは、学生時代に多くの友人、先輩に恵まれたから。
- 大学を卒業して社会に出てから52年が経過した。最近の社会・経済状況を見ていると私たちのしてきたことは何だったのかと反省の方が多。公害反対や開発による環境破壊とはかなり闘ってきたつもりだが、反面では私たち自身が経済成長にどっぷり慣らされていたのではないかとも思う。とはいえ、微々たるものだがこの半世紀で勝ち得た土台を、次世代につなぐ仕事を自分なりに仕上げる責任を感じている。
- いま思えば、70年代に社会民主主義勢力と労働運動での激しいヘゲモニー争いは、意味のない、というより将来を見ていない失敗だったのではないかと感じている。被団協がノーベル平和賞を受賞したのは被爆者のみなさんの頑張りがあったからで、原水禁運動が長い間統一できていないことは、平和勢力の衰退に道を開いたのではないかとさえ思う。戦争しない国づくりにはあらゆる平和勢力を「平和への準備」に結集させる努力をするべきだ。そのためには労働運動や平和運動に対する過去の反省は早く済ませるべきと考える。といったことを、最近移住先の農村で考えるようになった。そのきっかけは地域にいる元国労組合員で国鉄民営化では差別的待遇を受けた方との遭遇だった。彼はいまも社民党の党員だが、地域では住民の先頭になって頑張っている。彼と話してつくづく思った。70年代に労働組合で角を突きあっていたのは何だったのかと。あれはもしかすると、「革新勢力」が資本の手の内に乗せられていたのではないかと感じざるを得ないのだが……。
- 個人的にはカミさんに支えられた人生だったと、つくづく思う。65歳まで4つの職場を渡り歩いたために、年金は削減されたが、それでも何とか生活ができたのはカミさんのおかげ。35歳から65歳までの30年間で500日を超える海外での個人的調査を許してくれたのもカミさんのおかげ。私の人生をこれだけ豊かにしてくれたのもカミさんのおかげ。農村に移住してからは年に一度「罪ほろぼし」としてかみさんを旅行に連れ出している。

人生で一番印象に残っていることは

- 川崎市役所の職員になってすぐの頃、仕事で腐っている私を救ってくれたのは、元農業土木学会会長の山崎不二夫先生だった。当時、山崎先生が中心になって日本科学者会議の研究者を集め「水資源研究会」を結成した際に、上下水道の専門家を呼ぶことになり私と神奈川県職員が呼ばれた。学生時代に学問研究とはほど遠い生活をしていた私にとって、研究者集団の議論は刺激的だったし、その後の人生を決めたと言っても過言でない。

特に山崎先生は学会の大先輩でありながら、若い研究者への温かいまなざしや国民の立場に立った科学者としての見識の高さには学ぶべきものが多く、私のその後の人生の指針となった。研究会の成果はその後二冊の出版物として発表され、共著者の片隅で私の論考が掲載されたことは、うれしい出来事だった。この研究会には農工大教員だった本谷勲先生も参加しており、そのつてを頼りに休暇をとって大学内で水質測定実験をやらせてもらった。私の人生では短期間ではあるが有意義な二度目の学園生活を送ることができた。社会に出てすぐ労働運動に明け暮れていた私にとって、科学技術のあり方を真剣に考えさせてくれた数年間の経験は、地域住民と環境科学をつなぐ仕事の大切さを学ぶ、意義深い大切な時間となった。

- 35歳から30年かけて旧西欧のほぼすべての国々と、西アジア、北アフリカの諸国を調査と称して巡った。目的は諸国の水環境事情と古代地中海世界の水環境関連遺跡の調査を通して、現代のまちづくりを考えてみたいと思ったからだ。論文としてはまとまらなかったが、いくつかの雑誌にエッセイ風の連載を投稿することができた。世界を見たことで日本を見直す素晴らしい機会となった。

③近況など

2012年に農村へ来てすぐに当時の村長選挙に口を出してしまい、あげくに議員のなり手不足のため72歳で村

議会議員になってしまった。若いときには「絶対やらない」と決めていた議員になったのは、地方の農村が自信を喪失してしまって農村としての生きる道を見失っているように見えたからだ。未だに高度経済成長期の夢から抜け出せない保守勢力に対して、自力で生き抜くための農村のあり方を若い方々と手を組んで進めたいと思っている。議員 1 期目には世代別の議員報酬制度を日本で始めて実現し、2022 年の村議選では若手が 2 名当選した。2025 年の村議選には半数以上の若手と女性議員を目指している。

今言いたいこと

「ひどい時代になった」とよく聞かすが、こんな時代をつくった責任は私たち世代が負わねばならないと思う。「その時々で頑張っていたんだから」と慰め合うのは止めにして、反省すべきはきちんと反省して若い方々に次を託す覚悟を持ちたいと思う。

やりたいこと

- リニア中央新幹線計画は頓挫する一步手前。これを確実に中止させる。ただ、次の世代まで続く可能性あり。
- 気候危機を含め現代の社会的課題を残したままこの世を去ることは、若い方々に申し訳ない気持ちで一杯だ。せめてできることだけはやってコロリと逝こうと思っており、次のことはやりたい。

①地域にサイエンスクラブを立ち上げ、小中学生と保護者の科学教育を進めたい。遠回りかもしれないが「科学的に物事を考えられる人を育てること」が戦争をしない国づくりの基礎だと思う。このサイエンスクラブは自然科学だけでなく、国語、英語、数学などの元教員などにも参加してもらい「読み書きソロバン」の面白さも感じてもらえるような、そんな総合科学の地域クラブを妄想している。

②村の課題は山のようにあり、一つ一つ片付けるしかないが、残り 2 年でやれるところまでやって後は若手に引き継ぐ。

③ 2026 年 8 月に議員を辞したあと、やり残した仕事をする。ここで大見得を切るとあとで反省の弁を語るのは切ないので、黙ったままで実行する。でも、アレだけは実現したい……。アレが多くて困っているのだけど……。

今年の年賀状にしたための川柳一句

老体は鞭より夢でよく動く（桂川蒼水）

氏名 金子 良夫 1972年(S47) 工学部応用物理学科卒業 東京都在住

①主な履歴

1967 年(S.42)東京農工大学工学部応用物理学科入学、1975年(S.50)応用物理専攻・修士卒
1975 年(S.50)東京大学工学部教育職(技官・助手) 物理工学科国府田研究室配属、工学博士
1986 年(S.61)川崎製鉄技術研究本部配属、課長補 1995 年(S.7)川崎製鉄 LSI 宇都宮工場配属、部長
2001 年(H.13)科学技術振興機構(JST)・創造科学事業(ERATO) 1. “十倉スピン超構造プロジェクト”、
2. “十倉マルチフェロイックスプロジェクト” 技術参事、グループリーダ、研究員
2012 年(H24)国立研究開発法人・理化学研究所 研究員、上級技師
2023 年(R.5)同理化学研究所・研究嘱託、QDJ(Quantum Design Japan)・技術顧問、現在に至る。

②記述欄

大学時代の思い出;東京農工大学工学部に入学したのは1967年4月である。新設の応用物理学科の一期生である。1年時には府中の教養キャンパスで活発な一期生と議論を交わし楽しい思いの中で過ごした。2年生では小金井にある工学部に通う為に、同キャンパス内にある“樺”学生寮での生活となった。ここで農学部学生も含め多くの先達、同期、後輩と交わる事となる。時はまさに70年安保闘争、大学民主化闘争の昭和史を飾る激動の時代であった。3年生になると私は工学部自治会委員長に選ばれることになり、時代の激流に身を投じた。農学部では全共闘派が講堂をバリケード閉鎖したことに対し、農学部自治会中心とする多数の学生は逆バリケードで対抗した。工学部では全共闘派の他大学の学生も加わったデモ隊が授業中にキャンパス内を行進、テント内に常駐、威嚇をするような事態であった。委員長としてこれらに必死に対抗していくこととなる。そのような騒然とした時、私の応用物理学科の研究棟建設(4学科合同)が4年時点での卒論研究までに間に合わないというニュースが飛び込んだ。ただちに3年、2年、1年(府中)縦断の“研究棟建設促進”の活動連絡組織を立ち上げ、他の3学

科とも共同し、工学部最大の要求闘争に進むこととなる。諸星学長との団体交渉(府中にて)には応用物理学科の3学年におよぶ学生全員が参加した。この交渉で学長から卒論研究までには必ず研究棟建設を実現するとの確約を得たのは深夜をすぎた夜明けであった。府中キャンパスを“暁のデモ”と称して、誇らしく隊列組んで進んだ記憶はいまも深く脳裏にとどまっている。その後の卒論研究や大学院修士での研究はこの新研究棟5階で進めることができた。

大学卒業後(履歴参照)；農工大応用物理修士過程での研究成果により、東大工学部教育職に採用された。物理工学科国府田研究室にて技官、助手として学生の卒論研究、大学院学生の研究指導する立場となった。11年間に及ぶ多くの東大学生、院生の育成、指導に貢献した。その間の研究成果により、東大工学部博士号を取得する。研究分野は“半導体中の量子論的電子と光との相互作用に関する研究”である。38歳のころ、得た知識を広く実社会で役に立たせたいと思い、半導体製造企業に転身した。JFE(当時川崎製鉄)が新規事業として乗り出した、ゼロからのLSI製造量産技術の開発に飛び込んだ。宇都宮LSI工場の製造技術統括部門の部長となり、先頭にたって多くの部下を指導し、川鉄独自開発の最先端LSI量産製造技術を立ち上げた。最先端のCMOS製造技術を台湾TSMCへ技術移転した。LSI部門で売り上げ500億円、単年度黒字を達成した。達成感を覚えると昔の研究生生活が懐かしく思えた。東大研究室をともに過ごした十倉好紀教授がJST・ERATOプロジェクトを新しく立ち上げると聞き研究生生活に舞い戻った。私の作成した新規単結晶はこのプロジェクトの多くの成果に寄与した。その後、理化学研究所にて創発物性科学研究センター長に十倉氏は就任し、私も参加した。75歳まで現役で、十倉氏のもとで創発物性研究に携わることとなった。

固体物理の最先端研究や最先端LSI製造技術開発に邁進し、成果を上げてきた。その時代、時代を“自らの力”を信じて、精一杯に生き抜いてきたことは私の誇りである。この間の主として海外雑誌への報告論文数は164報(報告論文の被引用数7,830回)に及ぶ、解説論文7報、特許出願数74件である。

(十倉好紀氏はこの時の研究成果によりノーベル物理学賞候補に毎年ノミネートされている)

③近況など

3月に喜寿77歳を迎えた。理研の研究嘱託として週1回のZOOM研究会議に参画している。私が開発した単結晶育成装置の販売メーカーQDJの技術顧問として月数回の技術提案や相談に携わっている。

ジムにて筋トレに励み、体脂肪率12%、割れた腹筋を獲得している。往年の体力を回復し、いたって元気である。

氏名 桜井 嘉夫 S42年 繊維工学科卒業 東京都在住

①主な履歴

1967年3月工学部繊維工学科卒業

工学部学生自治会常任委員でした。自治会が恒常的に活動が継続することに配慮した。4年次が始まると、毛沢東の文革が始まったが、これは発表された11中全決定を何度も読むうちに誤りに気づき、これを学内に持ち込み策動をしようする動きを未然に防いだ。

その後、1年おいて、大学院に進んだが、下記のように職を得て退学。在学中は、学費も生活費もすべて自分で稼ぐため、アルバイトに忙しくて、心身ともに常に変な学生生活であった。

1969年4月都立高校に就職(教諭／都立八王子工業高校)

2003年3月定年退職、地域での活動をしている。

②記述欄

<大学を出てからの活動歴>

I 立川での活動

卒業後に立川に転居し、地域で活動に。その一つに立川南口区画理反対連盟の事務局の手伝い(事務局員)を担当。この連盟は該当地域の住民がこぞって加盟していた。地域での活動は多忙を極めたが、このことがやがて阿部革新市政の成立の大きな要素の一つだった。

時々自分が院生であること思い出したが、これ以上は無理と思い退学した。その後も、立川での地域活動に参加。立川市長選、市議選は勝共連合との壮絶な闘いだったがこれを駆逐、半世紀を経た今日にも教訓は生きている(その後、1980年代に八王子に転居)

Ⅱ 職場での活動(1969 ～ 2002)

1. 民主教育と民主的など職場めざしての 30 数年間- =職場での闘い

職場の教員の組合は東京都高等学校教職員組合(都高教)。組合に加入して翌年に分会の 代表委員(本部員)になって、本部委員会(分会代表委員会毎週開催)に参加。このころ、電気工学卒の任海さんにあった。この年(1971)に 家永教科書裁判の判決-国民の教育権についての画期的な判決があり、教育組合活動に拍車がかかった。その後、何度か本部員や教研委員を経験。

1-1 職場民主化の闘い

職場は校長一運営委員会一職員会議の体制から校長一職員会議の体制へと大転換。即ち、校長と少数の選ばれた教員が予め校務運営の重要事項を決定し、これを職員会議にかけるという体制から職員全員が平等に参加する体制への大転換を果たした。都教委が任命制の主任を強制してきたがこれを形骸化して、1990 年代まで実質この体制で通した。

1-2 自主研修権を確保の闘い

教特法に定める教員の自主研修権(週一研修日)を 1980 年代中頃に都教委は剥奪し制限を加えようとして来た。これを失うことは自分の教員として存在と権利を失うことになる。と危機感を募らせ、本部員の私を始めとして分会全力で闘いこれを確保した。しかし 1990 年代半ばになると学校 5 日制の試行などを経て実施が困難となり、失われていった。

1-3 強制異動反対の闘い

1980 年代に入ると都教委は教員強制異動に手を付けてきた。不当な異動に対しては撤回修正されるように交渉した。全都に唯一の学科の教員はそのまま残留した。大部分の教員は異動した。1970 年代の終わりまでは本校では採用されて希望すれば退職まで勤務出来たのとは様変わりだった。

1-4 臨教審路線反対の闘い

1980 年代の半ば、日本の教育を全面的に支配層の要望している方向に変えようと画策して施策を次々に発表。都教委はそれに応じて具体的な計画を明らかにした。都立高校の統廃合である。本校もその対象であった。1991 年に電気科 1 学級削減更に 1993 年機械科 1 学級削減された、当然反対するが、覆ることはない。

1-5 廃校問題

常に警戒していたが、本校は創立以来 110 年以上の歴史があり近年は新しい装いの伝統を引き継ぐ学科改善もできているから廃校はあり得ないと考えていた。都教委から 2002 年に廃校の内示があった。万事休す!! 存続を求める請願も空しく 2003 年 3 月末日廃校。奇しくも私の退職の日であった。

2. 学科内容改善と学科名の改称阻止

紡織科➡繊維工学科 1971 ➡応用デザイン科 1989 ➡廃校 2006 と推移した。

地場産業の繊維産業は縮小の傾向にあり、1972 年の日米繊維交渉の結果、日本の繊維産業全体の縮小傾向は決定的になり、卒業する生徒たちの進路に否定的な影響が出始めた。学科の教育内容の改革と学科名改称に取り組んだ。学科の教員で手分けして専門分野の研修に取り組んだ。私は、情報技術(数年間に hardware から software までかなりハードな内容を研究)と建築・都市デザイン(近くの大学の建築学科の専門科目を 7,8 年かけて聴講)を担当。応用デザイン科を立ち上げて、繊維学校以来の伝統を何とか引き継げるようになった。都教委の統廃合の対象となり残念な終幕を迎えた。

Ⅲ 八王子地域での活動

八高連(三高連と連携して)の運動、各種選挙の闘い、国鉄分割民営化反対の闘い、国民春闘への参加など。2001 年八王子国民春闘講座で講師をつとめた全労連全国一般労働組合委員長大木寿君に会った。実に 34 年ぶり。

Ⅳ 居住地八王子での活動

退職後、地域での活動に参加しながら、生命科学や物理数学、更に語学の勉強をしながら、多摩ニュータウンの環境を守る活動に参加していた。古希を迎える頃から、病を得て自宅にこもっている。

<最近感じること>

プーチンロシアのウクライナ侵略戦争-ウクライナでの空襲警報のサイレンを聞く。なんとと言う愚かな事を。私は、1945 年アジア太平洋戦争の末期に、毎晩サイレンを聞く度に防空壕に入った。幸い難を免れた。空襲の記憶が人生

の初めての記憶。伯母さん一家は東京大空襲で全滅。近親者もフィリピンで戦死。世界の誰であろうとも、武力をもって侵略、そんな事が許されるはずがない。ガザも同様---怒り！！一即時撤退を！！

氏名 信太 秀紀

S51年 農学科卒業

千葉県在住

①主な履歴

糧寮寮委員/同副寮長/日本農学系学生ゼミナール連合。

農事組合法人匠瑳(そうさ)農産物供給センター勤務。主に農業団体の IT 実務アシスタント。現在に至る。

②記述欄

長文ご容赦。本学卒業生が多く関わった千葉の匠瑳農産物供給センターの産直について私なりに要点整理しておきたいと思いました。

◇学生時代、学生自治会。農学系学生ゼミナール連合。糧寮委員(庶務と内務副寮長)などに取り組みました。

現世肯定でいっぱいだった18才当時の私は、諸先輩の批判精神や鋭い論理展開、またその熱気などに深く感銘を受けました。とりわけ寮運動に携わる中で、現実を一步一步具体的に变革して『教育の機会均等を実態あるものにしてゆく』闘いの意義を学びました。

◇その面では、学費値上げ反対闘争が効果的には実を結ばず、在学中だけでも授業料月額が千円から 3000 円、8000 円と上げられてしまったのは残念至極の思い。当時の中教審答申構想そのままに今や国立大学でさえ年額 50 万円を超える始末。『貧乏人は大学になぞ来るんじゃない』とばかり。これは亡国の途だと今でも思います。

◇井上先生の元で農業経済を学んだこともあり、なるべく農業の現場に近い位置で仕事したいと思い、熱田正行さん(農科S44)や鈴木一郎さん(農科S47)が既にはじめていた産直運動の取り組みに参加しました。農事組合法人匠瑳農産物供給センターです。その後農工大から木塚敏男、斎藤一志、福原巖、庄司智秀の各氏が来られ、其々重要な役割を果たしました。

◇今でこそ千葉県は産直のメッカとなっていますが、1970年代当時に、八千代牛乳。船橋農産物供給センターとともに、その道を切り開いてきた産直運動体であったと思います。

◇我々の産直は主に三つの点でそれまでの産直と異なるように思います。

①それまでは野菜を主とした「産直直送」的な流通マージンに着目したものでしたが、我々のそれは鶏卵と豚肉なので「加工」とその為の設備投資が相当程度必要なものでした。産直黎明期で海のものとも山のものともつかない当時、農民資本だけでこうした高度な加工設備投資に取り組むのは、相当チャレンジングな取り組みだったと思います。創立メンバー7名の農民とその家族たちの団結に深い敬意！

②飼料添加物や抗生物質を極力排して「安心安全な肉と卵」を農民は作り、消費者は「生産費補償方式」と云う価格で支える、という方式を確立したこと。(技術的な信頼性を担保するうえで、農工大卒の獣医。木塚敏男氏が果たした役割はたいへん大きいように思います。) 安心安全という点では、職員をドイツに派遣して無添加ハムソーセージを学び、試行錯誤のうえに供給実現したのも、消費者の要望に応えながらの先駆的な取り組みでした。その後多くの産直団体が加工技術の研修に来ることとなりました。

③生産団体2者と生協3者で70年代当時はレアであった『産直協議会』を構成し、生産者と消費者が対等な形で産直を運営してきた事。当初は団地の共同購入組織であった方達がこの産直を通じて消費生活協同組合を結成。「天然牛乳を飲む会」から発展した東都生活協同組合と先の船橋市民生協。東葛市民生協、そして千葉北部酪農協同組合と匠瑳農産物供給センターの5者の構成です。

産直協議会の運営に関しては日大。宮崎先生にお世話になりました。

◇その後2002年に、食肉部門は三生協と千葉北部酪農の共同出資株式会社となり、鶏卵部門は鶏卵生産者8名の出資による有限会社となりました。

◇紆余曲折ありながらも、産直方式の確立、農民資本の可能性、消費者との提携のあり方などに、先駆的な役割を果たした取り組みだったと考えています。

③近況など：

◇現在は”個人事業主”で農業系の会社の実務アシスタントなどしていますが、そろそろ退役です。

◇数年前まで「千葉レスキューサポートバイク」で災害支援など取り組みましたが、体力的に無理なので、今後は「里

山保全」「耕作放棄地のメンテナンス」などに関われたらと考えています。
◇最近「スポーツウェルネス吹き矢」というのを始めました。めっぽう楽しいです。

氏名 谷内 英治 S51年 蚕糸生物学科卒業 宮城県在住

①主な履歴

1969 養蚕学科入学、'70 学生会委員長、'72～'75 全学連中執、都岳連副委員長、三多摩学協議長。
'75 途中 大学へ復帰(本間研)、カドミウム公害に取り組んでいた先生と各地の調査に入る。採取した試料の分析と卒業に向けた単位の取得で最も多忙な時期。卒論は「重金属分析の一考察」
'76 卒業、秋田中通総合病院(民医連)に就職。「放射線取扱主任者」「情報処理技術者」「診療録情報管理者」の資格を取得し、放射線科に勤務。核医学、放射治療の IT システムの構築とサポート及び放射線管理業務を行う。一方、退職前年まで、単組副委員長、県医労連副委員長を歴。
'2011 定年 3 月末退職。同年 4 月仙台に移住。移住後は、町内会活動を経て「西多賀街づくりの推進委員会」の地域ボランティア活動に参加しています。

②記述欄

1969 からの学生運動に始まり、労働運動、民医連運動と人生の大半を大衆運動に身を置いてきました。その間、民主的社会発展へ少なからず寄与したことに自負を持っています。一方では生活の格差は著しく拡大し続いています。世界的にもこの格差とともに地球温暖化の問題が持ち上がっています。
何よりも危惧したのは、この運動を先駆的に導いてきたリベラルの側が暫時先細なって来ていることです。定年を迎える時期に差し掛かり、第 2 の人生の活動の場をどうするか悩んでいました。結論が出ないなかで定年を迎えてしまいました。その時起こったのが 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災でした。その半月前に定年後、仙台にいる息子家族と同居するために家を新築した矢先で、幸いにも高台に建てたため被害は軽微でした。今後お世話になる仙台のために何かしなければと思い、最も被害の大きかった海沿いのボランティアセンターを探し、丸 3 か月 15 キロ離れたセンターに毎日自転車で通いました。最初に被災地を見たときは愕然としました。家屋は全て流され、その残骸が散らばり、破壊されたコンクリートや鉄骨が瓦礫と化し、吐き気を催す臭いが立ち込め、この世のものと思えぬ荒涼と光景が広がっていました。その異様な光景は今でも頭に焼き付いています。毎日毎日、泥まみれになってヘドロの掻き出しが作業を行いました。そのなかで中で休憩時間も惜しみ、もくもくと働く 3 人の若者と一緒になり、昼食の時、声をかけると「中学校の時、阪神淡路大震災で助けてもらったのでその恩返しで来た」「芸人の卵でギャラが貰えないのでアルバイトで稼いだ金で新幹線を使い、宿泊はカプセルホテル、食事はカップラーメンで済ましている」とのこと。話を聞いて更に感動してしまいました。困っている人を助けたいと思う気持ちはイデオロギーなんて関係ない、本来持っている人間性そのもので、医療というヒポクラテスの倫理観であるとあらためて思いました。悩んでいた今後の身の置き方に光が差したように思いました。

③近況など

私の活動の場としているボランティア組織の名称は「西多賀街づくり推進委員会」。
「安全・安心を基本に自然環境、歴史的遺産、健康福祉、次世代育成等の各分野において地域の活性化を図ることを目的」(設立趣意書)に基づき活動しています。地域は八木山のすそ野に位置し、風光明媚の光景と 48 種類、600 本の桜が植樹されている三神峯公園があります。その公園を拠点に、自然環境の保全・美化運動として桜の植樹、病害虫の駆除、雑草の除去、ゴミの収集等。また市民の交流の場として野外コンサートの開催。中学生への社会活動のサポート、児童への遊びサポート等多岐に渡っています。小中学生の社会活動サポートは当初は任意参加でしたが一昨年から授業の中に組み入れられました。昨年の野外コンサートも、小雨にもかかわらず 800 名の方が参加し大いに盛り上がりました。昨年秋に新たな企画として「スズメ踊り」のチームを立上げようと会員を募集したところ PTA 活動で中で結成されたば「親児の会」親子をはじめ 23 名の応募があり、猛練習です。会の取り組みは着実に広がっています。若い人も徐々に入会してきています。ほとんどが野外の活動で健康にもよいです。

氏名 武内 進

S46年 工業化学科卒業

東京都在住

①主な履歴

1971 年 学科卒、1973 年大学院修了、1973 年印刷会社に入社。精密機器、エレクトロニクス関連の仕事に従事(技術開発、研究所、製造、品質管理、品質保証、全般)いわゆる印刷事業にかかわったことはありません。

2008 年 定年退職後、関係会社で静電気解決事業と BPO (Business Process Outsourcing)に従事

2018 年 公益社団法人で事務局の仕事に従事 2022 年 退職

②記述欄

学生時代

学部、大学院と実験、研究を主に勤しんでおり、大学民主化活動に関わったのは院生協議会で学長選出の方法を提案したのが唯一と言っても良いと思います。それでも「大学立法」反対をほとんどの学生が叫んでいた事、学生自治会が「10 年後には学費が 18 万円になる」と言っていたことを思い出します。当時、学費は月 1,000 円でしたが、10 年後その通りになったことに驚きました。国際関係では、日本は米国のジュニアパートナー、「目下の同盟者」という言葉が印象に残っています。現在まで続いていることは残念です。最近、ウクライナ侵攻後、ロシアは中国のジュニアパートナーになったという言説をみたことは興味深かったです。

4 年時に研究室を決める時、「民主的に」学生同士のジャンケンで研究室が決まりました。当時は有機化学、高分子化学関係の人气が高かったです。ジャンケンに負け、人気のなかった無機化学系にはいりました。発光ダイオードの材料の気相成長の研究をしました。科研費の申請がとらず苦労されていたことを覚えています。工学部全体がそうではなかったでしょうか。当学は「中教審大学」構想で、「安上がりの中堅技術者」作りに位置づけられていた影響も大きいと思います。学生も二期校コンプレックスを持つ人もあり、その境遇に甘んじていた、あるいはあまり気にしない人が多かったのではないのでしょうか。農学部の学生は自信と夢を持っていた人が多かったと感じました。発光ダイオードは青色発光に発展し、名大の天野教授等がノーベル賞を受賞されました。当研究室の研究内容に勇気づけられたというコメントをみたとき、感慨深かったです。また私の 1 学年下の瀬戸さんが副学長を務められたことも記したい。

卒業、修了後

就職は大手印刷会社にはいりました。大学の研究内容と仕事は異なることが多いと思いますが、私の場合、近かったことには驚きました。工場では半導体部品の気相成長の薄膜を簡単に製造していることに感銘を受けました。

その後、微細加工に関して、技術開発、研究所、工場で仕事をしました。一貫して最先端の仕事に携わり、やりがいがありました。

仕事場所は都心ではなく、武蔵野、埼玉でした。滋賀、厚木でも仕事をしました。海外では米国ダラス、台湾にも勤務しました。技術だけでなくマネジメントも経験しました。それぞれの場所でいろいろな人と、出会い、いろいろな交流をもつことができ、楽しい仕事をできたと考えています。

仕事では地方校、私立校の方が一生懸命に直近の目的に向かって昼夜を問わず立ち向かってきたと思います。

「高度経済成長」以後経済が停滞し従来のやり方ではうまくいかなっている現在、地方、海外勤務を経験されている方が大会社の幹部になっていることは、愚直に取り組みされてこられた結果だと思います。ただトップにたつときに何をやるかを見いだせないことがあるようですが、大きな展望をもつことなく、考えることもなく、ただ必死に取り組んできた結果ともいえます。

私の関係した半導体、LSI 分野は最高で世界の 60% のシェアをもっていました。追い越し追い越しましたがその後、目標をみだせず、低下を続けてきました。最近 10 兆円を使って復活させると政府が言っていますが、疑問をもっています。(従来と同じ取り組みではうまくいかないのではないかな？)

私の学生時代は、一般教育で経済学の岸本先生、社会学の高橋先生、教育学の千野先生等、当時新進気鋭の先生の講義を受けることができました。当学だからこれらの先生を受け入れたのではないのでしょうか。専門教育では内容はやや当時はやりの分野から離れた感はありますが、一般的には良かったと思います。会社で同じ分野の仕事に取り組むことはなく、何を学んできたが重要だからです。ただ手法に関しては教育をうける機会はありませんでした(日本の教育の問題では?)。しかしながら、授業以外の活動をとおして学ぶことができました。論理的な考え方、アプローチです。全国的に会社では TQC (Total Quality Control) 活動が盛んですが、理解しやすかったです。トップにたつとき、何をやるかを決定し、創造的な活動をすることには、TQC は阻害要因になったのではないかと思います。

定年退職後は公益社団法人を含めいろいろな職場で仕事をしました。それぞれの部署で豊富な経験をもつ方

と出会ったことは貴重な経験であり、喜びでした。2011 年の東日本大震災の被害対応に関する仕事にも関わりました。

また、定年前の仕事ではあまりやらなかった、パソコンソフトを使った作業も行いました。新しいチャレンジとしてやりがいを感じました。

③近況など

学生時代と同じ住所に住んでいます。

テニス、英会話サークル活動、シルバー人材センターで仕事をしています。腰痛をかかえ、2023 年には前立腺肥大の手術を受けましたが、日常はほぼ不自由なく生活をしています。

食料自給率の減少、農業従事者の高齢化を憂っています。

農工大学の農。工の連携が進み、日本が回復、発展することを望んでいます。

氏名 長 誠一郎 S48年 農学科卒業 京都府在住

①主な履歴

②記述欄

◎「生協を創るから手伝って」と声がかかり、卒業式を待たずすでに結婚していた妻と京都に帰りました。設立直後の洛南生協(現京都生協)で、昼夜分かたず働きました。これが今に続く協同組合との最初の関わりです。3 年後京都府農業会議に来ておられた平井正文先生(本学で協同組合論の教鞭)から長野県の小林節夫さん(後の農民連代表)を紹介され佐久市の農協へ転籍。

◎農協では仲間に声かけし、入協半年目で労働組合を結成し書記長就任、同年に郡の委員長、県の役員にも就任。業務の方では、入協 3 年目で生産資材全般を扱う部門の責任者に抜擢されました。地元産リンゴの産直事業開始にも貢献。私の管理職と労組役員兼務という非正常な状態は退職するまで続きましたが協同組合における労働組合の役割について身をもって経験することができました。農業生産の技術、農業経営の実態など多くを学べた貴重な8年間でした。

◎ 1983 年京都に戻り、大阪の購買生協に入協しました。農協での経験を生かすため主として商品政策、商品の仕入れに携わりました。「安全安心」と「日本の食料は日本の大地から」にこだわり。共同購入の商品については、農産物、精肉、米、卵、牛乳の全品を産直品で案内できるようにしました。「産直」ということばは、「産地直送」ではなく、生産者と消費者が提携する「産消提携」であることにもこだわってきました。国内産では安定供給が難しいバナナの開発にあたっては、産地であるタイ南部の農村を5年間で 15 回訪問し、度々農家に泊めていただきフェアトレードの大切さも学びました。就職先では1 番長い 22 年間で当生協で過ごしました。

◎生協運営について考えの違いが表面化し 55 才で退職、長野県に本社がある発芽玄米の開発会社に転職しました。大阪営業所の責任者として今までの商品を仕入れる側から売込む側になり、わずか 3 年でしたが一つの商品に対する思いの大切さを教えられました。

◎活動の場を京都に移し、高齢者運動に関わりました。介護事業、生活支援事業などを主な事業とする高齢者生協の設立に関わり専務理事の任務に就きました。国の貧困な介護保険制度の下で、利用のしにくさ、介護施設事業運営の困難さを身をもって経験しました。また、様々な前職の人との交流の中で、当たり前のように思っていたボーナスや退職金の支給は少数なのだということも知らされました。68 才まで常勤として務め、以降、副理事長、特定監事を歴任し昨年退任しました。

◎現在はいずれも非常勤で京都府生協連、医療生協、社会保険推進協議会、高齢者大学校、年金者組合などに関わっています。僅かではありますが新聞の配達もあります。それなりに忙しい毎日を過ごしています。

③近況など

40 才半ばから歩き始めた山歩き、一昨年の夏は北八ヶ岳の蓼科山、昨年は尾瀬の至仏山を歩いてきました。今年の夏は北アルプス立山を予定しています。いつまで続けられるか。一昨日(1/25)は、滋賀県との府県境尾根を歩いてきました。毎朝ウォーキングし、少なくとも月 1 回は山を歩くようにしています。映画も観たい、コンサートも聴きたい、そして旅行にも行きたい。特に体力のある間に海外にも行きたいとの思いはあります。何とか日程を調整(パス)してかなえたいですね。

氏名 土居 修一 1972年（S47年）林産学科修士終了 北海道在住

①主な履歴

②近況報告

新宿で生まれ育った私が、旭川に就職してから秋田、筑波と転々として最後に居を構えたのは札幌です。今では、北海道での生活が人生の 1/2 近くになり、すっかり道産子然となっています。

13 年前に筑波大を退職して、専門にかかわる仕事を少しずつ続けながら、以前から続けていた溪流フライ釣りにいそしんでいました。おとし車の免許返納後は、電車とバスで小樽の町中の里川に釣行することにしてヤマメを狙っています。この里川はもともと水道水の水源に使われていたくらい水はきれいなのですが、町中を流れているためかゴミが多く、趣をそがれるときもあります。なので時々ゴミ拾いを兼ねての釣りです。途中、散歩している同年齢の人々と雑談したりしながらも、ごくまれですが尺近い天然ヤマメもつれるので、結構楽しい時間を過ごしています。

もう一つ、共産党後援会の活動です。後援会では最初から役員を押し付けられてしまい少々重荷ではあったのですが、若い方の助けを借りて運営しています。会員の多くが北海道で生まれ育った方ですので、地元で農家があった時代のことなどを教わりながら地域に溶け込むことを意識しつつ、要求運動や選挙などに取り組んでいます。

この文章を書いている今、うちの周辺では毎年恒例の排雪作業がたけなわです。札幌雪祭りが終わるころから全市で始まるのですが、冬の間に車に踏み固められてしまった雪と氷を掻き出して堆積場に運ぶのです。この作業が始まると一気に春が来たような気持ちになりますが、実はこの費用は町内会と札幌市で折半しています。本来、除排雪は市の予算でやるべきなので、長年にわたって町内会の負担を廃止せよと運動してきました。この運動の先頭には共産党議員がいました。来年から、この運動が実って全額市の負担でやることになりそうです。皆に喜ばれて何よりです。

後援会では、毎週駅前で宣伝活動もしています。赤旗見本紙や政策ビラなどを配りながら、市議会や国会の様子を報告しています。真ん中世代の通行人はソッポを向くことがほとんどですが、我々世代だけでなく、時として孫世代の高校生に激励されつつ、元気をもらいながら続けています。

学部・修士時代の恩師、就職後に世話になった上司、博士論文でお世話になった恩師や学部時代の先輩方がなくなりました。少々寂しい気もするのですが、100 歳とはいわず、あと 10 年、米寿を目標に健康で政治にかかわりながら生活できればと思っています。皆さんもお元気で過ごしてください。

氏名 任海 正衛（とうみしょうえ）1969年 電気工学科卒業 千葉県在住

①主な履歴

卒業後、都立高校物理教員（本所工高、江戸川高、葛西南高定時制）、56 歳で早期退職。有機農業をしながら自然保護運動などの市民運動に。四街道 9 条の会、区画整理、市の合併、都市計画道路などに中心の一人として参加。NPO 法人四街道メダカの会代表、子どもと自然学会理事、たろやまの郷づくり。

②記述欄

前回は寄稿しなかったもので、生き方を振り返るつもりで書きます。まずは学生時代や卒業後から。

大学に入ったのは、学生運動への憧れと山に行きたかったから。貧乏暮らしで特別奨学金の予約が取れ、やっと授業料の安い大学へ。WV部、自治会に。大学は勉強をする場だったと今は後悔、後悔。

4 年間で他の学生の半年分しか授業に出席せず、奨学金の停止予告まで受けた。工学部の自治会の常任委員会議長（委員長のようなもの）などを 3 年半、勉強どころでなかった。その頃は、寮闘争と大学紛争。留年する経済的余裕がないので単位をかき集め卒業、都立高校の物理の教員になる。試験だけはめっぽう強かった。教員になった動機は不純。生徒への影響力で社会を変える原動力になるのではの考え。教育の本質を全く知らなかった。

男ばかりに囲まれた中学高校、そして工学部の生活。赴任した高校は工業高校で男ばかり。初任校で 16 年、少し長すぎたと後悔しているが、組合運動に燃える。直ぐに同じ年に入都した妻と知り合い結婚。高校でも大学紛争の影響でバリストもあったが、学生運動の経験が役に立ち彼らを圧倒。その後、中学・高校の非行が広がり、勤務校があった葛飾区は特に大変な状況。中学の教員であった三上満氏と連携し非行対策委員会をつくり取り組んだ。妻の職場まで徒歩 3 分、私の職場まで自転車で 5 分の所に住み、地域の定例の教育懇談会をつくる。生徒にはめげること多かったが、元気だった。

17 年目に中堅の進学校に異動、リベラルな校風に落差を感じた。地元の中学生の憧れの高校で、自由にノビノビ。制服もなく部活などで高校生活を楽しんでいる。もちろん共学。子どもたちに責任を持ち、自由に生徒が育た

つ環境を整える。修学旅行は平和教育として、学校として 15 年連続して広島に。地元の原爆慰霊祭には生徒とともに参加。相変わらず組合の役員をやり多忙だったが、学校では学校運営にも直接責任を持つことになる。組合役員をやり、担任をしながら学年主任、学校の運営委員。民主的な学校運営で生徒本位の学年を作ったと自負している。一緒に担任をした若い教員などは、管理職への誘惑を断ち切り平教員を続けることを選んだようだ。

環境問題に直面する中で時間が欲しかったことといろいろな子どもたちと接してみたいので、3 校目に定時制への移動。その4年間も楽しかった。これまでの教育の中で疎外された子や、私より年上の生徒もいた。しかし、だんだん管理体制が厳しくなり、入学式・卒業式には「日の丸を上げよ。君が代を歌え」と強制される時代になっていた。私の行動を黙認してきた管理職に限界が来ていた中、自然環境問題に取り組むため 56 歳で退職。

2 校目の学校に移る頃、事情で妻の実家である千葉県四街道市に転居した。農家で周りが山。自然の宝庫。東京まで 1 時間の何にもない所だからこそ開発の動きが起こっていた。千葉にはハマコウがいる。田中角栄の日本列島改造論のころ、角栄関係の日本電建が周辺を買占めていた。脅され・騙され、既に田・山林を売却させられていた。地上げである。オイルショックなどで挫折・凍結していたものが、動き始めた。調べてみると、区画整理名目の、自然を完全に破壊する開発事業だ。あまりのひどさに区画整理に対する反対運動を行うことになった。居住地は市中心部から離れた農村部、保守的な地域だ。

環境アセスメントを見ると滅茶苦茶だ。すぐわかるメダカやホタルが載っていない。雨水調整池もコンクリートで固められている。自然保全などは全く考えていない。自然観察会を重ね、1 万 3 千人の署名を集め市議会へ自然保護を要請する請願を出す。市の人口は 8 万人ぐらい。採択はできなくなったが無視はできず、趣旨採択となる。何十億の利益を生む区画整理に市民運動を作り反対したのでいろいろな攻撃はあった。何名もの知りいからは「ねらわれているので気をつけろ」とも、実際に右翼の街宣車まで来た。丁度トトロの森のことがマスコミを騒がしている頃だったので、市民の中に自然破壊の問題は浸透しやすかった。自然の保全に一定の成果を残した。その関係者たちと、2001 年に「四街道メダカの会」を発足した。現在は NPO 法人になり、市内の自然環境問題の中心の一つとなっている。2012 年建設したビオトープムクロジの里が残土汚染の影響で閉鎖、違法残土への取り組みを始め、今も続く。

2014 年市と協働でたろやまの郷(4.9ha)の里山づくりに着手。いまは NPO 法人四街道メダカの会代表や設立にも関わった「子どもと自然学会」の理事などを務めている。

知人に引っ張られ大田堯氏宅での学習会に参加するようになり教育学(学習学かな?)の勉強から抜けられない。大学時代勉強しなかったが、今は難しい学者連中とも付き合う羽目になっている。

メダカの会の HP や私の Facebook、検索して見て下さい。市と協働で里山「たろやまの郷」を作り運営。近くの団地で自主的な朝市を 20 年間続け、売り上げは年 50 万円ぐらいの無農薬有機農業の百姓に。

マラソンは 3 時間 9 分まで、サブスリーには届かず。富士山登山マラソンは完走。いままジョギングはしています。

氏名 富田 廣 S48年 農学科卒業 埼玉県在住

①主な履歴

。1968年農学科に入学 園芸研究室に所属しましたがこれといった研究はしませんでした。1年留年し1973年卒業。学生自治会の活動を手伝いました。1年生の時、農業問題研究会に所属し、長野県の栄村に調査に行ったことが思い出に残ります。

②記述欄

1973年 4 月から埼玉県園芸試験場の花き部に勤務しました。埼玉県庁の農林部には農工大の先輩がかなりいました。

埼玉県はチューリップやユリなどの切り花、花木や草花の鉢花、花壇苗の産地です。埼玉県の試験場ですの、県内で生産される花きに対応した仕事をしてきました。

就職直後から1980年代にはツバキ、梔子を中心に花木鉢物、切り花では埼玉県吉川市の特産のハナショウブの促成栽培の仕事をしました。1988年にチューリップ球根、1991年にリ球根が自由化が自由化され、埼玉県の切り花生産に大きな影響を与えました。そこでチューリップ、ユリの切り花生産の研究をしました。

埼玉県職員になってすぐに労働組合の役員になり退職直前まで続けました。

③近況など

2010 年に 60 歳で定年退職をしました。退職後は地域で活動しながら加須市の年金者組合の役員をしてい

ます。学生、県職員時代は活動する仲間の意識のばらつき(?)があまりなかったように感じていましたが、地域の仲間にはいろんな人がいて大変です。愚痴を言いたくなります。どこかで発散したい！

退職間近から家の近くに畑(15アール)を借りてビニルハウスも作り、野菜や果樹を植えて楽しく畑仕事をしていましたが、2年くらい前に畑の周りが大規模に宅地開発され、畑も宅地になってしまいました。残念！

氏名 鳥谷 靖 S44年 獣医学科卒業 東京都在住

①主な履歴

1968 年、農学部学生自治会副会長を1年間務めた。

②記述欄

卒業後は、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」に憧れて、北海道で勤務した。当時の開拓者精神を実施すべく或る村の村議選に挑んだが当選には至らず。挑戦したことを理由に村八分の状態に追い込まれて、泣く泣く、東京に舞戻った(72年3月)。その後は、東京都に就職し、32年間の公務員生活を送った。たまたま美濃部都政と言うこともあり、都民が主人公の都政とはどういうことか、憲法を都政に活かすとはどういうことか、日々の仕事をどういう立場で推進するか等々を労働組合で徹底して学んだ。今までとは違う、自治体とは何か?という新しい世界に在ることを日々痛感し学び悩んだ。それを支えてくれたのが労働組合の「自治研活動」だった。

都民が生活している現場に足を運び、調査を行い、その声を日々の行政に反映させるべく、必要に応じては、管理職に要請行動を行った。面白いと感じた。やりがいのある組合活動だった。そして、それまでの運動を集大成した「農のある街づくり、産業のある街づくり、人の住める街づくり」大運動実行委員会が、東京で結成され、そのメンバーの一員として活動できることに、かつて経験したことのない喜びを感じた。

知事が変わり、労働組合に加入することが困難な現在からすると想像できない運動を労働組合がイニシアチブをとって、しかも東京でやったことの意味は大変に大きいと考えている。

32年間の現役生活を終えて、今は地域で9条の会活動に参加しているが、憲法を暮らしに活かす活動は、労働組合で学ぶことが出来た貴重な財産である。

安倍政権で集団的自衛権行使容認(14年7月)に続いて、安保法制法強行採決(15年9月)、そして、2022年の安保3文書閣議決定等々戦争できる国から戦争する国に政権は突き進んでいる。

広島・長崎にアメリカが原爆を投下して80年、日本国が敗戦して80年の節目の年。日本国憲法が公布されて79年、この間、日本人が一人も戦死せず、他国の市民を1人も殺さなかった、そのバックに侵略戦争はしない、そのために武力は行使しない、国に交戦させないと世界に誓った憲法前文と9条を何としても維持して行くことが必要である。

日本国憲法9条と前文が、ロシアのウクライナ侵略戦争やイスラエルによるパレスチナガザ地区へのジェノサイドで無実の子どもや女性、高齢者が虫けらのごとく殺されている今こそ、確かに必要な国際的市民の正義の力になり得ると考えている。

地球上から戦争を無くすために“9条は世界の宝物”というメッセージをもっともっと広めていきたい。これが私に残された人生の課題であり目標であると深く認識している。

氏名 長塚 隆 1970(S45)年 農学科卒業 東京都在住

①主な履歴

同好会「Nets 風の記録」幹事

②記述欄

前回の「風の記録」の発行は2011年の東日本大震災の直後でした。そのときから14年が過ぎ去ろうとしています。この期間には、それ以前の10余年と比べても、東日本大震災や2024年元旦の能登地震とそれに伴う災害、2019年末からのコロナパンデミック、2022年のロシアによるウクライナ侵攻など、多くの苦しみに伴う出来事を経験した日々であったように思います。

それでも、この十数年は教員あるいは研究者として「情報学」の一端を探求してこられた日々であり、そのなかで新たな体験が出来た日々でもあったように思います。2010年代は台湾、中国などアジアの近隣の国々の大学との学

生交流が促進できないものかと考え、少しずつですが実現した時期でもありました。台湾の大学には学生を引率して何回か訪問して学生は先方の大学の授業に参加し、他大学や図書館・博物館を訪問するなどの機会を得ることが出来ました。先方の先生方とも、国際学会で研究発表のときにお会いして親しくなるのとはまた別の深い交流が出来たように思います。昨年(2024年)12月にコロナ感染症以降では初めて台湾を訪問することが出来ました。台北にある大学の学科創立記念国際会議に招かれて訪問した際に、10年以上前に来学し、親しくなった元大学院生のみなさんと本当に久しぶりにお会いでき、色々な話が出来たことは嬉しいことでした。

2014年に発足した同好会「Nets 風の記録」の活動には出来る範囲で積極的に参加してきました。毎年の定期的な講演会やセミナーの企画などの検討会では、学生時代に知り合った方がその後それぞれの分野で努力されてこられた取り組みなどを講演会でお聞きできることは楽しい時間でした。

特に、コロナパンデミックで集まるのが難しい時期に、同好会「Nets 風の記録」の活動をどのようにしたら継続できるかについて、Zoomで同好会長宮井迅吉さんや事務局長淵野雄二郎さんなどと話し合いを行い、その後、講演会をオンラインやハイブリッドで開催できたことが記憶に新しいです。

同好会「Nets 風の記録」の構成員が段々と年齢が高くなってきていますので、今後、どのようにして活動を継続していくか、より若い年代の方々との連携を深めるなど、さらに工夫が求められていると思います。その点では、2023年11月の講演会&交流会は、蓮池安彦氏(獣医 H10)をお迎えして、「多摩地域における高濃度 PFAS 汚染と住民運動」のテーマで開催出来たことは今後の活動の大切な指針になるのではと考えています。

③近況など

生成 AI の急速な技術的發展や社会に及ぼす影響に関心を持ち、生成 AI による情報の「創作」の意味や従来の検索エンジンによる情報探索との違いなどについて検討したりしています。2023年には、コロナパンデミック以降では初めてベルギーとオランダでの国際会議で発表する機会がありました。また、2024年には、オーストラリアのブリスベンで開催された国際会議に参加し、その後いくつかの大学を訪問できたこと、12月には台湾の大学の学科創設記念の国際会議で、生成 AI に関する報告をしました。国際会議とその前後でのオーストラリアと台湾での滞在の時間は、コロナパンデミックのために、ここ数年間はオンラインでしかお会いできなかった方達と再会でき嬉しい時間でした。

氏名 西村 孝彦 1971 (S46) 年 農業生産工学科卒業 神奈川県在住

①主な履歴

農工大学生自治会役員1年、東京都組織支援1年半

②記述欄

理不尽なことは今も昔もある。振り返れば就職時の理不尽さも「今思えば・・・」ということになっている。東京を離れたおかげで今の妻と知り合い、孫にも恵まれた。民間企業を経て地元に戻り公務員となり、退職して18年目を迎える。

水道・下水道・建設行政に係り、中でも下水道が長く、施設設計や処理水の栄養塩類の除去・再生利用水の消毒技術・内分泌攪乱化学物質調査など下水処理に関する行政に多く携わってきた。しかしこれといった決定打は打ち出せなかった。

身体は弾性限界を超え、塑性域に入っており、頭はまだ大丈夫と思っている間に、家族から指摘されることが増えてきた。また、体力が整えば今でも同期のクラス会に参加し、過ごした日々、様々な思い出、辿った道などに花が咲き、気の休まる日があるのもありがたい。

様々な事情で選択しなかった生き方、伸ばしきれなかった可能性、遂げられなかった希望など様々ある。しかし、新しい戦後だけは作らせない。それも今は手の届く範囲でしかできないが。

③近況など

大学時代より身長が4 cm縮み、心臓、腰に持病を抱えているが、カラ元気で過ごしています。

氏名 平井 保夫 1971年（S46年）化学工学科卒業

茨城県在住

①主な職歴

たいしたことはしていません。

②記述欄

農工大学の小川さんという人から電話と聞いて、化学工学科の彼は早い時期に亡くなったはずと思いながら、電話に出たところ、随分とはっきりした口調で話されたので、人は変わるものだと思いながら調子を合わせておりました。しばらくしてからこの風の何とかというメールを頂き、私の知っている小川さんとは別の人だったことがわかりました。訳のわからない人の申し出に答えるべきではないとおもいましたが、淵野さん、宮井さんの名前がありましたので、近況を報告いたします。

現在 79 歳になっております。茨城県の水戸市に住んでおり、至って元気に過ごしております。とはいうものの体の色んなところが不調をきたしております。しかしながらテニスや卓球で体を動かしており、また週 4 日勤めに出ております。アナログの世界に生きてきた我々にとって、変化の激しいデジタルの時代に付いていくのは、結構大変です。

今後の日本について思うことは以下のようです。

農業については減反政策はやめ、米価を引き下げて、輸出に活路を求めるべきです。酪農もしかり、工業のようなものです。自分もそうであったが、その他の工業も過去の成功事例に胡坐をかいて自己変革を怠っていた。戦後の日本は、朝鮮戦争、ベトナム戦争の特需で大きな恩恵を得たにすぎません。

これからは土地の値段の凍結、第 2 の農地改革（農業を専業にする人に農地を配分）、反アベノミックス（銀行の商売が成り立つように）金利を上げることにより原材料の購入価格を引き下げ、日本人の技術、勤勉さを生かして産業を元気にさせることが必要です。

勝手なことを申し上げてすいません。皆様、お元気でお過ごしください。

氏名 福島 安正 S47年 林学科卒業

宮崎県在住

①主な履歴

昭島市子ども会世話人連絡協議会役員 昭島市立つつじが丘南小学校 PTA 会長 1 期
立川市日本共産党後援会事務局長 宮崎県南部地区委員会地区委員

②記述欄

恥多き人生、唯その中で時々、うれしいこと、楽しいことがちょっとだけあった。

子ども会の行事で子ども達と遊んだ事、小学校の卒業式で日の丸君が代問題を入れた祝辞に労組の先輩が喜んでくれた事、マラソン大会で宗猛選手等、トップ選手とすれ違い、その迫力を感じたこと等、些末なことが思い出されます。

成功したと思えるものはない。今も残念なことばかり。

③近況など

1a あるでしょうか、借地の畑で野菜づくり、会計年度任用職員として市文化財課で開発用地の試掘作業に不定期就労、建交労の友人が立ち上げた高齢者福祉事業団での草取りや、剪定作業への従事、その他、近所のお年寄りの依頼ごとの処理等々。

2023 年暮れに妻が腰椎圧迫骨折で入院、安静加療では解決せず、手術のため、鹿児島県肝属町の病院に入院、4 月退院、健保でのリハビリを 10 月まで、その後、介護保険でのリハビリを、25 年 1 月現在、週 2 回。故に炊事や洗濯等の家事のあらかたを自分が行う状況。行き届かぬ事ばかりです。

氏名 福地 次雄 S46年 農業生産工学科卒業

福島県在住

①主な職歴 S43 年 樺寮寮委員 S45 学生自治会役員

②記述欄 アマチュア研究家としての幾星霜

後期高齢者となって二年目、皆様と活動を共にしたのはかれこれ50年以上前のこととなります。しかし、今でも当時の生活が鮮明に蘇ることがあります。夜型の生活が定着していましたので授業は欠席しがちでしたが、同僚及び諸先輩と夜を徹して時事問題、生きる意味などについて議論したことが思い出されます。唯物論、弁証法などという言葉に接したのもこのころであり、十分に理解できないながらも大きなインパクトを感じたものです。物理と数学に関心があったため、農業生産工学科を選択し、かろうじて4年で卒業し、以降修士課程に進みました。ここで私にとって生涯の恩師となる鬼塚宏太郎先生に会い、日々薫陶を受けることとなりました。修士修了後福島県に奉職しました。

さて本題に入りますが、私は、数値解析に関するアマチュア研究家としてこれまでの五十有余年過ごしてきました。実験科学においてアマチュア研究家と言う概念は成立しがたいのですが、理論科学においては成立しえます。誰でもが入手できる PC さえあれば当世最先端の数値解析の領域までもアプローチが可能です。あらゆる物理現象の生成発展収束過程は時間と空間に関する微分方程式で表現されます。通常使用される数値解析手法に有限差分法と有限要素法がありますが、私は有限差分法を研究対象としました。当初、水路等の壁面せん断乱流について、日本学術会議の理論応用力学部門の英文誌に4報にわたり、研究成果を公表しました。次に米国土木学会より平均流速計算に関する重要な概念を提案しました。鬼塚宏太郎先生の薦めにより、以上 5 報の成果をまとめて、博士号の学位を取得しました。2008 年福島県退職後は、具体的な計算対象から離れて数値計算の一つの手法である有限差分法自体に関する研究に転じました。

米国物理学協会(AIP-Advances)より 6 報、International Association for Mathematics and Computers in Simulation より 1 報、地盤工学会英文誌より 2 報等これまで年 1 報の割合で 17 の論文を公表してきました。研究によって明らかとなった事実は、従来、数だが、無制限に厳密な計算が可能となり、かつ計算速度が大幅にアップしたことです。更には、有限差分法では任意領域での計算は困難であるとされていましたが、それが自由自在に可能であることとなりました。数値計算を必要とする無数の領域(農業、土木、建築、気象学、天文学 etc.)がありますが、それらは単に微分方程式が異なるだけで、ある単一の本質の発現形態であるという視点から研究を継続しました。私の全ての公表論文(25 編)は internet で "Tsugio Fukuchi" と入力して検索するか下記 ResearchGate URL より down load 可能です。 <https://www.researchgate.net/profile/Tsugio-Fukuchi>

以上の報告をすることは、恥ずかしい(迷いがある)ことなのですが、ただし、私のようなごく平均的な者でも、何かに魅せられ、寝ても覚めても思考を継続することにより、意味のある結果に到達できる(かもしれない)ということを伝えたいためです。私は自分の好きなことに夢中になることができたのはラッキーでした。それは家族を含む多くの方々の支えによるものと思います。将来社会が進歩し、個々人が十分に自由な時間を獲得できるようになるという見通しがあります。仕事と趣味(何か夢中になれるもの)が良好にバランスし、人々がそれぞれの人生を謳歌できる社会はすばらしいものと思います。

既知問題の解を瞬時に再現する能力に恵まれた方は優れた方であると思います。しかし、何か新しい価値を創造しようとする者にとっては、余りそのような能力は関係なく、研究思考対象に対する内面からの溢れる美意識が決定的な意味を持つと考えられます。徹頭徹尾イメージを追いかけて、"神の啓示"あるいは"結晶化"を待つ。これをひたすら繰り返す。これで一定の認識の高みに到達できると思われます。

学生時代に私なりに得とくした弁証法の基本命題、①対立物の闘争と統一、②量から質への転化、及び③否定の否定は、私の理論の発想と全体像を構築するために重要な意味を持ちましたが、詳細割愛します。なお、ライフワークは天命が下るまで継続したいと思っています。皆様お一人おひとりがそれぞれの領域で充実した暮らしを送られることをお祈りいたします。

③近況など：妻に先立たれ、家事の大変さを痛感しています。本当に家族に支えられていたと実感します。月に一回、英語学習会を開催しています。拙いながら講師をしています。受験英語が日本の語学学習をダメにしているという説があります。相当英語が堪能でもリスニングと会話が困難な事例(私を含めて)があります。理由は一番重要な英語発声が発音に関係なく、本格的指導がなされることが少ないためであるとのこと。

氏名 藤田 正三

S51年 林産学科卒業

茨城県在住

①主な履歴

S51年林産学科 S53年大学院修士。その後、商社、住宅メーカー勤め。30歳の時、水戸へ戻る。農業団体に65歳まで勤務。その間、農林水産大臣賞、食料・農業・農村政策審議員(食料産業部会)委員

②記述欄

茨城県北部の貧しいサラリーマンの三男として生まれる。高三の時、農工大卒の物理学の先生から、国立学費1000円/月、高校1500円/月と言われ農工大農学部に進学。寮費は安く入寮。林産学科木材材料学、木材組織学、蕪木自輔先生研究室へ進む。寮生活、学生生活を通して学科、学年を越えた交流から良い経験を受け、現在、二つの仕事に就いてられるのも、このときの経験が生きていると思う。一つは埼玉県内に本社を置く長ネギ専門の栽培、販売商社。もう一つは茨城県内にある冷凍総菜工場顧問として勤めている。埼玉県内にある会社では、各産地での農業労働力の支援を主な業務としている。1993年農業研修生制度以来、その名前が変わる中、現在、特定技能枠外国人の受け入れ、農家さんへの派遣を行っている。先日、一例として、栃木県内農家さんに受け入れられていた特定技能枠の彼等(主に5月から11月にかけてハウレン草ハウス栽培、出荷に従事)を、12月初旬、茨城県内農家さんに典籍移動しました。ことらの農家は、イチゴを主な栽培品目として小松菜、ハウレン草と多品目栽培。このように産地を変えて、ハウレン草(春～秋)、イチゴ(冬季)と農家さんサポートを行っている。将来、インドネシアから家族を迎え、移住する希望者も生まれている。今後、日本にしっかり定着するように貢献したい。笑いのあふれる職場を築くサポートができればと思う。冷凍総菜工場は農水省から支援を受け、設立。間もなく10年目を迎え、増築計画を目指し、生産者と一緒に栽培面積を拡大し、製造量の向上を考えている。耕作放棄地が増え、農業人口減少の中で、現在、収穫の機械化に取り組んでいる。そのアイデアをメーカーとすり合わせ、デモ機の開発中であります。農家さんからの期待が強いだけに、数年で実現したいところであります。

前述した蕪木自輔先生から、『フジタ君、農工大生には、その君の両肩には、責任があること、忘れないように。』と言われたこと、その意味を考えながら、日々過ごしております。感謝。

③近況など

2023年8月 人間ドック 前立腺ガン見つかる。

2024年1月 前立腺癌摘出 結果良好で、今に至る。

氏名 藤本 聡志

S53年 農学科卒業

広島県在住

①主な履歴

- ・1954年10月生れ 出生地 広島市佐伯区五日市町上小深川178(現在も)
- ・1970年 4月 広島県立広島観音高等学校 入学
- ・1973年 4月 農工大学農学部農学科 入学
- ・1979年 4月 広島県農協中央会入職 4月 広島中央保健生協入職
- ・1999年10月 日本共産党広島市西地区委員会勤務
- ・2000年12月 同 党広島県委員会勤務
- ・2011年 1月 同 党広島市西地区委員会勤務
- ・2022年 4月 同 定年退職

(団体活動歴)

- 1975年～76年 日本農学系学生ゼミナール連合中央役員
- 1979年 民青同盟県西部地区委員会常任委員
- 1980年～82年 民青同盟県委員会常任委員
- 1995年10月～ 広島市原水協常任理事(現職)
- 1999年6月 佐伯区災害救援センター運営委員
- 99年6月 地元の土石流災害で被災し、救援活動に奮闘。
- 2010年 NPTニューヨーク行動に参加

(選挙活動歴)

- 2000年 6月 衆議院広島2区立候補

2001 年 7 月	参議院広島選挙区立候補
2003 年 10 月	衆議院比例代表中国ブロック立候補
2004 年 7 月	参議院広島選挙区立候補
2005 年 9 月	衆議院比例代表中国ブロック立候補
2007 年 7 月	参議院広島選挙区立候補
2009 年 8 月	衆議院比例代表・広島一区立候補
2011 年 4 月～	広島市議会議員佐伯区選挙区に立候補
2023 年 4 月	同上 当選し市議に

②記述欄

私の歩んだ道

高校2年生の頃、緑の田んぼに仰向けになり、自分の将来の生きる道を考えました。レンゲがたくさん咲いていたのを覚えています。目を開けると、青い空に雲が沸き立つように浮かんでいました。

私は兼業農家の家に生まれました。父親は国鉄に勤務し、夜勤で駅に泊まった後、午前中に帰ってきて、午後からは農業をしていました。母親は商家に生まれましたが、父親といとこ結婚をして畑を耕していました。私は、「将来、北海道などで大規模な農業をしてもいいな」と思い、再び空を眺めて「やはり農学部に進むことにしよう」と思いを定めました。

大人になったら農業をやりたいという思いは、親の農作業を手伝いながら、中学校の頃からおぼろに考えていました。母親は、小規模だけどビニールトンネルのハウスを立てて苳を栽培し、出荷時には作業がたいへんでした。父親も勤めから帰って手伝い、私も子どもながらよく手伝ったものです。

そういう経過で農工大に入学しました。私たちが入学する頃は、いわゆる学園紛争が激しく、いやおうにも社会に目を向けざるを得ませんでした。それが、私が社会に目を向け、革新的な政治をつくらうと思うきっかけになりました。当時はちょうど革新都政の時代でした。

私の暮らす環境は、広島市郊外の田舎から大学に入学して大きく変わりました。私は、クラスの委員を選ぶ時に、学内で自主的な学習文化活動を行うという農学ゼミナール(農ゼミ)委員会の委員になり、それがさらに私の目を社会に向けるものとなりました。

自主サークル運動で、食糧自給率の低下、兼業化の急速な進展、都市化と自然破壊、公害問題など、学生が自発的な学習活動を旺盛に広げていました。私もそれらに加わり、さらに夏休みには北海道への援農実習も組織して参加するなど、農業とその環境をしっかり理解するうえでたいへん役立つ活動でした。

私の関心がしだいに農政に向けられるようになり、大学の専門は井上完二教授の農業経済学に進みました。卒業後は、広島県農協中央会の営農振興部門に進みましたが、その後、経営学の知識を生かして生協が経営する病院の経理、日本共産党の専従活動家を経て、広島市議選に4回挑戦し当選しました。

現在、日本農業は自給率が下がるとともに高齢化で深刻な状況です。広島市議会での議論を聞いていても、なかなか展望が見えてきません。農家の高齢化で地域の農地は休耕が相次いでいますが、その農地を活用できる主体が見えてきません。自治体の農業政策には様々なメニューが並び、補助金もありますが、それを実施する主体を想像することができないような状況です。確かに若い人が農業や田舎への関心を高めているのは感じるのですが、都市近郊で経営耕地面積が極めて小さく、平坦地の少ない広島市近郊で、若い人がそれで生きようと決意するためには、まだ何段もの障壁があるように感じています。それをどうしたら克服できるのか、議会での私自身の模索も続くものと思います。

③近況など

現在の家族、母・妻。好きなもの、花と自然

氏名 瀧野雄二郎

S43年 農学科卒業

埼玉県在住

①主な履歴

1971年4月東京農工大学大学院農学専攻修了、同年5月東京農工大学文部技官に任用され、1973年に助手に昇格し、1994年に助教授、2005年に教授昇格し、2011年に定年退職を迎えるまで40年の長きにわたり本学の教育研究に従事することができました。

②記述欄

(1) 農業経済学教室の共通テーマと協働活動

私が学生生活を送った1960年代後半は、高度経済成長がピークを迎え、大都市圏への人口集中と一方での農村地域の過疎化の進行という社会現象をどう把握し、農業構造にどのような影響を及ぼすかが関心事となりました。高度経済成長政策は所得倍増計画の実現に邁進し、その傍らで社会格差、所得格差の形成が懸念され、政策的にも農工間の所得均衡を目標にした農業基本法が1967年に制定されました。そこで提示された農業所得の拡大方向は、農産物需要動向を反映した“成長作物の選択的拡大”、“農業構造改善事業“などの”農業近代化路線でした。この政策が農業・農民・農村にどのような影響を及ぼすかについての理論的・実証的研究が研究室の主要テーマでした。恩師の大谷省三編「現代日本農業論」農文協1963年刊は、まさに時宜を得たもので農業経済学を志すものの必読の書でした。また、一方で、出稼ぎ農民や低所得農民に対する支援という運動論的視点からの関心も強く、いわゆる労農学提携の実践活動にも参加しました。その具体的な実践は、農村労連(1962年に設立、後に全日自労と組織統合)を支援する活動でした。設立当時は不安定就業条件におかれた農民が主体でしたが、個々の農民が就業先の賃金未払いや就業条件改善に立ち上がるのは大変なことで、全国・県レベルでの連合会が雇用主や下請け業者との交渉や三省協定を守らせるための自治体交渉を行っていました。しかし、一般の企業組合とは違い、その組織化は容易ではなく、“都市の労働者や知識人や学生がこの農村労働組合を物心両面から支援しよう”という呼びかけがありました。この呼びかけを受けて、岩崎徹先輩(S45年農学専攻修了、札幌大学名誉教授)の音頭で農村労連学生後援会を結成し、文化厚生農協連合会におかれた労働者後援会に協力して農村労連書記局を支援することになりました。仕事の内容は大会や中央委員会のための資料作成や発送、大会当日の会場設営などの実務面での仕事でしたが、たまには出稼ぎの現場に酒を持って激励に出向き、書記局の役員と一緒に賃金未払いの交渉のために下請けの親方のところまで出向いたこともありました。この実践活動を通して、金田光弘先輩(S44年農学専攻修了故人)が秋田県農村労連に、村上光江さん(S45年農学科卒)が本部書記局に就職しました。村上さんは農村労連が全日自労に組織統合されるまで書記局を支え、その後は千葉県で仲間と農業生産法人を立ち上げ女性農業者として頑張っています。

(2) 民医連医療従事者との交流

大学院生時代、雑司ヶ谷の鬼子母神病院にパート職員として、地域医療に献身的に取り組んでいる医療従事者と交流、多くのことを学びました。実はこの病院の二階に全日自労の本部事務所があり、出稼ぎ農民や未組織労働者の医療相談や巡回診療、集団検診など献身的に取り組んでいました。“無差別・平等の医療と福祉の実現をめざす”民医連綱領“が、医師から正規職員、非正規職員の協働労働の基本目標として浸透しており、一介のアルバイト職員の私にとっても、その後の人生の指針となりました。

以下に、民医連綱領の基本目標を掲げておきます。

- 一、人権を尊重し、共同の営みとしての医療と介護・福祉を進め、人々の命と健康を守ります。
- 一、地域・職域の人々と共に、医療機関、福祉施設などとの連携を強め、安心して住み続けられる町づくりをすすめます。
- 一、学問の自由を尊重し、学術・文化の発展に努め、住民の健やかな成長に貢献します。
- 一、科学的で民主的な管理と運営を貫き、事業所を守り、医療、介護・福祉従事者の生活の向上と権利の確立をめざします。
- 一、国と企業の責任を明確にし、権利としての社会保障の実現のためにたたかいます。
- 一、人類の生命と健康を破壊する一切の戦争政策に反対し、核兵器をなくし、平和と環境をまもります。

私たちは、この目標を実現するために、多くの個人・団体と手を結び、国際交流を図り、共同組織と力を合わせて活動します。(1953年全日本民主医療機関連合会)

(3) 都市農業を支える行政、JA、消費者と農業者の協働活動

幸いに、私は1971年から東京農工大学に職を得て農学部学生の指導にあたることになりましたが、農村労連学生後援会を発展解消し、農業問題を学生と実践的に勉強するサークル“大地の会“(のちに耕地の会と改称)を立ち上げました。学生の自主的なサークルでしたが、私にとっては、市民や農業者との協働活動のパートナーでした。ここ

では、北多摩地域で都市農業を支える援農ボランティアの一員として取り組んできた、協働活動を紹介します。

◇国分寺市の「農のあるまちづくり」講座・懇談会への参加

1981年に元町公民館が農協、消費者団体、市民に呼び掛けて企画した「農のあるまちづくり」講座に耕地の会メンバーと一緒に参加しました。この講座は「市民に都市農業を農業者だけの問題としてではなく、全市民的課題として位置づけ、地域住民や消費者も自らの生活の視点からとらえ直す契機にする」(菊池滉公民館主事)という取り組みでした。講座は1981年～1991年まで開講されましたが、単なる座学に終わらせるのではなく、受講生一人一人が生活者の視点から、実践的課題を明らかにし、講座の企画に反映させるという運営方式でした。

この10年間の取り組みは、講座講師、農協役員及び公民館主事の編著による『『農』のあるまちづくり』学陽出版1989年刊』として出版されました。特筆したいのは、第一回の講座が終了した直後に結成された『国分寺の街づくりと農業を考える懇談会』でした。この懇談会には、農協の役員、多摩地域の大学教員及び学生、農業研究者、都農業改良普及員、農協婦人部、生協の代表などが参加しています。懇談会は毎月定例的な会合がもたれ、講座プログラムへの助言指導とともに、この10年間の「農のあるまちづくり」運動の総括と国分寺の行政施策への提言をまとめる役割が課せられました。1991年2月26日に懇談会としての提言をとりまとめました。

以下に、項目と行政担当課を記しておきます。

1. 樹林地の保全について(環境緑地課)
2. 市民農園の拡充について(経済課)
3. ゴミコンポスト設置の助成について(環境部清掃センター)
4. 学校教育における「農業学習」の充実について(教育委員会指導室)
5. (仮称)市民農業大学の開設について(経済課)

国分寺市当局も、この提言を真摯にうけとめて、具体的な対策を講じました。注目されたのは、1992年に国分寺市農業委員会の建議をうけて市民農業大学が開校されたことでした。

その目的の一つに「将来的な援農ボランティアとしての活動に向けてスキルを習得する」を掲げており、1998年「援農ボランティア育成事業」が開始されました。なお、この時期に、国分寺市農業委員会メンバーに、議会推薦枠として、新たに消費者代表及び学識経験者を4名選任するという改革がおこなわれました。幸いに、私も指名をうけ、三期9年間(2000年～2011年)農業委員を務めました。

◇小金井市農商学連携推進事業(2008年～2010年)

小金井市で、市民主導で、行政や農協の協力を得ながら、農商学連携組織(サロン)を立ち上げ、地域交流をベースにしながら、地域の農地を守り維持し、活用しようという事業に取り組みました。それまで、市街化区域内の農地には農水省管轄の事業は入りませんでした。生産緑地法施行後は各地域で市街化区域内農地の存在が見直されるようになり、農水省も“広域連携共生対流推進事業”を開始したものです。

この事業のモデル地域は、JR小金井駅の至近距離で、通称農工大学通りと呼ばれている商店街に、JAの直売所や東都生協のグリーンハウスという店舗があり、またデイサービスのグループが近くにカフェ喫茶を開いていました。行政、商工会、農協と生協、農家と飲食店の経営者が一堂に会して、農商学連携の協働活動を展開しました。この地域は市街化区域であり、相続による農地の細分化・宅地開発は止められない状況でしたが、一方で新鮮な野菜を求める消費者が周辺に多く存在し、“江戸東京野菜”の生産農家と連携して、地元の飲食店や介護センター、学校給食に食材として提供し、その普及に努めようという取り組みでした。

なお、このモデル事業は東都生協の店舗が閉鎖されたため、3年間で終了しましたが、食と農をつなぐ活動を支援するような協同組織を立ち上げる先駆的な取り組みでした。

◇小平市一武蔵野台地の援農ボランティア活動

北多摩地域には武蔵野台地が広がっており、江戸時代(16世紀)から広野を新田開発により畑としたところが多く、街道の両側に屋敷割をし、その背後に耕地(畑)、薪炭や肥料用の雑木林(平地林)短冊状に配置されていました。この歴史的に形成された農的風景が、この地域にはまだ随所に遺されています。

1994年に「小平市農業基本構想懇談会」の委員委嘱を受けました。私は小平市民ではありませんので、少しでも当事者意識をもって委員活動に臨むために、この地域の農の歴史と都市化の中で変貌する農村・農家の姿を理解する一助として、耕地の会のメンバーと一緒に援農ボランティア活動に取り組むことにしました。

第一次援農ボランティア活動(1994年～2006年)

1994年に小平市農業委員会から、小川2丁目の田口さんを紹介いただきました。この農家は世帯主が亡くなり、高齢の妻と長男のみでは手が回らない圃場があり、援農ボランティアの受け入れを希望されていました。また、当家の里芋栽培の作業支援とともに、学生の農業体験ファームとして活用できる圃場貸与もご了承いただき、栽培作物は武蔵野台地の伝統的な小麦・甘藷の二毛作を体験することにしました。

有機無農薬栽培で、播種―除草―麦踏み―収穫・乾燥の作業は手作業を基本とし、耕耘整地・畝立てについて

は、田口さんにトラクター作業等でご協力いただきました。問題は脱穀調製でした。梅雨明けに、手狩りで収穫した麦稈を農工大学に運び、農業工学研究室の圃場脱穀機で脱穀し、天日乾燥した粳を、小平市の立川米店で地粉にしてもらいました。この地粉の活用について小平市農業振興課からの助言があり、武蔵手打ちうどん保存協会との交流がはじまりました。協会の会長は小平生まれの加藤優次先生(国学院大学名誉教授)で、博物館学の第一人者で、農工大学でも学芸員資格取得のための講義を担当いただいております。また、先生は、全国のご当地うどんを研究する“うどん博士”としても有名でした。昨今の都市開発のもとで、農地・農家が減少する中で、小麦を栽培する農家も手打ちうどんを打つ家庭もどんどん減少していくことに危惧し、1988年に「多摩地域から埼玉に広がる武蔵野台地で採れた小麦粉(地粉)で打ったうどんを『武蔵野うどん』と名付け、より多くの人々に郷土のうどん文化を伝え、保存普及の活動を始めたい」ということでした。我々も、その趣旨に賛同し、小平市中央公民館で、毎年、保存普及協会の江連会員をお招きし、その年に採れた地粉を活用した「武蔵野手打ちうどん」の講習会を開きました。また、新入生歓迎会のイベントで「武蔵野手打ちうどん」を披露しました。

*なお、この援農ボランティア活動は田口家の事情で、2000年に終了し、引き続き2001年～2006年まで大学の近く農家の圃場に移り小麦栽培と野菜づくりは継続しました。

第二次援農ボランティア活動(2008年～)

2008年に再び学生と一緒に小平市の小山家の援農ボランティア活動に臨みました。今回は、農業委員会の依頼でした。対象農家は小川一丁目の新田開発当時の面影を遺す旧家で、青梅街道に沿った屋敷地には母屋、蔵とともに小平市の保存樹に指定されている樺と榎の周辺に椿や竹林など様々な樹木が植栽されています。また、屋敷内には1657年の新田開発時に玉川用水から取水された「小川用水」が流れ、その背後に短冊状の畑が地割されています。援農ボランティアを望まれた小山さんは、高校生の時に父親を亡くし、祖母と母と一緒に耕作してきましたが、現在は独り身で、広い畑と屋敷周辺の管理を行うことが難しく、一部は耕作放棄状態でした。今回は、単なる農作業サポートだけでなく、小山さんの意向を踏まえながら、当家の”伝統的な農的風景“を遺すという事を共通目的にしたボランティアグループの結成が必要になりました。そのために、リーダーシップを発揮できる人材が必要になりました。幸いに、その期待に応えてくれる人材を確保できました。木村角次郎氏が小平市外の人ですが、当地域に友人知人も多く、地元の信頼も厚い方でした。彼は立川市の農家の次男でしたが、幼少の時から畑作業を手伝い、立川市役所に勤めながら実家の農業を手伝ってきました。私との出会いは、科目履修生として本学を訪れた時からでした。「立川市職を退職した後の人生を農林業技術者として地域に貢献したい」という強い意志が感じられました。履修科目は複数学科に及び、人文社会科学系から森林生態学、環境生態学、生産環境制御学など農林業に関わる講義の他、実技講習にも熱心に取り組まれました。ある時、「学生サークルの耕地の会のメンバーと小平市の援農ボランティアを計画している。技術顧問として協力できないか」と問いかけたら、やりましょうと即決でした。早速、地主の小山さんと三人で、小山家の将来の圃場利用について協議しました。

まず、南北公道の西側の圃場には、日常的な管理作業を必要としないブルーベリーと柑橘類を植栽する。東側には当地域の伝統的な小麦―甘藷―飼料作物、ジャガイモ―小麦―秋野菜などの輪作体系を基本とする圃場を配置し、「耕地の会」と市民グループの協働耕作を行うことにしました。ブルーベリーは順調に生育し、植栽後3年位で摘み取り客を迎えるようになりました。問題は西側の小麦栽培圃場でした。当初は近所の大規模麦作農家が、グレンタンク仕様コンバインで一気に刈り取り脱穀をおこなってくれましたが、地粉にしてくれた、立川米店が閉店となり小麦栽培が困難になりました。

2015年にあらためて「小山ファーム援農に関する申し合わせ」を策定し、作付け体系及び圃場管理原則を見直しました。第一は、南北公道の西側に植栽したブルーベリー及び柑橘圃場については、木村技術顧問のもとで、剪定作業、除草や敷き藁の補給などは協働作業で行う。第二は、東側の圃場割り付けは、園主のトラクター作業に適應できるように、原則として、畝を南北に仕切る。第三は、優先的に確保すべき圃場として、東京農工大学、武蔵野美術大学の体験学習圃場、江戸東京野菜に認定されたピートン二世の実証圃場、その周辺に市民の共同野菜づくりグループの圃場を確保することにしました。各グループは「伝統的な農的風景を遺す」という共通認識のもとに、それぞれの活動スタイルで耕作管理しています。

なお、木村氏に全グループの技術指導、圃場周辺及び屋敷林の手入れなどの管理作業の実施、指導を併せ行っている。

(4) 所沢市と東京農工大学の連携活動

◇所沢市農業基盤整備推進事業計画策定(2009年～2010年)

2009年に所沢市から「所沢農業振興計画基礎調査」の業務委託を受けました。大学の独立行政法人化の下で大学の地域社会貢献が評価のポイントになるという声もありましたが、学生・院生のフィールドワークの道場として継続的な関係をつくりたいという意図もありました。千年助教授と取り組んだ二か年の業務委託でしたが、所沢市農業振興課職員との協働作業で、所沢市に関わる多くの知見を得ることができました。

第一年目は元禄 7 年(1694 年)に川越藩主の柳沢吉保により開発された三富新田の農業振興計画の為の基礎調査でした。対象地域の中富地区は一戸当たり約五町歩の短冊形の耕地が画一的に地割りされています。新田開発当時、村中央部に敷設された幅広の6間道路に面した屋敷地、その奥に耕地(畑)、雑木林(平地林)が配置され、雑木林はヤマと呼ばれ、薪炭や肥料用の落葉・下草の採集に利用されていました。

この地区はこうした伝統的景観により埼玉県文化財に指定されており、この景観を損なうような開発計画は制限されていましたが、1990 年代に農道建設問題が浮上しました。耕地の中央を一間幅の作道が屋敷地から雑木林に向かって伸びており、荷車で肥料や収穫物などを運搬する道でしたが、現代のトラクターや車両が自在に入れる作道ではないし、なによりも東西に抜ける道路敷設の要求が高まり、農道整備促進協議会が発足、市行政への要請行動が始まりました。そこで農業振興計画策定への提案に向けた基礎調査の業務委託があったわけです。

研究室の院生、学生を動員し、対象地域の歴史及び概況調査、全戸悉皆調査により農家の意向を把握し、実際に解決を要する道路建設問題について、地元の関係者との会合や、調査結果を持ち寄ったワークショップを開催しました。調査に参加した学生が報告しましたが好評でした。この調査結果については、農村計画学会誌の特集論文として掲載されました。

※「所沢市中富地区の歴史的景観保全と農業振興計画―景観保全と農業振興の両立を誘引するソーシャル・キャピタルの形成と変容―」(2009 年 12 月号第 28 巻 3 号)

第二年目は、所沢市全体の土地利用計画(農業振興促進整備地域及び都市計画地域)の中に、農業基盤整備計画をどのように位置付けるかを検討し、当市の特色を生かした地域農業振興施策のための基本視点を提示することでした。JA 支所単位に、将来の地域活性化の方向について、関係者及び代表的な農業者及び農業団体からのヒヤリングを実施し、それぞれの地域の特色、農地及び農業資源、環境資源、史跡などの歴史的資源の保全を視野に入れた整備手法を農業振興課との協働作業で検討することにした。

以上の協働作業を通じて、「所沢市の農業は、消費地に近い都市型農業の利点を活かした地産地消の取り組みの一層の強化が要請されているが、それだけではなく、環境保全や防災、教育、福祉などに関わる多面的価値が高く評価されている。また、農業・農地への関心の輪も広がっており、計画策定にあたっては商工業者、学校教育関係者、福祉医療関係者などの意見を反映させることが求められる」という共通認識が得られた。

◇所沢市と東京農工大学との包括連携協定プロジェクト

2013 年に所沢市と東京農工大学の包括連携協定が締結されました。本協定は「所沢市の農業振興及び環境に配慮したまちづくりに関連する領域において、所沢市の農業資源を東京農工大学の教育研究のフィールドとして活用するとともに、東京農工大学が所沢市の行政活動に活用するため教育研究を実施することにより、地域リーダー及びコーディネーターの育成と地域社会の発展に寄与すること」を目的に掲げています。

本協定による主な連携・協力の範囲は以下のとおりです。

I. 大学の農学・農学部教育プログラム事項

地域活性化プログラム、インターシップ実習、農村社会調査実習、農業体験実習

II. 大学の人材、知的資源等の活用及び連携協力関係事項

- ①農業振興に関する事項、都市環境の保全及び環境に配慮したまちづくり推進に関する事項、
- ②歴史的史跡及び伝統的景観保全に関した街づくり推進に関する事項、
- ③農工大が研究する先進技術の導入、実証圃の設置

なお、このプロジェクトを推進するための連携推進協議会が、所沢市は市長及び副市長、東京農工大学は荻原勲農学部長、笹尾彰名誉教授(元副学長)の 4 名で構成されました。また、大学側の推進組織の名称を“農工大学 TOKORO の会”と定め、上記、連携・協力範囲で協力いただける先生方への加入をお願いすることにしました。なお、私は、所沢市都市計画審議会委員(2011 年～ 2024 年)として、上記推進組織に参加し、包括連携協定の推進に協力しています。

③近況など：

- (1)学生サークル「耕地の会」メンバーと小平畑の援農ボランティア活動に取り組んでいます。

ブルーベリー、小麦―さつまいも栽培で、さつまいもは“芋きんつば”にして学園祭で販売、好評です。

- (2) 2014 年から、所沢市市民大学講師として、“日本の農業”講座を担当しています。シニア世代の「自然と農業」サークルの出会いは、私にとって第二の人生のスタートになりました。

氏名 堀 俊一

S47年 養蚕学科卒業

千葉県在住

①主な職歴 学卒後、農業改良普及員。退職後 10 年間農業自営。

②記述欄

子供の頃から昆虫が好きで、大学でその勉強できたので楽しかった。農学部には類似の学科があったが、養蚕学科を選び、堪能した。また、園芸も好きで農学にも興味があったので、農学科の先生に頼んで実験実習にもぐらせてもらった。農場実習を受けたが、さらに興味が増して、個人的に農作業を教えてもらった。この時あたりから普及員になろうと思っていた。普及員になって、農家に入ってゆくときに役立ったのは、まず害虫学と土壌肥料学だった。農場で作業体験したことももちろんである。感謝。普及員になって某県内各産地を回ったが、その産地を代表する作物に接し、本からでは得られない作り方を学んだ。栽培指導はそれから先の工夫である。50 代以降、中間管理職となったが、心にモヤモヤが発生した。気落ちした時などは尾崎一雄著「虫のいろいろ」を読んで、気持ちを落ち着けた。この本は角川文庫で字が小さく、今では視力が弱くなって読めない。50才頃から、自分でも農業をやりたいくなった。そこで、早期退職して、空き家になっていた女房の実家の田畑を借り、そこに移り住んで水稻、野菜、果樹を作った。農産物は学友が買ってくれた。有機・無農薬栽培なので、幼稚園の定期的バザーで売れた。米、ホウレンソウ、サトイモの評判が良かった。大豆も作り、味噌加工した。70 才になって疲労がたまるので廃業し、大網白里市の家に戻り、家庭菜園を始めた。現在は、ご近所に無農薬の野菜を分けて喜ばれている。子供にうけるのでうれしい。

農業体験を「わたしのエコひいき農業 有機・無農薬栽培の実践」という本にまとめた。ある方の仲介で商業出版にしていた。しかし、この本は、カラー写真の枚数やサイズ、配置が希望通りにならなかった。新たな工夫も加えて再編集で、自費出版する予定である。

③近況など：もう一つ本を書いた。これは「会津歌農書」という福島県会津地方の農業技術と農家のくらしが書かれた江戸時代の本を現代語訳したものである。農家向けにすべて和歌で書かれおり、独創的で希少な本だ。某大手農業関係出版社から、江戸時代の農業技術書の現代語訳がシリーズで出ているが、この歌農書だけが訳されなかった。そこで、この本をこのまま埋もれさせるのは残念、との思いから訳してみた。私は和歌にも興味があったからである。この分野は、今日では民俗学の範疇であり農学ではない。翻訳から清書、校正までに何度も読んだが、飽きが来なかった。現代の農業技術との相違が分かった。また、封建制度下で虐げられていたと授業で習った農民の生産と生活には、少しはゆとりがあったようだ。希望者があればこの本を進呈したいと思っていたが、俳句などをやる人からわずかに希望があったのみである。需要が無いことは初めから覚悟していたことだが。次に、最近、民族植物学に興味がある。特に、ジャガイモとダイズの栽培化についてである。これら作物は、家庭菜園でも作れるので、「実験民族植物学」とも言えそうな取り組みになりそうである。そもそも、ジャガイモは霜に弱い、なぜアンデスのような寒冷地が原産地なのか。これが不思議でならなかったのだ。このことが事の始まりであった。また、ダイズの栽培化は縄文時代からで、栽培を続けるうちに豆が大型化した。栽培すると害虫が多いが、その害虫を食べたのではないかと、想像している。

短歌も始めた。私の一生が平凡であったので、やはりそんな歌しかできない。歌集を作ろうとして 15 年前の短歌を読み直してみると、実に下手な歌である。もう少し勉強して作り直してみたい。

同級生を中心に「家庭菜園研究会」をやっている。毎年秋に栽培品目、一年間の作業の報告、自己評価の他、言いたいことを言い合う。さらにいくつかの問題点を検討する。上田市の峯氏の家で薪ストーブにあたりながら酒も飲む。その薪は50年前の若木が成長したものだと思う。溜まった太陽エネルギーを一気に放出して燃える。私たちの蓄積も表出していた、と思う。新型コロナを挟んで 10 年間続いている。

メンバーは昭和47頃卒業の同級生である、峯氏ご夫妻、鈴氏(旧姓奥、昨年ご逝去)、富氏、桂氏(先輩)、堀である。峯氏はご夫婦で肉牛経営を確立した。奥さんは地域振興活動の牽引車である。同氏は牛ふん堆肥を使って土作りをしているが、その水田だけにカブトエビが毎年発生する。これをみんなで見に行った後のコンパの時に本研究会が発足した。鈴氏は畜産の産直組織を発展させ、地域環境保全に力を尽くした。富氏は、某県の農試の研究職だった。桂氏は水循環の専門家であり、村議である。リニア新幹線の建設に伴う問題点などを研究している。私堀は前述のとおりであるが、防虫ネットと天敵利用の害虫防除に取り組んでいる。

氏名 松澤 武陽 S54(56) 年 大学院林学専攻科卒業 東京都在住

①主な履歴

入学はS 50 年です。はじめは学生委員、農学部学生会執行委員、後期学生会副委員長、全学連大会に東京(2回)・大阪に参加しました。

②記述欄

高校時代から自分に自信があったわけではありませんでした。何しろ信州の田舎から都会に出たかった。郷里は息苦しかったですね。高校時代にいろいろ悩んだり、考えたことがあまり共有できる人は少なかったので農工大へ入学したら目が開かれた、霧が晴れたような気がしました。今、高校教諭を退職して10年、でも当時から教育問題には興味があり「日の丸・君が代」についても生協の理事の林学の先輩に質問しました。いろいろ教えていただきました。教育の専門家ではないのにすごいと思ったことを覚えています。大学では教科書問題について本多公栄先生の講演もありました。農学部なのにびっくり。教育についてタイムリーな企画で勉強になりました。一方大学生活はがむしゃらでした。いろいろやってみようと思い、一般教養部では慈恵医科大学に行き嬰兒の頭蓋骨の観察や人体解剖のことも学びました。また、人間的に成長することができたのは自治会活動でしょうか。学生運動をすることでだんだん自信がついてきました。科学的にものを見るということがどういうことなのか、おぼろげながらわかってきたように思います。反省は専門の勉強に生かすことができなかった、本当に悔やまれます。砂防研究室の塚本先生には相談して理科の教員免許取得のため、私1人のために化学特別実験を一般教養の先生に開講していただきました。同じく太田猛彦先生は教科書で林業がどれだけ取り扱われているか調べておいででした。専門だけでなく幅広く教育について検討されていることには感銘しました。

教員をめざす仲間でルソーの「エミール」の学習会も行いました。いろいろ話ができて楽しかった。しかし数回で終わってしまい継続するための工夫ができなかったのか、反省しきりです。

1984年に臨時的任用で神奈川県西部の高校の農業の教員として赴任しました。

林業担当で神奈川県では1名だけでした。学校内は昔ながらの先生が多く若い先生方の意見が反映されにくい雰囲気がありました。若い人への負担が多くなるような分掌の配置、生徒の立場を尊重した生徒の指導の体制の構築など課題が多く仕事がすすみにくい、これではいかん、どうすればと考え組合をつよくして自由に話し合いができる雰囲気づくりが必要と思い、職員会議規定の再検討や40人学級実現の署名運動に取り組みました。神奈川県では卒業式・入学式での「日の丸君が代」の強制はすまじく保守系県議を総動員して学校に派遣、斉唱時に着席している教員はいないかチェックにきました。着席は処分になります。県教委を相手に処分しないよう訴える裁判の原告にもなりました。演習林の寮の改築も持ち上がりました。県教委は多くの学校や地域へ開放することを要求、私が担当の演習林運営委員会では管理職も含めて教員の労働条件の悪化をふまえて反対、寮がある

地域の方も環境が悪化すると反対を掲げました。寮は改築できましたが県教委の思い通りにはならず県内農業高校のみと今までと同じ条件で決着、反対した地域の方々から学校の対応に感謝しているとお話をいただいたこともあります。

2校目の職場は県立相原高校です。農業土木と一部造園の担当でした。リニアで神奈川新駅になることになり学校が移転することになりました。

学校移転に反対する市民団体の方との交流や情報交換も行い、地域の人たちがいかに学校に期待しているか、肌で感じることができました。一方JR東海は、学校が移転もしていないのに工事用の切り回し道路をつくりたいので学校の敷地内にある演習林の伐採・利用を求めてきたのです。生徒達が演習林での実習で作成した図面をみてもらい、この測量実習が生徒達の将来を決めますと訴えました。担当者も土木専門で「よくわかります」と話されていました。その影響かはわかりませんが切り回し道路の話はなくなりました。生徒達には「みんなの専門の勉強は大企業さえも納得させることができるかも」と話しました。

当時、移転の話が出たときは組合の分会長で校長交渉をして県教委に現場への説明を求めることを要求、実現させました。

東日本大震災以降、私が神奈川県高等学校教職員組合県北支部長当時、浜岡原発に反対する運動や藤枝農民連の無農薬茶の栽培の研修旅行も実施しました。本当は地域の森林や林業を教材化して子どもたちに農林業のあり方を考える機会をつくりたかったのが本音です。まったくできませんでした。専門高校では進路の確保が命で資格取得や就職指導、特に公務員指導で採用されてから、40年間走り続けた気がしています。土日は部活か補習です。陸上部の顧問で毎日グランド出ることもありました。

教員は80%が生徒指導・進路指導と言われていましたが、いまでも、もう少しなんとかならなかったか悔いは残ります。一方で、改めて思うのは私1人の問題ではないということですね。次の世代なんとか運動をつなげた

い、教育条件の整備や教育のあり方をもっと考えてほしい、そうしないと本当の意味で子どもたちのための教育はできないと実感しています。

③近況など

今は、市民運動に関わっています。義務制の先生と運動では「相模原の子どもと教育を考える会」の高校の世話人として参加しています。相模原でも教員未配置を含め教員不足は深刻です。今、集会と署名運動の準備にかかっています。高校の仲間とは教育DXについての学習会を昨年の11月に開催しました。小中高、私学や市民・保護者の方々に発言していただき、いかに今の学校が大企業のための人材養成になっているか、子どもたちにとっていかに生活しにくい空間になっているか浮き彫りにすることができました。居住している町田市では学校統廃合の嵐が吹き荒れています。かつては福祉の町といわれた町田市政はいま、西の大阪、東の町田とも言われる事態になってしまいました。市政の転換に向けた市民団体「自治町田」にも要請されて、例会で「町田の避難施設は大丈夫か」との問題提起をさせていただきました。地元で自主防災隊の隊長をやっている関係です。2024年3月で学校から離れましたが市民運動で忙しい毎日を送っています。現役の時、大会にも参加できていなかった全国農業教育研究会にかかわり全国大会への参加や会報への原稿執筆などで頭を使います。世の矛盾があればなんとかしたいと身体が動いてしまいます。腹の立つことも多いですが活動することは精神衛生上とても良いと実感しています。

氏名 宮井 迅吉 S46年 工業化学科卒業 東京都と長野県在住

①主な履歴

遅れて卒業後、民間企業で主に環境計測等の研究開発に従事。特許出願が多く、その関係で社の知的財産管理の責任者になり、知財裁判を多く経験しました。組合活動と業界工業会の活動、科学者会議の活動がサイドワークでした。定年後は、府中市で「自然エネルギー普及」「市民による市財政の解析」などの市民活動に打ち込みました。娘の病気の再発を機に長野県での山小屋生活が中心になり、浅間山周辺の歴史の掘り起こし、行政への提案活動などを行っています。

②記述欄

<言いたいこと、思いつくまま>

1. 企業の研究開発者として油が乗り切っていたとき、「Japan as NO1」の時代でした。国際会議や国際展示場でも誇らしく振舞っていました。技術発展の爬行性は避けられませんが、電子・情報科学分野の急速な進展と日本の立ち遅れで、全体として日本が「周回遅れ」で取り残されて社会が衰退しているように見えるのが、なんとも残念です。
2. 所属した企業は「下町ロケット」にも似たニッチな特徴的な会社でしたが、様々な理由で上場企業との合併、コングロマリットとの提携など世界の急速なグローバル化を企業のなかから見てきました。知的財産分野では「発明する働く者の権利」を擁護した法律改正の時期に呼応して、発明者に手厚い「発明考案規程」を提案、施行して誇りを持っていました。ところが退職して10数年後、特許法は「軍事関連技術の秘密特許化」を規定し、国家主義的色彩を強めています。これも憤慨に堪えません。
3. 「環境の科学」「公害ゼミ」で学び、高度成長で汚れた大気や水の環境基準を達成したときは、「人間は自然を回復できる」と確信していました。当時、「寒冷化する地球」が論じられ「地球温暖化」の言葉がありませんでした。今、CO2削減のパリ協定目標の達成が危うくなっています。若いころ学んだ知識の時代の制約とこの十数年の知見の発展に驚くばかりです。いまなお人為温暖化を否定するトランプの再現に、世界がどう対処するのか、地球の未来がかかった深刻な課題で、憂慮に堪えません。
4. 仕事を離れる頃、「あと15年くらいの老後か」と漠然と考えていました。入院病气知らずのまま今年80歳を迎え、まわりを見ても「人生100年」が現実味を帯びています。さりとて蓄えも限られ、どうやって生き延びるのか、人はどのように生きてゆくのか、あらためて思案させられます。私の世代や少し上の世代では「戦争はあったがまず幸せな時代を生きた」という実感をよく聴きます。一方、子や孫の世代は、本来、技術進歩でもっと幸せになる条件があるはずですが、人為気候変動やそれ以外のまだ認識できていない負の遺産で大変な時代になるのでは…という懸念を感じています。それは「老いた故」の杞憂で現世代はもっと遅く未来に展望を描いているはず…と思いたいものです。そもそも若者や次世代との実のある本音の対話が難しくなっていることを実感しています。

5. 自分の生存のためも含め、人々の社会への働きかけが、無数の錯綜や交わりを通じてやがては「社会の進歩」に結びつくという思いのもと、いろいろ取り組んではいますが、さらに自分は何をすればよいか・・・を書物やネット、SNS 等のなかの溢れる情報のなかで悪戦苦闘している毎日です。好奇心だけが年を追うごとにアップデートされている毎日です。

6. 81億人の世界で出会った人々の数は大海の一滴で、真珠の輝きです。心を埋めている出会った人々の思い出はいつまでも消えず、自らの位置を知る灯台のように、心強さを実感させてくれます。「風の記録」の仲間をはじめ、出会ったすべての方々に感謝したいと思います。農工大で自治会、寮自治、生協、自主ゼミなど社会貢献的な学生時代を経験した仲間の魁となった人物のことは、まとめておきたいと思っています。

③近況など

長野県で山暮らし、月に1週間ほど府中に戻ります。

氏名 峯村 富治 S48年 農学科卒業

長野県在住

①主な履歴

S48～S57年 農業共済新聞

S57～R21年 肉牛一環経営 R22年長男に経営移譲

R22～現在 田畑約1町歩 稲、大豆、落花生、野菜など栽培

②記述欄

田畑約1町歩の栽培には、ほんのわずかな農薬を使うだけで、可能な限り避けてきた。しかし、ネオニコチノイドはほぼ野放しで、どんどん虫、鳥などが減っている。生態系の攪乱は、人類の滅亡へと突き進みかねない。無力かもしれないが、自分の田畑の生態系は小さな宇宙として守り続けたい。

また、廃プラ、マイクロプラスチックも深刻だ。田畑にもプラスチックを使わないようにしているが、限界がある。代替物の開発は進まないし、除去技術も無い。いったい地球はどうなってしまうのだろう。

農業をすることによって、地球を守りたいと思うが、自分の出来ることが何なのか、いまもってよわ分らない。

③近況など

54才で脳腫瘍を発症し、余命10年と言われてから、4度再発しながらも生き延びてきた。

あと10年、85才までは現役の農家として田畑を守っていきたい。

氏名 武藤 軍一郎 S35年 農学科卒業

福岡県在住

①主な履歴

S35年東京農工大学専攻科終了、S35年九州大学大学院種子課程入学、終了後同大学院博士課程単位修得退学、S40年九州大学付属農場助手、H10年教授として退職。九州大学名誉教授 農学博士

②記述欄

少年時代、戦争の中で成長した日々、平和、食糧問題に関心が強く、大学内も農ゼミや原水爆禁止活動など活気に満ちていた。大学近郊の立川米軍基地拡張への反対には地域住民、農民、労働者、学生も参加した。多くの学友達と参加したデモで基地内に侵入したとして大学の駒場寮でS32年9月に逮捕された。

突然の逮捕で学友達も驚き、学内自治の討論や逮捕者の援助、釈放を考えた。

S34年「伊達判決」は米軍が駐留するのは憲法違反、という無罪判決であった。日米安保条約改定の前夜に当たる日本政府は、東京高裁を飛び越し、最高裁に飛躍上告した。最高裁はS34年12月に判決を破棄しに東京地裁に差し戻した。

S35年九州大学大学院に入学し、勉学の傍ら差し戻しの裁判闘争を行う多忙な日々が始まった。東京高裁も最高裁も東京地裁の判決を支持し、罰金2000円の有罪と確定した。裁判闘争はこれで終わりとして研究生生活に没頭した。

S40 年、九州大学農学部付属農場に就職し、主として農場実習と農村調査等に明け暮れる毎日であった。「農学教育を語る会」「農場協議会」等、農場の仲間と語り合ったり、学部の先生や仲間達と、古文書や農業史を学んだり、『農業全書』の現代語訳等をしたり、学び合ったりしていた。砂川闘争は世間からも私からも遠のいていた。

ある日突然、新原昭治さんが「アメリカ公文書館で砂川裁判の当時の日米政府のやりとりを記した文書」を発見し、毎日新聞が報道した。内容は最高裁長官がアメリカ駐日大使に、裁判の内容を明かし、有罪に導くことを告げる、という驚くべき内容であった。これを機会に裁判を追求する砂川事件再審裁判闘争が始まり、中心として東京農工大学と九州大学が大きな母体となった。東京農工大学同窓の励ましや協力により出版された本(『砂川闘争の記 ある農学徒の青春』武藤軍一郎著 花伝社)の中に詳しく書かれている。

③近況など

退職後、休耕田 200 坪弱の家庭菜園を、無農薬有機肥料で鋤一本で麦まで作り、季節ごとの野菜作りを数年前まで楽しんでた。地行きの古文書会の仲間になったり、砂川再審請求裁判の活動に参加し、時々上京していた。視力の衰えを感じ始め『東アジアにおける犁耕発達史』(中国出版 2009 年)を 25 年前から構想、資料集めは 15 年前から、資料整理は 2005 年、2006 年から書き始め、2009 年に完成した。

韓国語、中国語などラジオ会話講座から始め、韓国や中国にも訪問した。

視力が弱かったのか、緑内障が進んだ。三郡縦走という、山の尾根 22 キロを 1 年に 36 回も歩いた。その後は家の近くの若杉山に変更して一人山歩き、近頃は田圃散歩や、近くのカブトの森公園まで夫婦散歩し、夫婦連れの仲間の輪ができ、たわいない話を楽しんでいる。ラジオで情報を知り、CD 図書で小説を聴いたり、子や孫達との交流は楽しみ。情報は音読で、家の中では補いを得ながらゆっくり行動。90 歳になりました。

聞き手 妻・武藤富美 文責

氏名 村上 光江 1970年 農学科卒業 千葉県在住

①主な履歴

70 年農村労働組合全国連合会に書記として入る。

85 年組合合併に伴い農村労連を退職

当時職業病になり労災保険を受給していた組合員の社会復帰の場として農林事業団という事業団体を作る試みがあり、そのための全国組織をめざしての組合離職でした。しかし、いろいろな問題を抱え、それは難題でまもなく自然消滅となり、鋸南農林事業団という法人として農産物の生産・販売を徹々たるかたちでやっています。

生産する土地は一緒に組織を立ち上げた方の土地と近所の方の土地を借り、米、野菜、果樹、鶏卵を販売しています。農薬不使用、肥料は平飼いの鶏糞のみで多くは使わないで作っています。今年で 40 年になるようです。

②記述欄

③近況など

毎日毎日、朝夕は鶏の世話と犬・猫の世話。そして、野菜の管理と発送があれば収穫、荷造り、事務仕事。近年は春から冬までひまがあれば草刈りに追われる毎日です。春になると、米作りの準備(私は手伝う程度)、夏野菜の苗作りといそがしくなります。

氏名 横林 和徳 S43年 農学科卒業 長崎県在住

①主な履歴

1968 年熊本の鹿本農高と菊池農高に各半年勤務、1969 年～ 90 年諫早農高の分校 91 年～ 95 年長崎県高等学校教職員組合執行委員長 96 年～ 02 年本校 7 年、03 年～ 05 年執行委員長 06 年～観光農園自営

②記述欄：1964 年北海道は大冷害に見舞われましたが、それを契機に故成田英己君が提唱した救援活動にはまりました。リヤカーを引っ張り農学部周辺の民家から古着を集めました。また、府中や調布の駅頭で救援カンパを集めました。その時、英語の授業で出席の返事をしたのち、こっそり抜け出し、寮の食堂のリヤカーを自転車で

一人で引っ張り調布駅前でカンパを訴えた思い出があります。この救援物資をどこに送ろうかの議論で、ある地域に集中して送ろうとなり、それが帯広と襟裳岬を結ぶ広尾町でした。その活動は冷害対策実行委員会と銘打ちましたが、この活動を通じて日常的に農業問題を追求しよう、となって、「農業問題研究会」に発展させました。私はこの年の12月、宇都宮大で開かれた日本農学学生ゼミナールの全国大会に参加しましたが、農業基本法に沿った構造改善事業の在り方とかが論議の中心でした。大会の後半では同級の二神勝利君が参加しました。下手なガリ版刷りの報告集を寮で配った記憶があります。

2年になって農業問題研究会で調査の目的地にしたのが、広尾町でした。公民館を拠点に夜調査票を持って農家を訪問しました。その時の開拓農民が言われた「人間らしい暮らしをしたいから離農する」この言葉に衝撃を受け、こんな農業にしてはならないと、人生を貫く筋金になったと思います。

3年では岩崎徹先輩と一緒に訪問したことがある平井正文先生(農学科28年卒)の紹介で、長野県の佐久に調査に行きました。この時、オリエンテーションをしてもらったのが後で農民連の会長となられた小林節夫さんでした。今、「節夫文庫だより」で繋がっています。佐久では農家に宿泊しリンゴの玉回しなど、同級の小林征司君や川上忠義君と体験しました。

4年では農村社会学の千野陽一先生の紹介で長野県の栄村に入りました。日本一の豪雪地帯で、夜訪問する家の柱の大きさにはびっくりしました。夜公民館を訪ねられた地元の学校の臨探教師が歌われた歌詞が忘れられませんでした。こんな歌詞でした。「おらうちの主はおらうちの主は嫁をとることのよき忘れたか、忘れはせねど忘れはせねど、稲の出穂みてさ嫁をとる、嫁とってくれりや嫁とってくれりや、一駄刈る草のよき2駄刈一る」これは確か秋山小唄と称されたようです。この農村調査は確か出稼ぎ問題に焦点を据え、分野ごとに執筆を分担し、論議を経て調査書をまとめ、農ゼミの全国大会に持参しました。当時の大谷省三先生は授業で出稼ぎは「人間疎外」と論じられました。この調査以外にも府中の出稼ぎ農民の飯場に出かけ懇談したことも、記憶に残るのは酒を持って行くかどうかで論議したことです。結局持っては行きましたが、ここでは農民の本音を引き出せることはなかったようです。

この間、この農業問題や農学の学び方を全学的に広めようとしたのが農ゼミ組織の再建活動でした。毎年1回行われる全国大会には私は4回とも参加しましたが、2年時は岡山大、忘れられないには、4年時の岩手大会で深夜夜行で帰る私たちを岩手大の仲間が、国際学連の歌を歌いながら見送ってくれたことです。熱い友情に胸を打たれました。この農ゼミのスローガンは「日本農業破壊の本質を究明するなかで農学生の社会的任務を果たそう」でした。3年時でしたか、関東ブロック大会を農工大で開くことになり、西川裕人君が実行委員長となり、そのせいで農業問題研究会の会長は私となりました。このブロック大会にあたり、本館入口の通路壁に賛同と激励の長い壁新聞が学生細胞の名で掲示されました。共通の想いを感じたことを覚えています。農ゼミで思い出しますのは、3年の時ですが、学園祭で「三党農業政策演説会」を企画し、自民党は当時の同窓会長で衆議院議員の竹山祐太郎さんをお願いに行ったら本人が、共産党は本部に行きましたが朝野勉さんが、社会党は確か足鹿寛さんと記憶します。この時、竹山会長を近藤頼巳学長はじめ大学人が丁重に送り迎えされた態度が印象的でした。学生の自主行事を教授たちはやはり見守っておられたのですね。また、農学科の先生たちに参加してもらい、カリキュラム問題を論議したこともありました。この農ゼミの規約が「東京農工大学百年史」(財界評論新社)に記載されているのは意外でした。昭和41年6月8日より施工する、とありますからかわったはずですが記憶がありません。農ゼミの第一回全国大会が1954年農工大で開かれましたが、この原稿を書いている最中当時の記録集が書庫の隅から見つかりました。23大学2高校から総勢250人が参加され、7分科会がもたれています。

農ゼミの話は創設者の濱田竜之介先生(農芸化学32年卒)に当時の模様を聞いた覚えがありますし、北海道からの帰りに駒場寮によられた武藤軍一郎先生(農学科34年卒当時九州大)にも池田千代寮母さんの計らいで西川君と二人で聞きました。今、手元に1972年農工大農ゼミ発行の「耕起2号」があります。大谷省三先生や伊藤嘉昭農技研主任研究員(24年農学科卒)の論考も掲載されています。農ゼミの意義と内容については2017年10月、半世紀ぶりの農業問題研究会で頂いた学生便覧74年号によくまとめられていました。再建に係ったものとして、より深化して引き継がれていることを嬉しく思った次第です。

私は卒後、農村の現場に接したい一念で研究室は園芸でしたが、農業問題研究会や農ゼミを通じて農業を変革したい、そのためには主権者意識を持った農民を育てたい、そのために農業高校に勤務したいと教職を希望しました。その裏には平井正文先生から聞いた、京都の教育労働者が地域住民を組織しているその役割の大きさに感化されたことがありました。そんな気持ちは長崎で教員となった時から、噴き出しました。

20代後半で昼間定時(週4日制)の卒業生の勤務する縫製工場の労働組合の組織化に奔走したり、30代で自然と人の健康を大切にする省農薬のミカン栽培で生協出荷、40代前半では「食料と農漁業を考える長崎県各界連絡会」を組織し、1987年の発足会には講師に平井正文先生(当時大阪経済法科大教授)を招きました。この時、強調された「農民は安全で新鮮な農畜産物を生産して供給する社会的義務と権利がある。消費者はその供

給を受ける権利がある」この言葉は今、国際的な農民運動で「農民の権利宣言」が注目される中、先駆的指摘であったと思います。存命中は「後継者はできたかな」の電話が時々ありましたが、その度努力不足を恥じたものです。卒後平井先生とは度々会いましたが、農民との懇談では「下足から揃える」そんな気遣いも、と言われたことが心に刻まれました。

40 代後半では、全日本教職員組合傘下の長崎県高等学校教職員組合の専従の委員長に担がれてしまいました。弁舌もさわやかと言えず、瞬発的発言力をさほどないのにです。それでも 5 年間終えた後、7 年間の教壇生活を経てまたしても 3 年間勤めました。心がけたのは現場の組合員を激励に回ると同時に要求を聞くことでした。曲がりなりにもこんな任務が果たせたのは、あの農業問題研究会で組織をリードするその心配りを学んだことや農民的な土着性であったのではと思います。自分で言うのもおかしいですが、苦楽を共にした西川裕人君が私に牛のように、とか言っていました。彼はほんとに分け隔てなく付き合い、同じ教職について素晴らしい活動をしました。その業績は淵野雄二郎君が編集した「農・食・環境・平和の教育 実践活動のあゆみ」(遺稿集)に詳しい。葬儀では 700 人位の教え子たちが参列したことでもいかに彼が生徒たちに愛されていたが分かりました。

今、思えば、これまで培った心情は子ども時代の農家の父母の厳しい労働を目の当たりにしつつも、農業に生きる誇りを培い農工大に入学し、そしてマルクス経済の基礎を大谷省三先生や先輩の導きから学び、社会変革に挑戦する自分なりの根性を身に着けたようです。

今、国は諫早湾干拓事業で非開門に固執しています。私は裁判とは別に「話し合いの場を求める会」を組織し、4100 人の署名を集約し、関係団体に要請してきました。署名集めでは開門反対の農村地域を仲間と数年かかりで 500 軒ほど戸別訪問しました。この反対地域を直に訪問し対話する姿勢は学生時代の農村調査から学んだからではないか、そんな思いがします。反対住民の怒気を知る人は怖くなかったか、と聞かれます。訪問の結果、対話不足による誤解や情報不足が開門反対に繋がっていることが如実となりました。このアンケート結果をもとに衆議院農林水産委員会で佐賀選出の大串議員が取り上げたこともありました。機会がありましたら日本有機農業研究会発行の「土と健康」20 24 年 5・6 月号を見て頂けたらと思います。園芸教室では果樹の岩垣先生からブルーベリーを学び、定年前上京した折、農場の石川駿二先生(農学科 40 年卒)から具体的栽培の指導を受け、そのお陰でブルーベリーの観光農園を始めて今年で 20 年目となります。これまで、栽培の方法を教えて、と多くの人が来援されましたが、その時考えますのは学生時の授業料月 1000 円で学んだ意義です。あの学費でブルーベリーを学んだ、これまで身に着けた知見は市民に返していくのが当然ではないか、そんな気持ちがよぎります。教育の無償化が人々の分断を避け、共生社会を生み出す源泉となる、この思いを強くしています。

最後に述べたいのは農工大で学んだのは学問的な知見だけでなく人間的な温かみでした。駒場寮引っ越しの時、当時の厚生係長の渡邊さんが学生と一緒に重い荷物を抱えられたこと、就職では農場の渡辺直吉先生にも気遣ってもらったこと、卒後何十年もたって研究室の懇親会の帰り道松本正雄先生が「横林の調査書にいらんこと書いてなあ」と言われ、何年も気に留めておられたのだとその優しい言葉に心打たれました。

③近況など：

ブルーベリー 1000 本の栽培、地域では干拓問題の傍ら補聴器補助の公的助成を求める署名や週 2 回 4 時起きの新聞配達に従事しています。

氏名 吉野 りよみ S52年 農学科卒業 千葉県在住

①主な履歴

1977年～2010年 船橋市立小学校教諭

2010年～2015年 東京過労死を考える家族の会事務局

2010年～千葉県市民オンブズマン連絡会議事務局、船橋退職教職員の会事務局

②記述欄

大学4年生の時、農業改良普及員資格認定試験会場の入り口で、「生活改良普及員の試験会場はここではなくて向こうです。」と言われた。何のこと？と思ったが、現在も世界で選択的夫婦別姓が法的に認められない唯一の国が日本である。

「女子は教員免許を取りなさい」とおっしゃったのは小倉忠治先生だった。私はインドに行って稲作の農業指導をしたいと思って農学部を選んだので、学校の先生には向いてないし、教員免許を取る気はなかった。でも、稲作の

勉強をするには作物学研究室に入れてもらわないといけなかったので少々教職科目を取ることにした。

地方公務員農業職試験に全敗した後、渡部直吉先生が千葉県の教員への道をつけてくださった。おかげで、中学校理科で合格し、採用面接のとき「しばらく小学校でいかがですか？」と言われ、そのまま最後まで小学校で教えることになった。初めの3年間は地獄だった。そこで辞めなかったのは、先に千葉県の小学校教員になっていた木塚愛子さんが、よくアパートに泊めてくれて励ましてくれたのが大きかった。子どもたちに日記を書かせ、それを学級だよりに掲載する楽しさを教えてくれたのも愛ちゃんだ。つづく30年間は本当に楽しくて、小学校でよかったと思う。学級では毎朝読み聞かせをして、それが楽しみで学校に来ると言ってくれた子もいる。掛け算九九の自主教材をつくり、自分たちで育てた大豆から豆腐を作り、運動会のダンスの振り付けを創作し、学芸会の劇の脚本を書き、絵も描けば、歌も歌う。男の子三人を育てながら、朝4時に起きて持ち帰り仕事をする毎日だった。

今、現職の若い人達の話を知ると、自分がこういう授業をやりたいと思っても自由にできないと言う。学習指導要領通りの授業展開、題材、発問が求められるようだ。1人1台のタブレットを使え使えと教育委員会は圧力をかけるが、フィールドワークや、実物に触る授業、紙と鉛筆の授業がいいと言う。

また、産休に入っても代わりの先生が来ない問題「教員未配置問題」も深刻である。代わりに音楽専科の先生がそのクラスの担任になると、学校中で専門的な音楽の授業が受けられなくなる。改善を求め、千葉県教育委員会に請願を出し続けているが、すべて「不受理」となり、議題にさえされない。退職し、お金はないが時間だけは自由になったので、現職とともに声を上げ続けたいと思う。

氏名 渡辺 政一 S50年 林学科卒業 千葉県在住

①主な履歴

在学中：樺寮、寮委員など 卒業後：千葉県高校教員

②記述欄

2024 年の秋、四国を訪れる機会がありました。岡山県から香川県に船でわたる際、直行するのではなく瀬戸内海に浮かぶ直島に途中上陸しました。砂浜の安定帯では、群生したハマゴウが青紫色の綺麗な花をつけていました。その群落の一角に、細くて白っぽいものがからんでいるように見えたので、ネナシカズラを疑って近づきました。よくみると白色の小さな花卉は反り返っており、帰化植物のアメリカネナシカズラのように見えます。

アメリカネナシカズラが日本で初めて見られるようになったのは、1970 年前後の府中市多摩川の河川敷でした。その時期はちょうど私が府中に通い始めたころと重なります。

卒業後は千葉県で職を得ました、退職後は細く長く、地域の団体で活動させてもらっています。地域から期待されているということは、自己の存在に多少の意味があるのだと、勝手に思い込んで自己満足しています。

現在は様々な情報が高速で乱れ飛ぶ時代です。50 年という半世紀は長い期間と思われそうですが、私には、社会が大きく変化したとは、感じにくく思えてしまいます。しかし、50 年ほど前に広く見られていた在来種のネナシカズラは、アメリカネナシカズラにかなり駆逐され、大きく置き換わっています。このような生物社会の変化と同じように、人間社会も底流では様々に変化していて、私がそのことに深くは気づいていないだけなのかもしれません。

新しい時代はきっと近づいていることでしょう。そのことに期待を膨らませながら明日を迎えたいと思います。

③近況など

- ・悠々自適
- ・地域の九条の会、運営委員など
- ・散歩とその途上での自然観察は楽しみの一つです。

4. 亡くなられた方々の思い出

○熱田 正行 (S44年農学科卒)

渕野 雄二郎 記 (S43農学科卒)

<熱田君を偲んで>

思い起こしますと、君と私は一九六四年の入学でした。この年は東京オリンピックの年で、首都圏に地方から若者が集中する時代でした。二人とも地方からのお上りさんですが、私は都会の喧騒の中で、自分自身を見失う日々でしたが、君は、将来の夢、自分の生きる道筋を入学当初から抱いていたようですね。後に、語っていますが、「常に社会に役立ち、かつ誰もやらないニッチな分野ながら未来がある道を求めてきた。農業や農村に明るい希望をもてる夢物語」を多くの人々の支えと繋がりの中で一步一步築いてきたのだと思います。

君を支えてくれた、最大の方は奥様ですが、学生時代の君の活動の延長上に幸子さんがいらっしゃったのですね。君は、大学のカリキュラムの選択は自分の生き方を基準に取捨選択する、自由な時間を自分のために使うという主義で通しました。ラグビー部で体をきたえ、またピアノ部に入り、管弦楽部でトランペットを吹いていました。とくに、一般教育科目は、君の生き方に必要だと思う、高橋明善先生の社会学、千野陽一先生の教育学、日高敏隆先生の生物学以外は授業にはほとんど出ず、一年留年しました。千野先生は、長野を中心に、農村青年・農民教育に力を入れ、高橋先生も農村地域社会の実地調査や農民との交流の機会をつくり、我々が何のために農学を学ぶかの方向性を示してくれました。専門課程で所属した園芸学教室の松本正雄先生は、千野先生とともに、千葉県農村青年中堅養成所の講師を務めておられ、君が、千葉県の農村青年と交流する道筋をつくってくれたと思います。また、三年次で協同組合論を担当された平井正文先生(当時は協同組合研究所勤務で、農工大で非常勤講師)、東都生協を軸とした「食糧の生産と消費を結ぶ研究会」の宮崎宏先生、メタプラントに関わってご指導、ご助言をいただき、ドイツの先駆的なメタプラント視察へいざなってくれた村田武先生など多くの先生方が、君の一途な思いに理解を示し、支援していただいたと思います。

生前、生消研の機関紙「大地の絆」に掲載された、「メタプラントの全国展開と課題」のレポートを読み直しました。そこには、苦勞して立ち上げ、二人の息子さんと発展させてきた(株)エコ・フードの経営実績が示されておりました。ああ、頑張っただけでここまできたのだと、多くの困難を乗り越えてきた、熱田家の皆様の強い絆を感じていたところでした。

君の描いた「メタプラントの全国展開」によるエネルギーの自給を目指す取組みは、道半ばであるかもしれませんが、必ずやご子息を中心とする(株)エコ・フードを通して、君の意志を受け継ぎ、環境に優しい地域農業、持続可能な地域社会づくりに大きく貢献されることを期待しています。

正行君、我々にもたくさんの思い出を残してくれて本当にありがとうございました。どうか、安らかに眠り下さい。

<熱田さんと歌の思い出>

小川 和雄 記 (S46養蚕学科卒)

熱田さんは私、小川がS42年に農工大に入学したときには既に居た豪快なイメージの先輩でした。印象に残っているのは、私と話すときは、いつもにこにこして、時に大声で笑う「豪傑」でした。卒業後は年賀状くらいで、個人的なおつきあいはあまりありませんでした。

数十年がたって私が定年退職して以降、時々OBで集まったとき、私が銀座で歌っていると話すと、「次回はいつだ、聴きに行く」ということになり、以降、銀座マキシム・ド・パリやシャンソニエ「月夜の仔猫」に何回も来てくれました。

ある時は驚く事に北海道からヘリコプターを操縦、何回も給油しながらマキシム・ド・パリに来てくれたことがありました。こうしたおつきあいの中、熱田さんの地元での生協関係のイベントにも2回程招かれました。それだけでなく、私とロシア人歌手エカテリーナさん(日韓合同サッカーワールドカップの時、日ロ戦でロシア国家独唱をした歌手)のコンサートに来たとき、彼女を地元へ招きたい、ということになり、とうとう200人規模のコンサートも実現しました。

その頃から熱田さんは自分のCDを作りたいと言っていて、演歌の先生について練習していたようです。熱田さんのCD「命道」が完成したのが、既に病に冒されていた2020年12月、そして約100人を集めた発表会が翌年3月21日、おりからの強風、強雨にもかかわらず、盛大に行われました。この頃は既に様態が悪く、会場横の控え室でしばしば横になっていました。熱田さんの先生や私、それから関係者数人が歌い、そして、熱田さんも立派に歌って、参加者から盛大な喝采を浴びました。それからまもなく、4月8日に亡くなり、12日には葬儀が執り

行われました。

なお 2018 年 5 月には上田君の案内で福島原発、被災地を熱田さんの高級車で訪れたことも忘れがたい思い出です。熱田さんは仕事の面でも多くの先駆的な事業を興し、ご活躍していたようです。

○内山修一（S47年林学科卒）

富田 廣 記（S48年農学科卒）

<内山修一君（林学科 1968 年入学）の思い出>

2010年5月に内山修一君から手紙が来ました。内山君は卒業後長岡市にある緑化関係の会社に勤めていました。その手紙には「余命幾ばくもないような難治の病気に罹ってしまい残念でなりません」と書かれ、入院生活、自宅療養をしているとのことでした。手紙には新潟県柏崎にある私の母の実家に二人で泊まり鯨波で泳いだことが書かれていました。また、手紙には1993年9月に二人で北アルプスの常念岳、大天井岳に行った時のことを内山君が記した「山行記」が添えてありました。「山行記」には大天井岳でテントを張り寝ていたら強い雨が降り山小屋に逃げ込んだことなど懐かしいことが書かれていました。何か学生時代を懐かしんでいるようで、私は大変心配になりました。

2012年の暮れに奥様の玲子さんから内山君が膵臓がんで亡くなられたとの連絡がありました。内山君から手紙をもらったとき「そのうち逢いに行くよ」と返信しましたが約束を果たしませんでした。悔やんでいます。

内山修一君と私は1968年大学に入学です。年齢は確か修一君が1年上だったと思います。内山君は林学科で私は農学科でした。彼とは学生自治会の活動を通じて知り合いました。彼は新潟県越路町塚山出身です。越路町は今は長岡市に合併されていますが、信越本線には塚山駅があります。私の母方の祖父母の家が新潟県の柏崎にあり、私はそこで生まれました。柏崎と塚山がそんなに離れていないこともあり新潟の話をしながらよく一緒にいました。

修一君は堅物且つ頑固者で冗談が通じない男、出会った時の私の印象です。内山君は樺寮にいました。私は自宅から通学していましたが、しばしば樺寮に泊まりました。内山君は寮で横笛をよく吹いていました。古里に想いをはせ吹いていたようで、修一君は実はロマンチストでもあったのです。

内山君の手紙、「山行記」はずっと机にしまっておきました。今回懐かしく読みました。内山君の顔が浮かびます。

○大崎 公雄（S48年 化学工学科卒）

宮井 迅吉 記（S46年 工業化学科卒）

<大崎公雄さんの思い出>

大崎公雄さんは、昭和40年に工学部の化学工学科に入学しました。「風の記録第一集」にも書いていますが、「公害を防ぐ仕事に」という意思でこの学科を選んだのですが、高度成長する化学工場の個々の設備の設計をするような学問で、教授陣も企業直結の方が多いのが現実でした。

高校時代に判明した腰部の異常からくる腰痛が酷くなりました。学内でも目立つ部署での活動は無理で、公害防止の道も諦め、卒業をまえに彼が選んだのは中学、高校時代の仲間と「地域に発信する塾」で子供たちと向き合う自主・民主教育の道でした。その塾は親たちから「梁山泊」と呼ばれ大崎さんは塾長でした。長い期間、その運営も課題も大変だったことでしょう。しかし彼には青春時代から刻まれた信念と哲学があったようです。保育に熱心で子供の成長とともに始めた野球で腰痛が緩和されたのは幸運でした。

大崎さんは平塚賢吉さんが東京に出てきたときに行った工学部の仲間の集まりに参加し、2013 年の風の記録の第2回総会にも参加して、いつも「諄々と説く」タイプの達観した話をしていました。2016 年の突然の逝去には驚きましたが、「集会の後の片づけを丁寧に黙々と行っているところに惹かれ、」結婚された秋子様から、「自由に自分の決めた道を歩き切った幸せな生き方だった」との一文をいただき 8 月 6 日に農工大後援会のホールで「偲ぶ会」を行うことができました。

大崎さんの父親は赤江行夫という 1950 年代に活躍した大衆作家で農工大にも関わりも深い砂川闘争を描いた「長官」は貴重な作品です。もし彼が「公害防止の道」を歩んだならば、「第二の宇井純」になったのでは…とも思いを描きつつご冥福をお祈りします。

○上山 修 (S47年農学科卒)

桂川 雅信 記 (S47年農業生産工学科卒)

<夜中に飲んだくれた日々>

上山くんは私と同じ 1972 年卒業ですが、私は一年留年しているので彼は私より一つ下の学年でした。が、私は 1 年生の最後の頃に樺寮に入寮が許されたので、樺寮の住人となったのは彼とあまり変わらなかったはずです。

彼が 1 年生の時に寮長だった淵野さんが彼を寮委員に推薦し、淵野さんが卒業したあとに上山くんは寮長になったと記憶しています。淵野さんは同じ農学科の新入生なので、入学時から体格も雰囲気もしっかりした彼に目を付けていたのだと思います。

彼が寮長をしていた頃、私と同じ学年で工学部に飯田良雄(電気工学科)がおり、彼は寮生ではないのに、工学部自治会の仕事で遅くなつては誰かの部屋に潜り込んで居候をしていました。学部が違うのにこの 3 人が親しくなったのは樺寮のおかげなのでしょう。

実はこの 3 人はとても悪い仲間、バイトの収入がある日や、親からの仕送りの日に限って匂いを嗅ぎつけて寄り集まり、寮内の風呂に入らず近くの銭湯に行ったあと、そのまま飲み屋に直行するという離れ技(?)を送る生活でした。いま思うと、夕刻から翌日明け方まで何を話していたのか、ほとんど記憶がありませんが、長時間にわたって大声で議論沸騰していたのだけは覚えています。

寮生たちがよく出かける、いつもの焼き鳥屋の二階で飲ませていただいていたのですが、女将さんには毎回ご迷惑をおかけしていたことと思います。その「ご迷惑」は飲んで深夜や明け方に寮に帰ったあとに続いていて、寮委員会のみなさんの部屋には毎回「ストーム」と称して入り込み、話し込んでいた記憶もあります。それでも彼がまわりから嫌われていなかったのは、寮長という責任ある立場でありながら、意外にソフトタッチの性格で周囲の人望があったからでしょう。寮生大会や大学側との寮団交での彼の堂々たる采配ぶりは、その後も後輩たちの中で語られていたようです。

彼の卒業後のことは音信がぷつぷつと途絶えてしまっていました。私は新婚の頃川崎市内に住んでおり、その頃近くにある会社の社員寮に彼が居住していたと聞いていたのですが、そのまま連絡が取れずに、とうとう亡くなるまで過ごしてしまいました。あのときに面会していればと悔いが残っています。

彼が亡くなった後に奥様から手紙をいただいたことがあります。そこには彼が学生時代に寮長としてリーダーシップを取っていたことや、伝説的な寮長だったことなど、「何一つ聞いたことがなかったのでもとても驚いた」と書かれていました。彼は卒業後国内の大手肥料メーカーに就職し、あの馬力で活躍したであろうことは想像に難くないが、家族にまで学生時代のことを話さなかった胸の内はどんなものだったのだろうか。上州育ちの朴訥とした彼の語り口がいまも忘れられない。

○木塚 敏男 (S52年獣医学科卒)

信太 秀紀 記 (S51農学科卒)

○主な履歴

学生自治会

農事組合法人 匠瑳(そうさ)農産物供給センター勤務

※千葉県肉と卵の産直農民組織 有限会社ジェリービーンズ

※千葉県香取郡多古町元気豚の飼育・食肉加工・販売

2016 年 食道がんにて逝去)

木塚君とわたし(信太)は入学同期で、職場も30年弱ご一緒したので、かれこれ人生の半分以上を併走してきて感じます。

☆学生時代は木塚君は自治会関係で私は主として樺寮や農ゼミを中心にと、異なる舞台で活動してたのですが、同年でもあり一緒に行動することも多かった。当時から腹のすわったキレの良い思考で一目おかれた存在だったと思います。

☆二人とも千葉の匠瑳農産物供給センターに職を得ました。一緒に働きはじめた最初の年に 二人で北海道を車で周遊しました。社会人として開放感を満喫しながらの思い出深い 1 週間でした。

説明は不要かと思いますが、匠瑳センターというのは鶏卵と食肉の産直で熱田正行さん(農 S 44)鈴木一郎さん(農 S 47)達が始めたものです。最大時従業員規模130名・売上31億円の企業的な農事組合法人となりました。

た。

いまでこそ千葉県は産直のメッカといわれるほど産直の数もスタイルも多いのですが、1970年代当時はまだ野菜・コメ・餅など主として流通を農民が直接行うことで農家の手取りを増やすものでした。

私たちの産直は養豚と養鶏の産直でしたので、高度な加工設備と生産技術管理を要しました。

そのような取り組みの中で獣医としての木塚君はたいへん大きな役割を果たしました。

ひとつは獣医として、畜産農家の診療や技術指導にあたることで、生産面の質を高める・組合としての求心力を強める、という点で、おおきな力を発揮しました。

もう一面は、産直の《中身》＝安全安心な食肉・鶏卵とはなにか、ということ、生産者と消費者が対等の立場で話し合い・内容を形成していく、ということです。

この「対等に」という点が産直では(決定的に)大切な点だと私は考えるのですが、この面でも、獣医としての技術的な知見と権威が役立ったとおもいます。

☆こうした獣医としての役割の一方、経営手腕という面でも貴重な存在でした。

学生時代から腹の据わったキレのある思考が光りましたが、押しの強さや毅然とした物言いと相まって、経営手腕にそれらが生きたように思います。

☆こうした獣医としての役割の一方、経営手腕という面でも貴重な存在でした。

学生時代から腹の据わったキレのある思考が光りましたが、押しの強さや毅然とした物言いと相まって、経営手腕にそれらが生きたように思います。

☆50代の早い時期にふたりとも転職しあまり行き来はなくなったのですが、木塚君はひきつづき養豚と食肉関係の別の民間会社に転じ、総責任者として活躍されました。

☆かねてから「余生は札幌で」と云ってたようで、最後の数年は彼の地で地域活動などもしておられたと奥様＝愛子さんから聞きました。短い期間ではあったけど本望ないときだったのだと推察します。

早すぎた死という気持ちを否めませんが、ご本人としては多分《思うがままに生きた人生》なのだと思います。同僚にして戦友である木塚君のご冥福を祈ります。

○鈴木 一郎(旧性奥田) (S47年農学科卒)

富田 廣 記(S48年農学科卒)

<鈴木一郎君を悼む>

鈴木一郎君は2024年5月8日くも膜下出血で急逝しました(一郎君と呼ばせてもらいます)。一郎君は1968年農学科に入学し3学年から園芸学研究室に入りました。在学中は学生自治会で活躍しました。また、1968年入学農学科クラスのまとめ役でした。旧田無市の自宅から自転車通学でした。学内でも一眼レフカメラを首に提げ自転車で移動していたことや、農場実習などをカメラで撮影していたこと等を思い出します。

一郎君は卒業後、埼玉市民生協に就職しました。その後農工大の先輩に請われて、千葉県の匝瑳で農産物の産直センターに転職しました。数年で産直センターを退職し、旧八日市場市の自宅で農業、学習塾を始めました。

1995年にひとりの級友が亡くなり、級友が集まり「偲ぶ会」を開催したことを契機にしてクラス会が毎年開かれるようになり、今も続いています。クラス会のまとめ役は一郎君がずっとつとめてきました。一郎君急逝を悼んでクラスのメーリングリストに次のような声が寄せられています。「大学時代の思い出よりもクラス会ではるかに長い時間を楽しめたのは一重に鈴木一郎さんのおかげです。誰にでも出来ることではありません」、「クラスとしてまとまっていたのは、一にも二にも鈴木一郎さんのお陰です。常に気を配って、集まろうと声掛け。なかなかできることではありません」、「おかげで大学時代をもう一度満喫できました」、「四国巡礼 51 番石出寺の御住職揮毫の色紙に『喜ばれる喜び』とあります。この言葉はイチローさんを体現しています」「自分にとって大きな存在だった」、「あれこれ仕事もあるくせに、自分のことは後にする」。また、熊本在住の元農水省畜産試験場研究員の同級生からは「(地元の畜産農家の)友人の希望を叶えるために、熊本まで引率というお付き合いをする親切な一郎さん」という声も寄せられています。

一郎君は「大学を選ぶとき、大学卒業後には人に役立つ仕事出来る学部に入りたいと思っていたが…」と私に話したことがあります。農学部は一郎君が目指した方向とは少し違ったようです。BSE 問題で牛肉が売れなくなったときには一郎君はクラスの仲間呼びかけ峯村君を励ます集いを行いました。また、東日本大震災後には「福島復興支援りんご買い出し」に何年も取り組んだりしました。クラス会のまとめ役、困っている人に寄り添うなどの一郎君の活躍は「人に役に立つ仕事」をしたいという彼の姿勢が一貫していたのではと思います。

私が一郎君と最後に会ったのは、2023年12月6日の上田市の峯村君宅での「家庭菜園研究会」です

この時はみんなで「岳の湯温泉」にあるホテルの風呂(入浴だけ)に行きました。一郎君はこのホテルに奥様と前日から泊まっていた。奥様孝行のようでした。6日の夜には一郎君は奥様をホテルに残し、峯村邸に泊まりました。一郎君は千葉から車で上田市まで来たのです。元気だったのに。

「家庭菜園研究会」は一郎君の提案で2013年11月からクラスの仲間に呼びかけ毎年峯村邸で開いています。生産工学科の桂川先輩、養蚕学科の堀さん、家庭菜園を行っていない級友も会に参加していました。夜には峯村牛を食べ、酒を飲みながら楽しく語り合いをしました。

クラス会、家庭菜園研究会で一郎君とずっと語り合いたかった。

○高嶋 祐治 (S46年工業化学科卒)

宮井 迅吉 記 (S46年 工業化学科卒)

<高島さんの思い出>

高島さんは社会経験を経て、昭和40年に工学部の工業化学科に入学しました。おそらく私より4歳ほど年長だったと思います。その風貌から誰もが「高島さん」と呼びました。入学時から社会についての考えは明確でしたからどんな経験をしてきたのかなと思っていましたが、語りません。年長なのでいろいろな活動でも表に立つことはなく裏方に回ることが多かったですが、慕う人が多く影響力がありました。ある仲間は「高島さんの政治性は凄いな」と評していました。都内在住でしたが学寮に入り、学寮問題にも熱心でした。活動の関係で勉強では苦労したようでしたが、勉強熱心な同僚に助けられて、私と同じ時期に卒業し、半導体の接点材料を扱う高純度化学という会社に職を得ました。この会社は半導体産業の進展とともに成長していますが、当時は、できたばかりの会社でした。山登りに打ち込むようになり「労山で活動している」という話を卒業してから聴きました。毎週のように山にゆき、戻ってきてサウナを浴びるのが楽しみだったようです。その高島さんがサウナで急逝されたとき、「いろいろ聴いておきたかった」と悔やんだことを思い出します。高島さんはある意味で不思議な方でした。早逝を惜しみ冥福を祈ります。

○田淵 博 (S48年農業生産工学科卒業)

上田 勉 記 (S46年生産工学科卒)

○主な履歴

1975年 香川大学大学院農学研究科修士課程修了 1975年 東亜建設工業株式会社入社
「柳瀬川の上流をきれいにする会」の活動や「社会人サッカー MM サントス FC」の立ち上げに尽力する。
学校開放委員や学校評議員として、子ども達の為に小中学校の活動に尽力する。

地域で、テニスやサッカーのコーチ等をする 2017年3月19日 逝去(享年67歳)

【感謝とお別れのことば】田淵 幸子(妻) -----

「好きなことをおもいつき楽しんだ良い人生でしたね」

ただじっとしているのは、性に合わなかったのでしょうか。スポーツが好き、誰かと賑やかに過ごすのはもっと好き。やりたいと思えばすぐに実行する、それが夫の生き方でした。

昔から得意だったテニスやサッカーに汗を流しながら、時には、静かに絵筆を握ってみたり、台所に立って料理をしてみたり、趣味を通じて知り合った方々を呼んで我が家の庭でバーベキューをすることもしばしば。家族が集まると、いっそう上機嫌になり、自分にとってはお袋の味である、いなり寿司やのり巻きを作って振舞うなど、いつでも楽しそうに身体を動かしていた姿をよく覚えています。

しかし、父親としての厳しい一面を見せることも……。叱る時にはとても怖い人でした。けれどもそれは、我が子の将来を案じていたがゆえ。皆成人すると驚くほど丸くなったのは、子ども達が立派に成長したことにほっと安心したからなのだと思います。

退職後は、専門の環境土木の知識を生かし「柳瀬川の上流をきれいにする会」で、環境改善に取り組み、2年前には、念願のほたるが蘇がえりました。学校開放委員会や学校評議員として小中学生の合唱をなにより楽しみにして、地域の子供もたちの成長を見守りました。息子拓が少年サッカー山口サントスに入団すると、お父さんコーチとしてチーム運営に関わり、社会人サッカー MM サントス FC の立ち上げの中心になりました。

「沢山の思い出をありがとう」「貴方に出会えてよかった」 空の上でも人々に囲まれ笑っていてほしい。

平成 29 年 3 月 19 日、夫 田渕 博は、満 67 歳にて、ご縁と笑顔に彩られた生涯をとじました。夫と出会い笑い合い、共に楽しい時を過ごしてくださった皆様へ感謝申し上げます。

本当に有難うございました。 田渕 幸子
近況など

田渕幸子さん(博さんの奥様)から、息子さんが作成されたアルバム「故人への歩み 田渕 博」(昭和 24 年 8 月 24 日生まれ 享年 67 歳)を見せていただきました。
田渕君の人生の生き方や、地域での素晴らしい活動や、家族や人との交流について、思いもよらなかった一面を知ることができました。私の人生の生き方も、変えなければと思いました。

<30年後の邂逅と別れ>

桂川 雅信 記 (S47年農業生産工学科卒)

田渕くんは私より 1 年遅れて卒業し、その後は香川大学修士課程を卒業して大手の海洋土木会社に就職していました。私が彼と再会したのは卒業後 30 年を経た 2002 年頃だったと思う。私はすでに役所から民間に転職し、河川・湖沼の水質保全対策に取り組んでいた頃、(財)ダム水源地環境整備センター(WEC)という建設省の外郭団体の仕事でダム貯水池の水質保全対策に取り組んでいた。この WEC には建設省の役人の他に大手の土木・機械の会社から出向した社員がたくさんいて、彼がその中の一人だったのです。

彼は大学紛争のさなかに農学部学生会会長に当選し、大学自治・学生自治が危うくなった困難な時期に学生の先頭に立ってリーダーシップを発揮したことはいまも忘れられない。あまり激しいアジ演説はしないタイプで、沈着冷静な行動は学生たちの信頼感を高めていたのだと思います。

30 年後に会ったときも、しゃべり方はほとんど変わっておらず、会社内での信頼も厚かったのでしょう、土木技術者としての発言の裏にはかなりの自信が感じられました。会社では労働組合の仕事もこなし、管理職になってからは都内にある社外の労働組合組織の支援活動も旺盛にこなしてしていました。

あとで聞いた話ですが、その頃彼は地域でも学校の活動や環境活動に力を入れていたので、当時は猛烈な働き方だったのだと思います。

私は彼と再会したあと北海道で仕事をしていたのですが、東京に戻ると彼と度々あっており、そのうちに東京土建組合の勉強会に呼ばれて環境政策の話をした記憶があります。私たちは同じ土木工学の世界から出発していますが、どちらも環境工学の世界へ頭が移動していたのです。これは土木工学や衛生工学の科学技術を、もっと国民に役立つものに転換しようという、先人たちから受け継いだ科学技術者の良心だったと感じています。私が長野県に移住してから連絡をもらっていましたし体も健康そうだったので、彼の突然の訃報に愕然としてしまいました。「これからやってもらうことを残してあったのに」と思った方も多かったのではないのでしょうか。まだまだ楽しい酒を飲みたかった！

○萩原 修二郎 (S44年獣医学科卒)

宮井 迅吉 記 (S46年工業化学科卒)

<萩原修二郎さんの思い出>

萩原修二郎さんは農学部ですが、一般教養のとき学んだ府中キャンパスには駒場寮があり、よく出入りしていたので、この寮にいたほぼ同学年の彼のことは印象深く覚えています。寮は古く汚れていて寒さが近づくと寮生はドテラ姿で過ごし、各地の方言がそのまま飛び交っていました。

寮の移転が課題になり、夜の寮生大会にも参加しましたが、寮長を務めた彼の方言交じりの大声が妙に説得力を持っていて、ある意味でカリスマ的なところも垣間見られました。

農学科を卒業して特産いちご「やよいひめ」で知られた群馬県玉村に戻り農政課長まで勤め上げました。彼に再会したのは、故西川裕人さんの音頭で淵野さんの昇任祝いを 2005 年 6 月 5 日に伊東小湧園で行ったときでした。この頃から「東京農工大学中国留学生と友好を深める会」主催の会合や旅行でよく一緒になりました。桂林に遊んだときは、鳥谷さんや、熱田さんも一緒に若い頃さながらの農学部独特の豪快な掛け合い漫才のようなやり取りが続いたことを懐かしく思い出します。私には純朴で逞しかった「駒場寮」のシンボルのような存在でした。ご冥福を祈念します。

<資料>

1. 農工大学生運動の記録

(ディスカッションペーパー)

ー我々の学生運動を振り返るー1960年代後半から1970年代半ばまでー

瀧野 雄二郎(2011年5月執筆)

(1) 60年代安保前後の学生運動

全学連結成当時(1948年)

政治課題:米軍基地の拡張、安保改定に向けて

破壊防止法／警職法／砂川基地各庁反対闘争／選挙法(学生は出身地での投票)

教育研究:日本農業ゼミナール結成、世界農学系学生ゼミナールへの代表派遣

教授会決議、共感も助言者として参加

*校史資料 NO.11,12 参照

(2) 全学連再建の動向(1964年再建大会)

政治課題:60年安保改定から相対的安定期

日韓条約締結(南北朝鮮の固定、日米間の軍事同盟化)

大学問題

- ・大学管理法案(上程されず)、実質的に大学自治の官僚統制
- ・産軍学の共同研究に対する反対運動
- ・学寮問題

農工大は農学部キャンパスの長期計画とリンク、駒場寮に1号館の建設計画

文部省の○管規、負担区分問題

農工大学:「大衆団交」「確認文書」、学生大会の場での確認書合意

各期的な「確認事項」「申し合わせ事項」

(3) 1968年の「学園紛争」

政治課題:ベトナム反戦、70年安保改定の前夜、核つき沖縄返還協定反対

象徴は「日大闘争」「東大闘争」

◇大学紛争(「闘争」とは、大学の管理運営の民主化(教職員)、学生参加による自治の確立)、

大学の財政基盤の確立と「受益者負担」の強制への反対、福利厚生の方での生活と権利を守り、発展させる運動、学生の自主的ゼミナール活動等、総じて大学のあり方を問い、その制度・理念の改革を目指す闘争。

◇大学側:上からの大学管理法案に反対し、学内民主化、自主的大学改革運動、大学や学問の社会的役割への期待、研究の創造的発展を保障する教育研究体制の確立が目指された。

◇東大闘争の問いかけたもの

- ・矢内原三原則、「東大パンフ」(教授会自治の強調)の克服
- ・東大確認書(1968年1月、七学部集会における確認書)

(4) 東京農工大学における1969年「学園紛争」を振り返る

校史資料 NO.13 参照

◇農学部学生会、工学部学生会が全体の運動をリードした。

「機動隊導入」に対する「抗議声明」

「2.11 団交」の意義

- ・「学生通則」撤廃、大学改革のあり方について問題提起

工学部教授会は、これを受けて正面から「大学改革」の方向性を検討

(5) 「大学紛争」以降の「大学改革」の方向

◇文部省:1971年「四六答申」ー明治5年の「学割」施行、戦後改革の一環で有り「教育基本法」に基づく「教育改革」につぐ「第三の教育改革」

「主眼は、特に高等教育にあった。ポイントは、高等教育の考え方なり、制度的仕組みが、民主教育を言わ

れた戦後教育改革後でも、現実に進んでいる高等教育の大衆化、他方での学術研究の高度化という社会的要請に対応しきれなくなっており、こうした問題の解決策を見附ける必要がありとし、高等教育の多様化と会報、高等教育機関の規模と組織運営体制の合理化、教員の人事制度・処遇の改善、入試制度の改革、高等教育計画樹立の必要性等、高等教育制度全般にわたって問題を提起した。高等教育機関を5種類に種別化する構想、大学の組織を教育上の組織と研究上の組織区別する構想などは特に注目された（東京農工大学60年史P102）

その後の「大学改革は」自主的な下からの改革を閉ざすことになる。

①筑波大学モデル、40年後の独立法人化の大学管理運営方式に「結実」

②中曽根臨教審(1984年)による「大学設置基準の大綱化」へ

教養境域は大学の裁量と意思、「自由化」と「個性化」

現実には、教養教育の実質的な骨抜きがなされる傾向、「専門家」と「細分化」が逆に進む

③大学管理運営の「実利性」と「効率性」の強調、大学の自己点検・自己評価を強いられる

←外部評価に基づく予算配分の見直し、予算の減額

(6)今日の大学危機－財界主導の研究優先。教育軽視

◇「小泉内閣」の文教政策の骨子となった、2001年「遠山プラン」

①経営手法に基づく業績主義の強化、②第三者評価による競争原理の導入と予算も傾斜配分という、まさしく「新自由主義」政策の押しつけ

◇2001年は、省庁再編によって科学技術庁と文科省が合併し、【文部科学省】が発足、【科学技術創造立国】の提唱による、産学連携の強化、競争的な研究環境、財界主導の先端科学技術への産官学の総動員体制の確立　　－未完－

2. 学寮問題のあゆみ

宮井 迅吉(2009年執筆)

1. 今、学寮を語る意味

本学出身の女流作家の初期作品に學寮を「こんなところに公団住宅がある、と沿線走る電車の窓から男子寮と知らずにながめる人たち・・・」と描いた下りがある。學寮が建って学生が入寮したのは1966年の12月であった。40年以上の歳月の間に、いくつかの大学の学寮が廃寮になった。学寮のシンボルであった東大駒場寮は、1991年以降、廃寮の決定に反対してきたが2002年に強制執行された。山形大学学寮は2000年以降、一斉大量処分を経て強制執行された。有無を言わせない文部省(現文科省)当局の学寮に対する扱いを見ていると学寮生活を経験したものとして「大学はこれでよいのか」と危惧せざるを得ない。低廉な学寮の存在は、国民諸階層の格差が拡大する昨今、等しく未来ある青少年の教育の機会均等を保証する砦としての重要性を増している。幸い、本学の學寮は老朽化と時代のニーズに対応した改築計画が進みつつあるという。この時期に本章において、學寮が建つまでの流れを概観することは意義深い。

2. 背景

1965年前後、日本の政治・経済の流れは、1960年の日米新安保条約の調印を巡る政治の季節を経過して、池田内閣の「所得倍增計画」が詠われて、日本の大企業が成長し、海外に進出する時期にあった。国が学寮への方針を明確にし始めたのは1962年7月25日に文部省の諮問機関である学徒厚生審議会が「大学における学寮の管理運営の改善とその整備目標について」(以下、「学徒厚生審答申」と略。)という答申を行ったことに端を発する。学徒厚生審議会は日本中に吹き荒れた「60年安保」闘争の翌1961年4月に設置され、10回にわたる総会と7回にわたる施設に関する部会、13回にわたる答申案作成の小委員会を開催して、慎重かつ入念に準備していた。1966年7月からは第一法規出版から「厚生補導」という雑誌も刊行された。

學寮の農学部的前身である駒場寮の暦年関係者による労作である「駒場の青春」(1979年刊)には、戦後、先鋭な政治課題があったとき、寮生が敏感に反応していたことが記されている。メーデー事件、砂川闘争、60年安保闘争などであり、更に製糸教婦史の「絹のむすび」にも、1952年の血のメーデー事件に遭遇した寮生や級友の様子が綴られている。本学の正史には記録がないが、學寮の前身である工学部西ヶ原寮、農学部駒場寮とも、同

じ多摩近隣地域の砂川事件を巡って、警察官が立ち入り、寮生を逮捕するという事件があった。為政者は政治的にも学寮を単に「厚生施設」として放置することを最早、許さなかった。

学徒厚生審答申は、学寮は「教育施設としての意義が見失われている」とし、その後1964年8月には「〇〇大学学寮管理運営規則(参考案)(通称「〇管規」)を提示して、学寮への管理を強化し、遡る同年2月には「学寮における経費の負担区分について」を示し受益者負担の原則を明確にして、厚生施設としての意義を後景に追いやる姿勢を明確にしたのである。

3. 新寮要求と学寮規則反対の運動

3.1 新寮建設の要求： 一方、当時、存在した全国の大学の学寮は、終戦直後の経済的な困難から、旧制高校や、兵舎、工具寮、倉庫を改造して発足したものも少なくなく、老朽化が進んでいた。本学においても西ヶ原寮に入寮した当時の印象を、櫛寮の第三期寮長は寮誌に「これが人間に住むところか」と書いていた。また当時の教育白書は「このまま放置されるならば低い所得階層に属する国民にとって教育の機会均等は有名無実のものになる」と警告していた。当時の本学は、学生数の増大に伴う入寮希望者の増加に対して、毎年、入寮希望者の8割程度しか収容できていなかった。

これらの事情から全国に新寮を求める声が広がった。全国の大学寮の連合体である全寮連の行った交渉において文部省は「1962年度から全国の国立大学に合計6万5千人収容できるだけの新寮建設十カ年計画を実施している」と述べた。

本学においても1960年以降、女子寮の増設が課題となり、長期計画にもとづく農学部三科の実験研究室建築のための土地利用計画において、既設の3合館、2号館に続いて1号館の建設予定地として当時の駒場寮のあった場所を使うことを構想していたから、本学においては新寮建設の帰趨は特別に全学的な影響をもっていた。

3.2 2学生・寮生の学寮規則への反対： 当時、農学部の駒場寮、工学部の西ヶ原寮ともに寮生が民主的に決定した自治規約にもとづいて運営されており、特段の問題はなかった。

しかし、学徒厚生審答申の2年以上まえの1962年5月に唐突に「〇管規」を先取りするかたちで「学寮規程(案)」が示された。この内容は①学寮の管理は学生部長にある、②学寮の運営は、あらかじめ寮生規約を定め、教官の助言を得て、寮自治組織を通じて行う、③入退寮の学生部長への届け出の義務などが明記されていた。6月、駒場寮は寮生大会でこの案に反対決議をした。その後、厚生補導委員会との交渉により新寮建設に際して、この規程(案)を付けて文部省に要求したことが明らかになった。大学の評議委員会はこの年の12月にこの学寮規程をはやばやと正式に決定したが、翌1963年度には新寮予算は下りず、「新寮は建たず寮規則のみが適用される」という学生・寮生にとっては最悪の事態になった。当局がかくも拙速に新寮建設を急いだ背景には長期計画にもとづく駒場寮跡地への農学部三科の実験研究室の建築計画があったからである。おりしも1962年6月には教授会の自治を縮小する「大学管理法案」原案が示され、心ある大学人に不安が広がっていた。危機感を強めた寮生・学生は駒場・西ヶ原・楓寮(以下「三寮」と呼ぶ)は新寮建設委員会を設置して学寮規則反対の運動を強化した。この委員会からは「負担区分をどう捉えるか」「学寮規則の狙いと本質」という小冊子が発行され、寮生・学生に普及された。寮生たちは連日、登校してくる通学生にビラを撒き、クラス討論を呼びかけた。全寮連、全学連などが機能マヒしていた時期、本学の学生・寮生が独自に開拓した先駆的な生活点での運動であった。その後、全国的にも当学に類似した学寮問題が多発して、1965年6月に朝日ジャーナルは「揺らぐ学寮の自治」(一続発する紛争の背景一)を特集し、新寮との引き換えに管理強化を狙う当局との自治権闘争であると書いた。その後、1969年4月には法律雑誌「ジュリスト」が「学寮・学生会館と学生」を書いた。負担区分にしても「100円が300円に」という今日の金銭感覚では些細に見える増額に対しても当時の学生・寮生は受益者負担という厚生施設を否定する思想を読み取り、危機感を表明した。爾来40年、国立大学法人の授業料が私立大学と大差ないという事態に至っていることを考えると、「困窮者にも高等教育を」の教育の機会均等の維持・発展にかけた寮生・学生の情熱は歴史に輝くものである。

4. 本学における学寮問題の展開

本学における学寮運動の歴史は、「駒場の青春」に詳しいが、その元になったものは入寮後の寮委員会が全寮連の活動者会議に報告するために、関係した主要メンバーが分担起草した「農工大新寮運動 5年間の歴史と総括」(ガリ板刷り12ページ)という文書である。

この文書では運動の「第一期」としてはやばやと全国に先駆けて、学寮規程が決定される一方、寮予算がおりず「学長規程に反対し、新寮を要求する」という先駆的な運動が起きた、上記の1963年末までの時期をあげている。以下、運動の展開を概観する。

「第二期」は1964年に入り、「負担区分」「〇管規」が提示され、新寮計画と学寮問題が全国的な課題になり、

本学においても新寮予算が配当され、建設場所が検討され、このなかで学寮規程が教授会で正式決定される1965年9月末までの時期である。

当局は当初、新寮建設場所として梶野農場を検討し、600人規模を考えていた。学生は、三寮の協議会による学校交渉から、この新寮建設を全学にかかわるものとして、学生自治会、生協、学園祭実行委員会などの諸組織に呼びかけて1964年11月に学内合同委員会を発足させて運動を拡大展開した。都内、各大学寮の寮連集會が開かれ、1964年6月には全寮連が再建され、12月には全寮連としての文部省交渉を行った。本学では1965年1月には自治会との共催で200人規模の集會が開催され、三寮の足並みもしだいに揃ってきた。新寮建設委員会は「個室か4人部屋か」等、生活点であるとともに自己陶冶の場所である寮生活のあるべき姿について意見を出し合い、寮生の多数意見に基づいて当局に、「4人部屋」の要求を出していた。3月に建設場所が、現工学部内東北の隅に決定し、4月には新寮予算が下りた。

一方で、1965年4月には当局が「〇管規」提示後のあらたな学寮規程案を示し、あらたな緊張が高まった。学生自治会からの教授会へのアピールが出され、連日、ピラが配られ、クラス討論、ゼミ討論が行われ、通学生のための「新寮ゼミナール」が開催された。学部長と合同委員会との団交が行われた。教授会での正式決定が予定された1964年6月3日には本館前で400人規模の学生集會が行われ、市内デモで市民に訴えた。教授会は、学生の意見を聴き、正式決定を見送り、規程の修正を約した。6月29日には修正案を巡って、学長団交が行われ、翌30日には工学部でも学生集會があり、7月1日には300名規模の全学集會が開催された。8月11日にはかつてない一橋・商船・農工3大学合同教授学生懇談会(教官30名・学生50名)が行われ、「学生のいない夏休みには決めるな」と教授会への傍聴出席を要求し、暑く燃える夏となった。

9月には農工両学部の教授会は修正案を了承したが、学生は譲らず、話し合いが続行された。しかしついに9月28日、評議委員会は「学寮規程反対」の怒号のなかで学寮規程を正式決定してしまったのである。

「第三期」は、学寮規程の制定後、新寮が完成し、寮運営を巡って細部の交渉が進展した時期である。学寮規程の制定により、学寮は「規律ある団体生活を通じて人間形成に資する」施設とされ「管理のための学寮委員会」が設置され、寮生が寄宿料以外の経費の支払いが明示された。しかしこの間の交渉で、「学生の自治活動は尊重する」などの申し合わせ事項が確認されており、問題は細部に移ったが、交渉は膠着した。運動の高揚のなかで西ヶ原寮は1966年1月19日に寮生大会で、全寮連への加盟を決定した。

1月下旬、新寮の定員が500名から340名への削減が連絡され、駒場寮生大会は抗議声明を発した。入寮の時期や条件などが現実課題になるなかで新寮工事は進み、第一期工事180名分は1966年4月23日に竣工し、5月9、10日には学生の参観が行われ、一般公開され、ほとんど入寮可能な状態になった。学生・寮生は「入寮の時期は学生が決める」「4月以降の新入生はいったん旧寮に入寮させよ」としたが、当局は、「学寮規程を認めよ」と強硬で、入寮条件が重要な課題となった。

「第四期」は1966年4月以降、新入生を迎えて、入寮するまでの時期である。学生・寮生は①希望者全員を収容する民主的新寮②自治規約の実質的適用③女史寮の建設④スクールバスの運行⑤引越し費用の保証⑥炊婦の公務員化⑦学寮規程反対⑧負担区分反対⑨寮費三倍化反対⑩諸設備の要求などの総合要求を掲げて、クラス討論を行い、6月21日には300名規模の学内集會を開いて、新寮問題の全学的な意味を確認した。

この年、5月には女子寮20名分の建設が内示され、9月には第二期160人分が竣工し、いよいよ入寮条件が目前の問題になった。駒場寮跡地の使用計画がある当局は5月末頃から再三、学寮規程の容認を前提に早期入寮を打診しており、「長期計画の円滑な遂行のためには、9月中旬に移転が必要」とした。こうして中間試験の時期を前に本学における激動の10日間が始まった。

5. 無条件入寮と大学人の英断

駒場寮では、入寮後も、学寮規程に反対する運動を継続する展望を確認しつつ、「現状のまま新寮に移転する」という無条件入寮の方針を確認した。9月22日には異例の教授会との合同協議が行われ、24日には団交があり、学長は試験の延期を前提に9月中の移転を懇願した。24日夜、駿河湾台風が襲い停電し、蝋燭の明かりのもとではほぼ全員参加の激論が続いた。「規程の撤回まで入寮すべきでない」「入寮したら当局に押し切られる」「長期計画を重視し、貸しを作って入寮し継続交渉を」という意見に別れた。深夜2時に至り「規程の強制実施反対」「試験の延期」「引越し日は休講」等を前提に無条件入寮を決定した。25日の団交で寮生の要求が確認され、更に「西ヶ原も無条件入寮を」と要求した。しかし長期計画の対象でなく移転を迫られていない西ヶ原寮では「移転して闘えるか」という意見が多数を占め、27日の寮生大会で駒場寮の移転を否決した。翌28日、近藤学長は混乱を陳謝し、移転の必要性を説き、全学の協力を請う異例の声明を発し、掲示した。同日、夜、西ヶ原寮生は、駒場寮生の傍聴するなかで、再度、審議し、激論を交わしてようやく駒場寮の移転を承認した。

翌29日には駒場、西ヶ原寮長、農工両学部自治会委員長、農工両学部長及び学生部長との間で、仮移転にあ

たって「寮規程は適用しない」「寮費は従来どおり」という覚書が調印された。同日、駒場寮生はストームを行いキャンプファイヤーを焚いて最後の夜を飾り、翌快晴の9月30日、意気揚揚、新寮に乗り込んだ。このとき新寮にまだ名前はなかった。その後、1966年12月15日までに全学をあげて正式入寮について協議を重ね、「確約事項」「申し合わせ事項」を調印した。そのすべてを記載はしないが、①負担区分を払えない人への具体的措置の検討②炊婦公務員化への努力③4棟目建設への努力と西ヶ原和寮の継続使用⑤両運営は自治規約による⑥学寮規則の継続話し合い等、その他、⑦寮関係予算および人事についての学生との事前協議といった先駆的とも言える内容を含んでいた。これは「学寮規程を実施しなければ寮予算を下ろさない」という高圧的な文部省の態度に、心ある大学人が一致して危機感を募らせ、学生・寮生の主張に耳を傾け大学の自治と学生の自治権を探求した結果である。その後、12月17日、西ヶ原寮生が正式入寮して翌1967年1月25日に自治規約を制定し、2月1日に統合寮が発足した。更に寮名決定投票を行って「櫛寮」が誕生し、「新しい寮づくり」が探求され、半期ごとの寮委員会寮長は、しばらくの間、農工寮学部から交代で選出された。これが現在の櫛寮の礎である。

6. 本学における学寮問題の歴史的意義

1970年初頭まで日本を覆った大学問題に関しては「大学問題総資料集」(全八巻)が1972年に有信堂から出版され、第五巻に「大学の学生自治と参加権」がある。学寮は生活点であり、当事者のいずれかが対応を誤ると東京学芸大雄逸寮や東京学生会館の例などのように警官隊導入や長期の全学ストなど展望なき泥沼に陥りかねない。本学の経験は、粘り強い交渉や全学的討論を通じて大学への為政者の高圧的介入に全大学人が危機感を共有し、その結果、学生・寮生の自治権のあり方を自主的、創造的に探求したものである。今、大学の状況は大きく変貌してしまった。この変貌は高学歴ワーキングプアを生み出す今日の時代の閉塞感と無関係ではない。社会の未来を担う学生と真理探究の徒としての大学人が、ときの支配的思潮から独立して高度で自由な自治的精神を保持することはその時代の健全性を示すものであり本学における学寮問題の経験はそのことを示すささやかな貢献であった。改築される櫛寮に入寮される諸氏や、大学の現状を憂う大学人が再び、過去の経験に学ぶ日が訪れることを望んで止まない。

(2009 年執筆)

3. Nets 風の記録のこれまでの活動記録

瀏野 雄二郎

東京農工大学同窓会「同好会Nets風の記録」

—地域再生・地域活性化に東京農工大学の知的資源を活かすネットワーク—

はじめに

本同好会は、学生時代に学生自治会活動や生活協同組合活動、学生寮運営等にかかわり、「社会貢献」的な意識逞しく過ごした同窓生の仲間の同好会です。学生時代の気持ちを堅持しつつ、「大学の知的資源を産業経済の発展及び持続的社会形成に活かすための協力・連携活動」を目的にした諸活動を行っています。

現在、主に1965年～1975年に学生時代を過ごされた方が中心ですが、ネットワークを更に次の世代にも広げ、多世代の多彩な活動を紹介しあえるような同好会を目指しています。

会員になった場合は、会からのメール等による連絡を受けて、可能ならばイベントその他に参加いただくとともに、近況報告その他、私共の活動に有意義な情報等をお寄せください。

本会は、同窓会からの交付金をいただいております、会費等の負担はありません。

興味のある方は是非、事務局の瀏野雄二郎 fuchino@cc.tuat.ac.jp までご連絡下さい、

同好会会長 宮井迅吉(工化 S46)

1. 本会の活動内容

- (1) 学生の就職・就農支援活動
- (2) 当部会の目的に沿った諸活動の経験交流会の開催
- (3) 当部会の会員が共有する課題に関するシンポジウム、フォーラムの開催及び協力
- (4) 校史資料及び同窓会関係資料の収集、整理作業、保存作業等の活動

2. これまでの当会の活動(敬称略)

新型コロナウイルス感染症の蔓延への対応で、2019 年～ 2020 年度は本会総会及び会員の交流事業等については、開催にいたりませんでした。2021 年度以降については長塚隆会員よりオンライン会議の提案があり、

2022 年 4 月 24 日に在京幹事を中心に長塚会員をホストとする Zoom 会議を開催、今後の本会のこれまでの活動内容を振り返り、これからの活動方針等を検討しました。以下にこれまでの活動概要を報告します。

【Ⅰ】物故者を偲び、思い出を語り、その活動をまとめる。

2016 年 8 月 6 日 大崎公男(化学工学 S48 年卒)

2017 年 3 月 29 日 木塚敏男(獣医学科 S52 年卒)

【Ⅱ】会員の共有するテーマに関するシンポジウムなどの開催及び協力

2014 年 12 月 6 日開催

◇地域活性化フォーラム ー今、農の魅力を語るー

第一報告 農水省の就農支援対策について

滝沢将史(農学部大学院共生持続社会学専攻 H10 年修了、
農水省大臣官房政策課 課長補佐)

第二報告 新規就農者ー農の魅力を語るー

桂川雅信(農学部農業工学科 S47 年卒、川崎市役所、大学非常勤講師退職後、
新規就農者相談所開設、現在中川村村議)

第三報告長野県上伊那郡中川村の農業実態と新規就農者の受入について

富永和男(中川村振興課長)、大島太郎(株式会社、大島農園代表)

第四報告 農工大学生サークル“八十八”と交流

人見太郎(本田技研汎用エンジン部門技師から千葉県香取市に就農、

第五報告 青年就農給付金事業について

水沼花織(全国農業会議所、担い手・経営対策部主事)

2017 年 3 月 29 日開催

◇「大学の使命と軍事研究を考えるフォーラム」

大学教職員組合と同好部会の共催

防衛装備庁の「安全保障技術研究制度」による大学への研究費供与が、大学のあり方にいかなる影響をもたらすか、本学の大学憲章を踏まえて検証を重ることが必要であることを確認した。

第一報告 防衛省の「安全保障技術研究制度連絡」設立の背景とねらい

多羅尾光徳(本学准教授 軍拡共同反対連絡会事務局)

第二報告 日本学術会議「安全保障と学術に関する検討委員会」の『中間とりまとめ』

及び『軍事的安全保障研究に関する声明(案)』ー評価と問題点

湊澤栄(本学教授 日本学術会議第二部会員)

第三報告 経営技術論的で視点から見たディユアルコース

佐野正博(元本学教授、明治大学経営学部教授 学術会議連携会員)

2019 年 3 月 30 日開催

◇砂川事件裁判の再審請求の支援活動の呼びかけ

砂川事件裁判の全過程を通して、安保条約と憲法の関係、治外法権的な米軍基地の存在と日本国民の人権などについて、あらためて「伊達判決」を学び、生かす現代的意義が深まった。

第一報告 歴史的な『伊達判決』を今日に活かそう

武藤軍一郎会員(本学農学科 S34 年卒 九州大学名誉教授)

第二報告 マッカーサー大使干渉文書に導かれた「砂川」との遭遇

新原昭治(日本共産党常任幹部会員、国際委員会責任者)

【Ⅲ】優れた地域再生・地域活性化活動の取り組み・実績紹介と経験交流

第一回 2017 年 3 月 31 日開催

任海正衛(電気工学 S44 年卒)千葉県四街道市で里山保全活動の実委員会代表

任海会員が代表つとめる市民グループ(たろやま会)が、2015 年国交省「都市景観大賞優秀賞」授賞、また、学校や企業や行政機関などと連携して里山保全に取り組んでいる活動に対して「千葉コラボ大賞」が授与された。

藤田正三(林産学科 S51 年卒)茨城中央園芸協同組合専務

外国人技能実習機構から「受入優良団体」に認定される。

第二回 2018 年 3 月 31 日開催

長塚 隆(農学科 S45 年卒)鶴見大学名誉教授、(情報知識学会会長)

海外の公共図書館の様子を紹介。加速化するデジタル化に、学校や地域の図書館はどのように対応できるか議論。著書「挑戦する公共図書館」

宮井迅吉(工業化学科 S4 6 年卒)

自然エネルギー推進映画「日本と再生」上映(府中市と東京農工大学、同窓会の共催)についての協力依頼

* 2019 年～2020 年 新型コロナウイルス感染症への対応で、総会及び講演開催に延期した。

第三回 2021 年 6 月 19 日開催

上田勉(農業生産工学 S46 年卒) 福島からの報告―復興とは一体何なのか？

東日本大震災から 10 年を経過、福島県に移り住み復興支援活に専念してきた上田会員に復興の現状と課題を報告いただいた。

*なお、このセミナーに出席された、柄澤地平君(情報工学 H24 卒)から都議選立候補の挨拶を受けました。

第四回 2023 年 3 月 23 日開催

阿部 治(環境保護学科 S54 年卒)立教大学名誉教授

阿部治氏は、「国連ESD(持続可能な開発のための教育)の 10 年」の提言・取組や日本をハブとした環境、教育国際ネットワークの構築などを通じて、日本の環境教育の国際化ならびに世界の環境教育の発展に大きく貢献したことが評価され、日本自然保護大賞 2020【特別賞】沼田眞賞を受賞。本会として、SDGs(持続可能な開発目標)に関わる、自然保護や生物多様性について、国際的な視野での講演をお願いした。

第五回 2023 年 11 月 18 日開催

蓮池安彦(獣医学科 H8 年卒)、社団医療法人社団健生会理事(立川相互病院の母体)

蓮池氏は、多摩地域の高濃度 PFAS 汚染問題について、国や自治体行政の施策、学校教育現場や地域住民の間でも注目されてきましたが、健生会 PFAS 専門委員会事務局として「多摩の PFAS 汚染を明らかにする会」(2022 年 8 月 7 日発足)に参加、多摩地域 800 人の血液検査に当たり、医療従事者として重要な役割を果たしてこられました。この問題の所在、発生の広がりを防ぐために医療従事者として努力されてきた経験について講いいただいた。

第六回 2024 年 4 月 13 日開催

三浦慎吾(本学林学科 1967 年卒、理学博士、早稲田大学名誉教授)

三浦氏は、日本の哺乳類学について研究研鑽をつまれ、高崎賞(1981年)、環境保全功労者環境大臣表彰(2013年)を授与され、日本哺乳類学会会長を歴任され、現在自然環境研究センター(理事長)を務めておられます。多くの著書及び研究論文を発表されてきましたが、特に、自らの研究史も込めたと思われる、「動物と人間―関係史の生物学」(東京大学出版会)の大著が、アライグマやツキノワグマなど野生動物などの野生動物被害が喧伝される中で注目され、本同好会でも講演を依頼することになりました。本講演会では多面的な質疑、議論が展開されましたが、「私たちは資本主義の呪縛から解き放たれ、経済のあり方により自由でなければならない。持続可能な社会とは、生物多様性の歴史性や連続性を確保し、生物間の相互作用や循環を保全し、環境との一体性を保証する経済の仕組みをつくることにほかならない。」というまとめの一文が大きな示唆を与えていただきました。以上

4. 思い出の写真（以下、敬称略）



2011年5月4日 退職者を囲み、再出発を祝う会



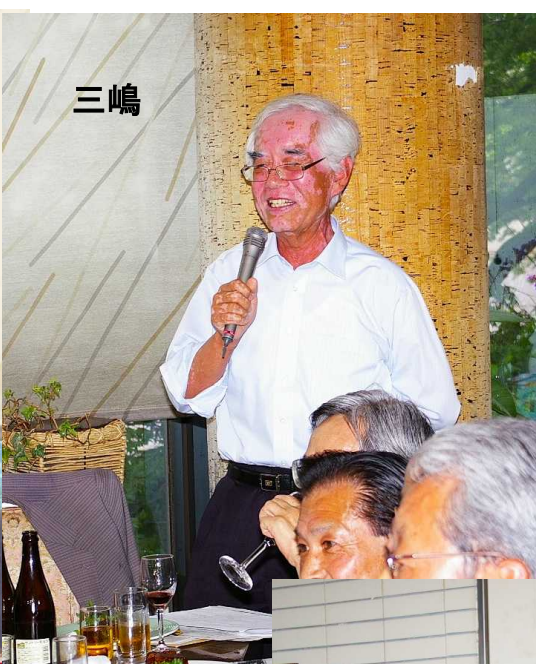
2013年12月 風の記録Nets総会後の懇親会 —写真1—



岩崎徹先生の古希・退職記念と札幌大学岩崎ゼミ35周年記念パーティー



岩崎



三嶋



皆川



桂川

大崎

小川

上田



皆川

三浦

鈴木

飯田



鳥谷



西村



富田



宮井

岩崎

淵野

渡辺



谷内



渡辺

淵野





小川

武藤軍一郎



任海



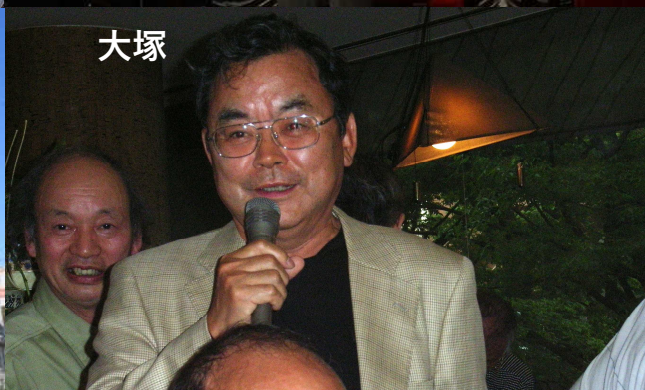
三浦



小川



上田



大塚

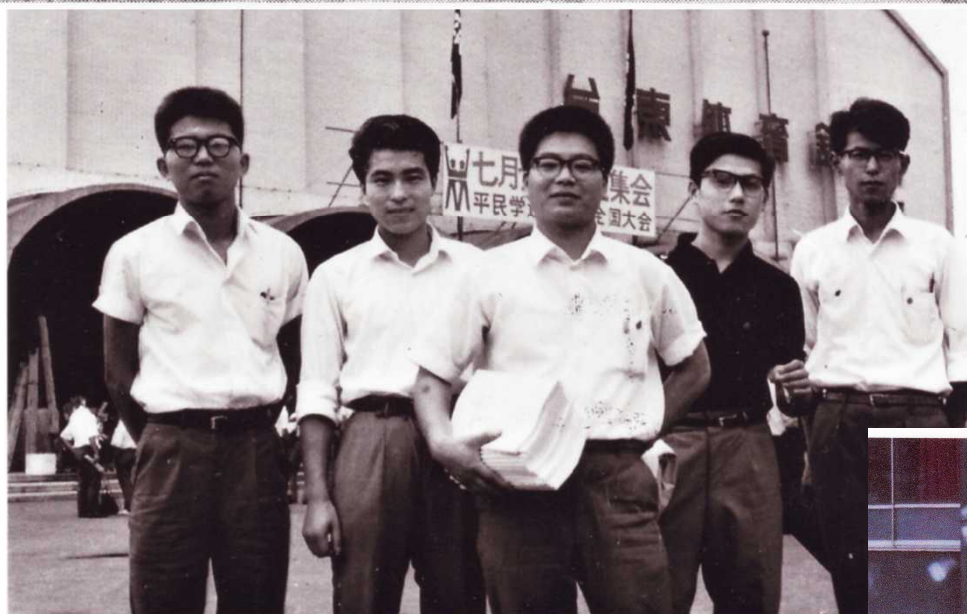
風の記録Nets講演会風景





1966年9月 全寮最後の記念撮影

1966年全寮最後の記念撮影
提供:間瀬真人(植防S44卒)



1980年12月
駒場寮記念碑 建立

1964年前期 駒場寮委員
二神勝利 星野浩一 竹内健三 畑中勲 間瀬真人



故人の思い出

田淵博さん



大崎公雄さん



熱田正行さん



高嶋祐治さん

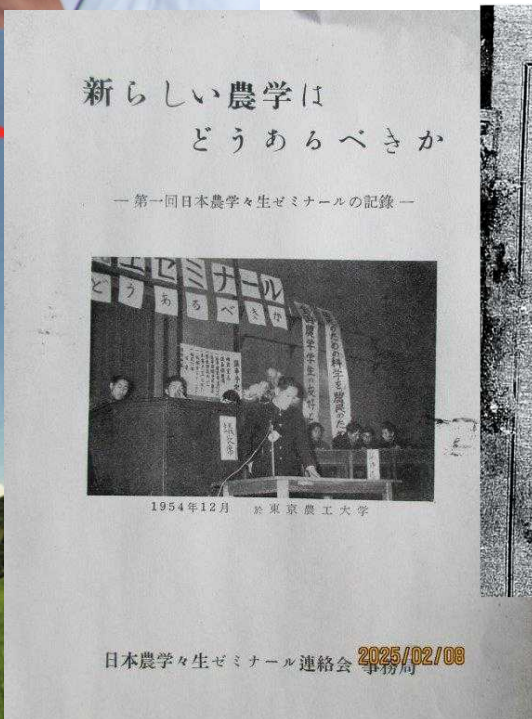


大崎公雄さん

萩原修二郎さん



熱田正行さんの
オリジナルCD



1954年第1回農ゼミの記録
(横林さん提供)



寮建設委員会記録
(大浦ノート)

<編集後記>

昨年2月に「風の記録」NO.2 を作ったらどうかと、現編集員で持ち上がり、みなさまにお願いしたのが 11 月。完成した 2025 年 4 月までおおよそ 1 年間が経過しました。すでに前回作成した名簿は有りましたが、やはりあれから 10 数年が経ち、所在の分からない方が増えていました。相談しながらそろえた名簿 95 名にメール、郵便で依頼し、なんとか 84 名には届けられたように思います。

集まった原稿は 36 名分ですが、多くは卒業から概ね半世紀経過した今、少なくとも 84 名の方の所在は確認できたことは喜びです。また、やりとりの中で 57 名のメールアドレスも確認できました。

集まった 36 名の大半はメールで原稿を送って下さり、とりまとめ作業は当初の予想よりは順調に進みました。

依頼するにあたり、編集側としては様式を統一した方が良くと考え、一人 1 ページを基本とする執筆要領を示しましたが、届いた原稿は様々でした。もちろん様式に沿ったものが多かったのですが、中には大長文やごく短いものなど、様々な形式で届くことになりました。

そのため、まとめるに当たっては当初お願いしていた枠がじゃまとなり、取り外すことにしました。懸命に枠に収めるように努力された方々にはお詫びしたいと思います。また、本文中の区切りの付け方など(番号など)の記述の一部を除き、概ねみなさまの原稿どおりにいたしました。

執筆に当たって、何を書くか、参考までに幾つかの例示を致しましたが、全くの杞憂でした。皆さん、書きたいことを書きたいように書いて頂けたと思います。中身はそれぞれ千差万別ですが、いずれもその人らしさが生き生きと伝わってくるものばかりでした。

農工大卒業後、概ね半世紀が経ちました。本冊子により旧友達の人生の一端を知り、懐かしむことができること間違いなしです。そのことだけでも「風の記録 NO.2 」を作って良かったと思いますが、そればかりではなく、旧友達のこれまでを知ることで、まだまだ続く人生に新たな元気が湧いてくるように感じます。是非全てをお読みいただきたいと思います。原稿を寄せてくれた方々に改めて心から感謝いたします。

最後に

SNS 社会の急速な広がりの中、世界に広がるフェイクと独善、顕在化する気候変動。トランプの登場がそれらを一気に加速させはじめています。

日本でも、ロシアのウクライナ侵略を憂う世論を背景に一気に軍拡が進んだばかりでなく、陸海空の自衛隊を一元的に指揮する「統合作戦司令部」が発足。憲法を無視して米軍指揮下に入り、一気に最前線で戦うことになる準備がいつの間にか進んでいます。21 世紀は混沌の世界にはまり込んでしまったかのようです。

脅かされはじめた平和と民主主義、なんとか食い止めなければ、という想いがつのるばかりです。

2025 年 4 月 15 日 小川和雄(筆)

風の記録 NO.2 2025 年 4 月 15 日発行
編集・発行 風の記録 NO.2 編集委員会
渕野雄二郎 渡辺研 宮井迅吉 長塚隆
小川和雄 (代表)宮井迅吉<協力>桂川雅信
東京農工大学同窓会同好会 Nets 風の記録